# 第2章 遺構と遺物

# 第1節 遺跡の概要と基本土層

#### 遺構と遺物の概要

高堂太遺跡の2次調査は,南北2箇所の調査区を対象として実施された。調査面積は北区2,900㎡・南区2,700㎡の計5,600㎡である。この調査によって検出された遺構は,掘立柱建物跡25棟・溝跡33条・土坑65基・地鎮遺構1基・小穴約2,000個を数える。

北区からは、掘立柱建物跡 6 棟・溝跡 9 条・土坑 9 基・小穴 68個が検出された。掘立柱建物跡はすべて小規模で、周溝状の溝跡と機能して居住域を形成している例もある。こうした居住施設は、会津盆地に立地する古代の集落遺跡でたびたび報告されている。これらの遺構の多くは、平安時代に比定され、一部は近世以降と推測される。したがって、北区は平安時代の集落跡を主体とすることが判明した。

南区からは、掘立柱建物跡19棟・溝跡24条・土坑56基・地鎮遺構1基・小穴約2,000個が検出された。これらの遺構は、中世の下高額館跡に伴う遺構群とそれより古い遺構群に大別することが可能である。館跡より古い遺構として小規模な溝跡と土坑があり、これに建物跡を構成した柱穴が伴ったと考えている。調査区南端から検出された石組みの井戸跡は、古代の例としては特筆に値する。

館跡に伴う遺構群には、館跡内部を区画する溝跡群と居住施設や倉庫などと考えられる掘立柱建物跡群、そしてこれらに付随する井戸跡や土坑などをあげることができる。また、金属製容器と磁器皿をまとめて埋納した地鎮遺構は、県内初例となった。

出土した遺物は縄文土器 1 点・土師器6,909点・須恵器940点・陶磁器124点・金属製品11点・石製品54点・有機質遺物15点と多岐にわたる。土師器・須恵器は特に南区南端部から多く出土し、特に前述した井戸跡とそれに接する溝跡から多数まとまって出土した。陶磁器や金属製品・石製品の大部分は南区から出土する。陶磁器には古代末から中世初頭に属するものと、中世後半のそれの二者が存在する。数量としては後者が多く、溝跡や土坑・柱穴などから出土することから、館跡の年代を示す資料と考えられる。

# 基本土層 (図5)

基本土層の認識にあたり、平成17年度の1次調査による成果を基に土層の対応関係を確認した。 ただし、地点により土質に差異がある際は、対応する土層番号を細分する形で観察・記録を行った。 したがって土層番号が同じでも、若干の違いがあることを断っておく。

土層は、LI~Ⅲの7層に大別される。各地区に分布するLIV上面の層理面で追っていくと、北東から南西に緩やかに傾斜する旧地形が復元された。以下に土層の特徴を述べる。

- LI:調査区の全体を覆う表土・盛土・耕作土を一括する。層厚はおおむね20cm程度で、耕作土の 厚い北区では40cmを測る。この地区では表土をLIa、耕作土をLIbと細分した。
- LII:暗い色調の粘質土で、南区のみで確認された。層厚は $0 \sim 5$  cmと薄い。本層中に土師器片・ 須恵器片が含まれ、本層上面で館跡に伴う遺構や $12 \sim 13$ 世紀に属する溝跡が検出されている。
- LⅢ:比較的暗い色調の粘質土である。 1 次調査では砂層と報告されているが、今回の調査区では 粘性が強くなっている。南区北端の狭小な範囲に分布する土層で、 LⅢが堆積していない範 囲で遺構検出面となっている。本層中には遺物は含まれない。
- LIV:明るい色調の粘土層で、北区ではグライ化した本層上面が遺構検出面であった。粘性が強く、 乾燥してひび割れるなど、養生に苦労した。また、南区南部では本層上面から、平安時代の 遺構や柱穴などが検出されている。無遺物層である。
- LV:含有物として径 $1\sim 2$  cmの沼沢パミスを含む。1 次調査同様,本層および下層から遺物は出土しなかった。北区の遺構底面は、本層に達していることが多い。

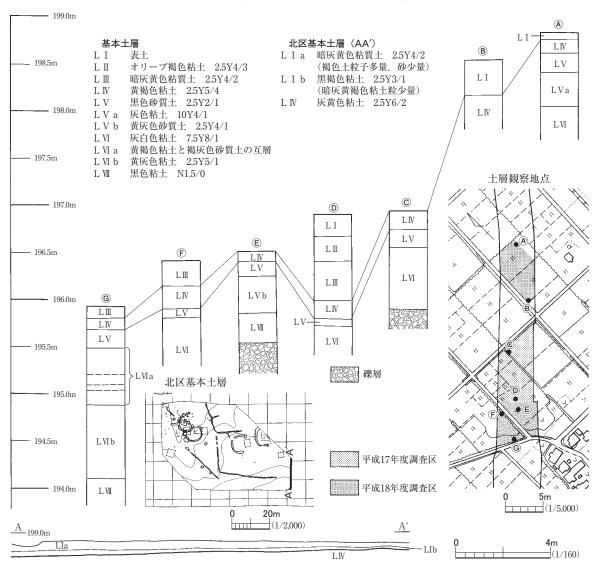


図5 基本土層

- L V a : 砂利を含み L V に類似するが、粘性が強い点で異なる。色調と L  $\Pi$  との関係から L V に含めて考えている。
- LVb: SD18の側壁で確認された礫層で、約80cmの層厚をもつ。本層の下層からLVIに対応する 粘土層が存在することから、1次調査のSD3で指摘された礫層とは別な土層と判断される。
- LVI: 灰白色を呈する、しまりが弱く粘性は極めて強い。無遺物層である。SD17・18・31などの 底面は、本層に達している。
- LVIa:南区南端でのみ観察された層で、粘土層と砂層の互層である。層厚は60cmにもおよぶ。
- LMb:LMa同様、南区南端でのみ確認されている。色調はLMより黄色が強い。
- L Ⅲ: 南区西部で確認された層で、沼沢パミスを含まない点からL V とは区別している。E 地点の 所見からは、本層の下位に礫層が確認されている。 (佐藤)

# 第2節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、25棟検出された。内訳は、南区19棟、北区6棟である。南区の建物跡は、いずれも中世方形館跡に伴うものと考えられる。昨年度の成果と合わせると、これで館跡の建物跡数は計20棟となった。一方、北区の建物跡は、平安時代の集落跡に伴うもので、会津地方に特有な溝跡とセットになるタイプが2棟みられる。

# 1号建物跡 SB1

### 遺 構 (図6 · 7, 写真9 · 47)

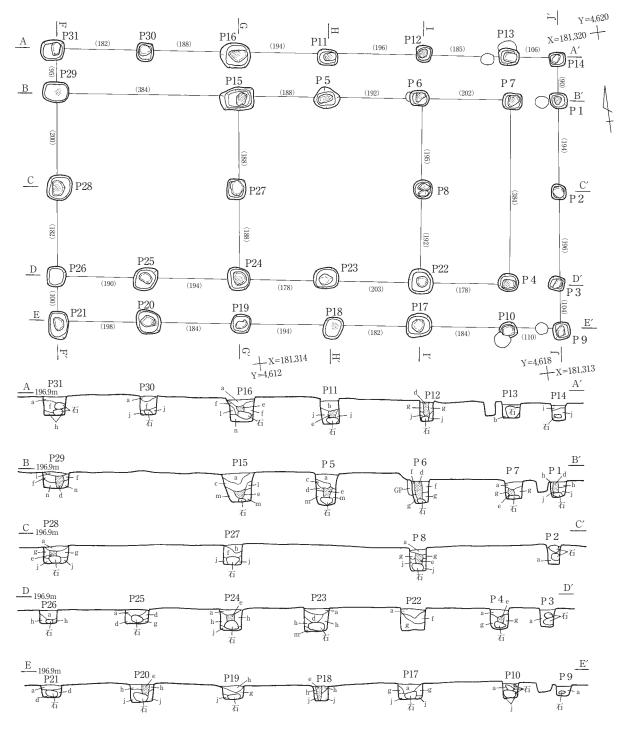
本遺構は、南区で検出された中世方形館跡の主殿とみられる東西棟の建物跡である。館跡のほぼ正面奥に位置し、池跡と推定される SD7・18に面している。また背後には、3.5mの間隔をあけて館の北辺堀跡(SD1)が併走しており、昨年度の所見から中間には土塁が存在したと推定される。

本建物跡は、同じく主殿とみられる  $SB18 \cdot 19$ と重複し、古い順から  $SB18 \rightarrow SB1 \rightarrow SB190$ 変遷が確認されている。したがって、本建物跡は中間時期の主殿にあたる。調査区内の位置は、 $B3-A8\cdot 9$ 、 $B8\cdot 9$ グリッドにまたがっており、L II ないしL III 上面で検出された。昨年度調査では北東部分が検出されており、今回全容が判明している。主軸方位は、 $N8^\circ$  Eである。

次に構造をみていくと、本建物跡は、 $2 \times 5$ 間の身舎に北・東・南の3面で縁を有している。規模は、東西長が北側柱列10.52m、南側柱列10.52m、南北長が、西側柱列5.71m、東側柱列5.84mである。また平面積は、身舎36.5m<sup>+</sup> +縁21.9m<sup>0</sup>の58.4m<sup>7</sup>で、両者の比は3:2と計算される。

身舎は、内部空間が 3 分割され、中央と西側は  $2 \times 2$  間の相似正方形をなし、東側は  $1 \times 2$  間の縦長の間取りとなる。柱間寸法を示しておくと、桁行き長は、北側柱列が総長9.66m = P29 - P15 間3.84m + P15 - P5 間1.88m + P5 - P6 間1.92m + P6 - P7 間2.02m、南側柱列で総長9.43

# 第2章 遺構と遺物

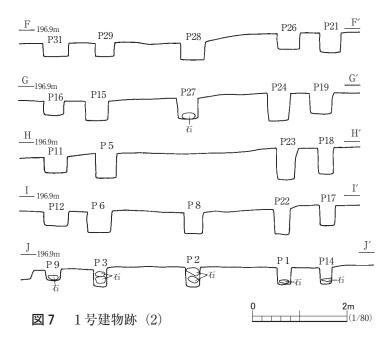


#### 1号建物跡内堆積土

- a 黑褐色土 2.5Y2/2 (黄褐色粘土塊多量,炭化物微量)
- 暗オリーブ褐色粘質土 10YR3/3 (黄褐色粘土塊多量)
- 黒色土 10YR2/1 (黄褐色粘土粒少量) 暗オリーブ褐色土 2.5Y3/3 (炭化物・黄褐色土粒微量)
- 黒褐色粘土 10YR2/2 (黄褐色土粒微量) 暗褐色粘土 10YR3/3 (黄褐色土柱微量)
- 黒褐色粘土 2.5Y3/2 (黄褐色粘土)
- 暗灰黄色粘土 2.5Y4/2 (黄褐色粘土塊多量)
- オリーブ褐色砂質土 2.5Y4/3 (黄褐色粘土塊多量)
- 黒褐色粘土 2.5Y3/2 (黄褐色粘土粒少量) 黄褐色粘土 2.5Y5/4 (黒色土少量)
- 1 褐色粘土 10YR4/4 (黄褐色粘土粒・黒色粘土微量) m 暗褐色粘土 10YR3/3 (黄褐色粘土塊多量) n 黒褐色粘土 2.5Y3/2 (黄褐色粘土塊・酸化鉄少量)



#### 図 6 1号建物跡(1)



m = P26 - P25間1.90m + P25 - P24間1.94m + P24 - P23間1.78m + P23 - P22間2.03m + P22 - P4 間1.78m, 梁行き長は,西側柱列が総長<math>3.82m = P26 - P28間1.82m + P28 - P29間2.00m, 東側柱列が<math>P4 - P7間3.84mを測る。

縁の出は、基本柱間寸法の半間 分の長さで設計されている。外側 の柱間寸法は、北側柱列が総長 10.51m = P31-P30間1.82m + P 30-P16間1.88m + P16-P11間 1.94m + P11-P12間1.96m + P12

- P13間1.85m + P13 - P14間1.06m, 南側柱列が総長10.52m = P21 - P20間1.98m + P20 - P19間1.84m + P19 - P18間1.94m + P18 - P17間1.82m + P17 - P10間1.84m + P10 - P9間1.10m, 東側柱列が総長5.84m = P9 - P3間1.04m + P3 - P2間1.96m + P2 - P1間1.94m + P1 - P14間0.90m を測る。

柱穴は、径 $40\sim61$ cmの隅丸方形・円形を呈し、検出面からの深さは $38\sim70$ cmを測る。この状態から見て、当時の掘り込み面からさほど大きな削平は受けていないと判断される。底面には、自然石転用の根固石が据えられおり、 $P2\cdot 3\cdot 10\cdot 31$ では2 個積み重ねられていた。柱痕跡を確認できたものもある。遺物は出土していない。

# まとめ

本遺構は、格式の高い構造を備えており、中世方形館跡の主殿に比定される。池跡が南面していることも、この推定を裏付ける根拠である。会津地方の類例では、麻生館遺跡2号建物跡を指摘することができる。 (菅原)

### 8号建物跡 SB8

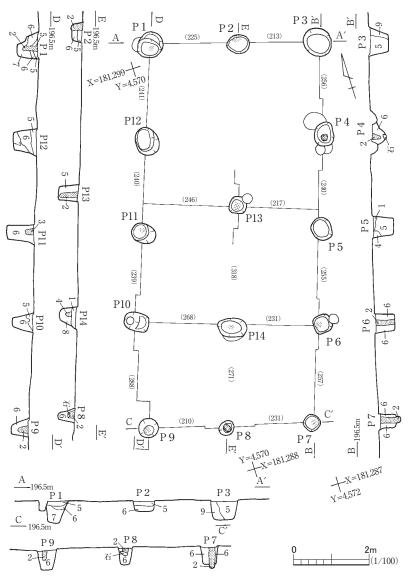
# 遺 構 (図8, 写真10)

本遺構は南区南西部のA4-G1・2, H1・2グリッドにまたがって検出された建物跡である。 LIV上面での精査中に、柱穴の配列が検出された。他遺構との重複は小穴数基を除きみられない。

本遺構は南北方向を桁行きとする  $2\times4$  間の建物跡であり、柱穴14個から構成される。柱穴は、桁行き中央の柱列のみ 4 個で、北側の 1 間分を空けている。遺構の軸線は、西辺柱列でN  $16^\circ$  E を指す。柱穴心芯間で計測した規模は、北辺柱列で4.38m、東辺柱列で10.08m、P13-P8間が5.89mを測る。南辺柱列で4.41m、西辺柱列で10.08mを測り、本遺構の平面積は44.4mとなる。桁行き

柱間の寸法は、東辺でP3-P4間2.56m+P4-P5間2.40m+P5-P6間2.55m+P6-P7間2.57m、西辺でP9-P10間2.88m+P10-P11間2.39m+P11-P12間2.40m+P12-P1間2.41m、中央柱列でP8-P14間2.71m+P14-P13間3.18mを測る。中央柱列ではP13がやや北側にずれている。梁行きの寸法は、北辺でP1-P2間2.25m+P2-P3間2.13m、南辺でP7-P8間2.31m+P8-P9間2.10m、P11-P13間2.46m+P13-P5間2.17m、P10-P14間2.68m+P14-P6間2.31mを測る。

14個検出された柱穴は、平面形が隅丸長方形・隅丸方形・円形に分けられ、大きさは38~78cm ある。検出面からの深さは28~62cm、掘形底面の標高は195.85~195.30mを測り、南方に深くなる。



#### 8号建物跡内堆積土

- 1 黒色粘質土 2.5Y2/1(灰色粘土塊少量)
- 2 黒色粘質土 2.5Y2/1 (炭化物微量)3 黒色粘質土 2.5Y2/1 (黄色粘土塊多量)
- 4 黒色粘質土 2.5Y2/1 (黄色粘土塊・
- 灰色粘土塊多量) 9
- 5 黒褐色粘質土 10YR2/2 (黄色粘土粒少量)
- 6 黒褐色粘質土 10YR2/2 (黄色粘土塊多量) 7 黒色粘質土 2.5Y2/1 (黄色粘土粒少量)
- 7 黑巴柏貞工 2.5Y2/1 (東巴柏工程少量) 8 黒褐色砂 2.5Y3/2 (黄色粘土塊多量, 黒色 粘土塊少量)
  - オリーブ褐色粘質土 2.5Y4/3(黒色土塊・ 粒多量 , 白色粘土少量)

# 図8 8号建物跡

掘形底面には、根固石が据え られたものもある(P4・8)。 また、70%超の柱穴に柱痕が 確認される。

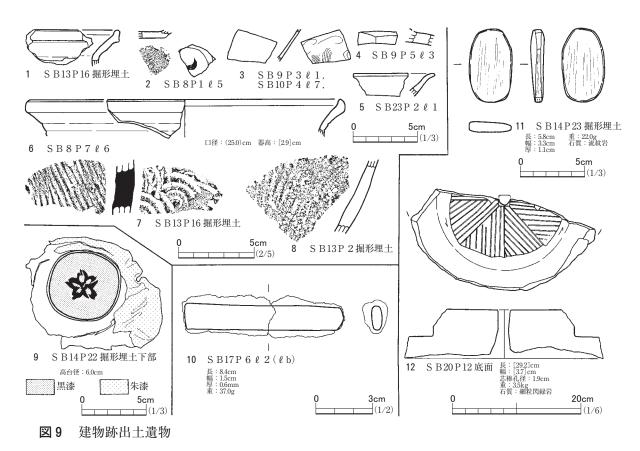
# 遺 物 (図9, 写真73)

本遺構から、土師器25点・ 陶磁器1点が出土した。いずれも掘形埋土中から出土し、 このうち陶磁器片が遺構年代 の上限を示すと考えられる。 このうち陶磁器1点・土師器 1点を図示した。

図9-2は瀬戸美濃系の灰釉皿の底部片で、釉は緑色がかった色調を呈する。大窯終末期の所産で、16世紀末~17世紀初頭に比定できる。同図6はロクロ成形された土師器甕の口縁部片である。

#### まとめ

本遺構は、4×2間の南北に桁行きをもつ長方形の建物跡で、比較的大型の部類に入る。柱穴配置は総柱に近く、柱穴掘形も大きくかつ深く掘り込まれている例が多い。こ



れまで検出された建物跡のなかで、南西端に位置していることをふまえれば、本遺構の性格は倉庫と考えられる。その機能した年代は16世紀末~17世紀初頭を上限とする。 (佐藤)

# 9号建物跡 SB9

### 遺 構 (図10, 写真11)

本遺構は、南区北西部の $A3-I9\cdot 10$ グリッドにかけて検出された建物跡である。遺構検出面は北部がLIV上面、南部がLII上面である。 $SD8\cdot 12$ 、小穴と重複し、いずれよりも新しい。

本遺構は、南北方向を桁行きとする  $2\times4$  間の建物跡で、15個の柱穴から構成される総柱の建物跡である。主軸は、東面で N  $20^\circ$  E を指している。規模は北面 4.78 m、東面 10.55 m、南面 5.85 m、西面 10.86 mを測り、北方で短く南方で長い。そのため本遺構の平面形は、北方を上辺とする台形状を呈している。平面積は 57.0 m と計算できる。

桁行きの柱間寸法は、西側柱列で P 1 - P12間2.61m + P12 - P11間2.77m + P11 - P10間2.57m + P10 - P9間2.91m、中央柱列で P 2 - P13間2.78m + P13 - P14間2.78m + P14 - P15間2.58m + P15 - P8間2.80m、東側柱列で P 3 - P4間2.89m + P4 - P5間2.82m + P5 - P6間2.57m + P6 - P7間2.27mを測る。梁行き寸法は、北から、P1 - P2間2.60m + P2 - P3間2.18m、P12 - P13間2.74m + P13 - P4間2.14m、P11 - P14間2.89m + P14 - P5間2.48m、P10 - P15間2.87m + P15 - P6間2.80m、P9 - P8間2.74m + P8 - P7間3.11mを測る。15個検出された柱穴は、大部分が東西方向に長い隅丸長方形を呈し、大きさは28~45×38~61cmある。P9・

10は方形、P11が円形に近く、本遺構のなかでは小さな掘形となっている。検出面からの深さは  $12\sim33$ cmあり、北部と東部に位置するP1~7・ $12\cdot13$ が浅い。このことから、本遺構の周辺は削平を受け、その度合いは北部でより顕著であったと推定される。柱穴内堆積土はしまりの弱い粘質土で6層に細分できたが、柱痕と考えられる土層は確認できなかった。

# 遺 物 (図 9, 写真73)

遺物は、土師器 2 点・陶磁器 3 点が出土している。図 9 - 3 は白磁碗で、S B 10 P 4 出土の破片と接合した。白磁碗の体部片で、内面に片切りの文様と櫛描文が描かれている。大宰府編年の V 類とみられ、12世紀後半に位置づけられる。同図 4 は白磁四耳壺の体部と考えている。12世紀代に比

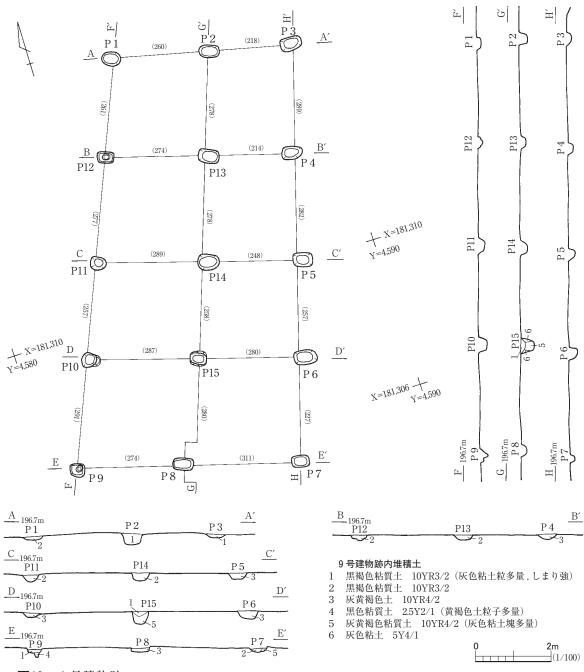


図10 9号建物跡

定できる。この他、P7から19世紀 代の本郷焼が出土した。これは混入 したものと考えられる。

# まとめ

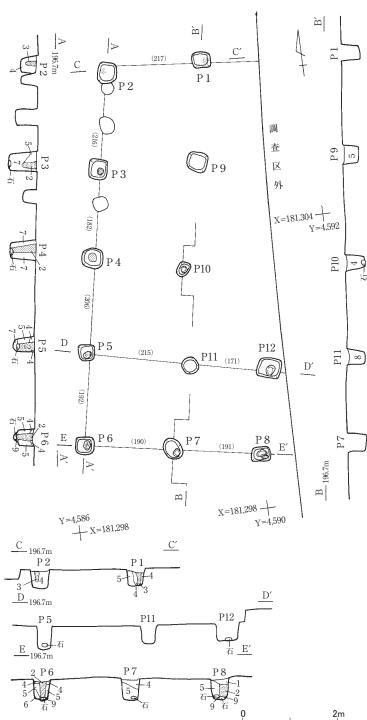
本遺構は、南北に桁行きをもつ比 較的大型の建物跡である。総柱の建 物跡であることから, 本遺構は倉庫 として使われたと考えられる。機能 した時期については限定できない が、SD8との重複関係から館跡に 伴う遺構の中でも比較的新しい時期 と推定される。 (佐藤)

#### S B 10 10号建物跡

#### 潰 構 (図11, 写真12)

本遺構は、南区中央のA3-I 10 · [10, A4 - I1 · ]1にまたがっ て所在する建物跡で、遺構の西部だ けが検出されている。この地区のL Ⅱ上面を精査中に、混入物を多く含 む柱穴の配列を明瞭に認識できた。 SK24と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は北面1間・西面4間・南 辺2間が検出されている。柱穴は12 個あり、側柱北東部から反時計回り にP1~12と呼称する。検出部の規 模は、北面3.30m、西面7.96m、南 面4.40mである。南北方向の柱間寸 法は, 西側柱列で P 2 - P 3 間2.16 m + P 3 - P 4 間1.82m + P 4 - P 5 間2.06m + P 5 - P 6 間1.92m, 中央柱列でP1-P9間2.18m+P 9 - P10間2.26m + P10- P11間 2.01m + P11-P7間1.86m, 東側



#### 10号建物跡内堆積土

- 灰褐色粘質土 10YR4/2 (灰白色粘土と暗褐色土の混土)
- 灰色粘質土 5Y4/1 (炭化物・黄褐色土粒少量) 黑褐色粘質土 10YR3/2 (黄褐色土粒少量)
- 黒褐色粘質土 10YR3/1 (黄褐色粘土塊多量)
- 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (黒褐色土塊多量)
- にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 (黒褐色土塊少量) 黒褐色粘質土 2.5Y3/1 (黄褐色粘土塊多量,焼土粒子微量)
- 黒色粘質土 2.5Y2/1
- 黒褐色粘質土 10YR3/1 (炭化物微量)

# 図11 10号建物跡

柱列がP12-P8間1.28mを測る。東西方向の柱間寸法は、P2-P1間2.17m、P3-P9間2.04m、P4-P10間1.94m、P5-P11間2.15m+P11-P12間1.71m、P6-P7間1.90m+P7-P8間1.91mを測り、東西列でそれぞれ類似している。

12個検出した柱穴は、その平面形が方形を呈するのが一般的である。大きさは24~51cmあり、40 cm程度が最も多い。検出面からの深さは33~50cmで、掘形底面の標高は195.80m前後にまとまっている。柱痕は $P1\sim6\cdot8$ から検出される。また、掘形底面の根固石は $P3\cdot5\sim8\cdot10\cdot12$ と高い頻度で確認されている。

本遺構からは、土師器13点・須恵器1点・陶磁器1点が出土した。このうち陶磁器1点が、前述の SB9から出土したものと接合している。これらの遺物は、本遺構の年代を直接決める資料ではない。

# まとめ

本遺構の大部分は未調査区にあり、根固石などの出現頻度や柱穴に企画性が指摘できることから、本遺構は居住施設と考えられる。間仕切りなども容易に推定できるが、建物の詳細について、3次調査以降に委ねることとする。 (佐藤)

#### 11号建物跡 S B 11

# 遺 構 (図12, 写真5・13)

本遺構は、南区やや南部のA4-H1・I1グリッドにまたがって所在する建物跡である。遺構周辺は標高196.15m付近の平坦面で、 $SK28 \cdot 29 \cdot 47 \cdot 48$ や、 $SD8 \cdot 15$ をはじめとする遺構群が多く分布している。柱穴はLI上面で検出された。他遺構との新旧関係は、SD10より古いことが確認されている。

本遺構は、 $2 \times 3$ 間の身舎と北・南・西の3面に展開する柱列から構成され、柱穴20個からなる。身舎は柱穴10個からなり、東西に桁をもつ $3 \times 2$ 間の構造で、建物の内部空間はP10により東部1間分と西部2間分にさらに分割されている。規模は、北面5.51m、東面3.72m、南面5.80m、西面3.75mで、平面積は21.8㎡となり、南区から検出された建物跡のなかでは小型の部類に入る。南北方向の軸線はN15°Eを指し、これは近接するSD15やSB8と共通する。桁行きの柱間寸法は、北側柱列でP1-P2間1.69m+P2-P3間1.88m+P3-P4間1.94m、中央柱列でP9-P10間3.65m、南側柱列でP8-P7間1.95m+P7-P6間1.93m+P6-P5間1.92mを測る。梁行き寸法は、東からP4-P5間3.72m、P3-P10間1.96m+P10-P6間1.87m、P2-P7間3.69m、P1-P9間2.22m+P9-P8間1.53mを測る。また、P9はP1-P8間の中間でなく南に寄っているため、P1-P8間は3:2の割合で分割されていることになる。柱穴は、掘形が方形で、大きさが径28~38cmある。底面からの深さは22~45cm、底面の標高は195.70~195.95mあり、4隅の柱穴が深い点が指摘できる。このうち、P6底面には根固石が据えられていた。

柱列は、身舎の北・南・西面に巡って検出されており、塀跡と考えられる。柱穴は10個あり、それぞれ軸線を同じくして身舎側柱に沿って身舎の半間分の間隔で巡っている。柱穴の大きさは、径

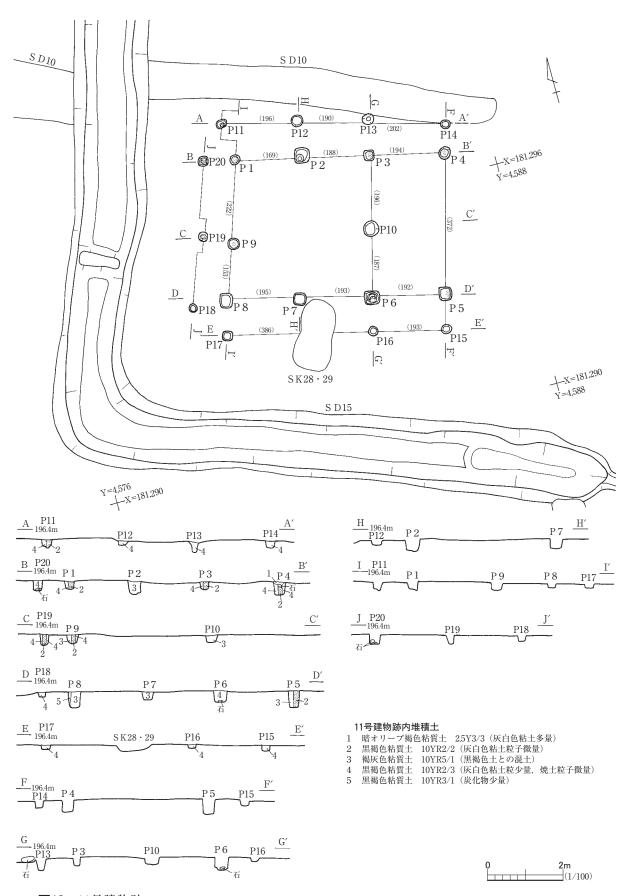


図12 11号建物跡

 $20\sim30$ cm,深さ $11\sim31$ cmと,身舎の柱穴に比べ明らかに小さい。この柱列の西約1.5m・南約2m離れて存在するSD15は,本遺構と平行するように屈曲しながら走っている。両者が同時期に存在していた可能性が高い。本遺構から遺物は出土していない。

#### まとめ

本遺構は3×2間の比較的小型の建物跡で、東西2室に分割されている。身舎の周囲には板塀が 巡っていたことも判明した。板塀は東面を開放しており、これはSB13・14と共通している。

また本遺構は、SD15に接して位置しており、これと同時期に機能していたのは間違いない。よって本遺構は、館跡機能時の中段階に位置づけられる。 (佐藤)

# 12号建物跡 SB12

#### 遺 構 (図13. 写真14)

本遺構は、南区北西部のA 3 - H 8 + 9 / U  $_{\rm J}$   $_{\rm$ 

本遺構は、東西に桁行きをもつ3間以上×2間の身舎と南面に縁が設けられた建物跡で、遺構の西半は路線外に延びている。柱穴は11個確認された。規模は、東面4.82m、北面2.65m、南面6.90mを測る。東辺の軸線は、N5°Eを指し、東に接するSD8の軸線と近似している。

身舎は桁行き 2 間,梁行き 2 間が検出された。ただし,南縁が 3 間分確認されており, 3 間以上存在するのは間違いない。また身舎は, P 9 によってさらに分割されるようであるが,詳細は不明である。検出した柱間寸法は,桁行き北側柱列で P 1-P 2 間 1.58 m,中央柱列で P 9-P 3 間 1.76 m,南側柱列で P 1-P 10 間 2.53 m + P 10-P 4 間 2.14 m を 測る。 2 列確認された梁行きは,東側柱列で P 2-P 3 間 1.91 m + P 3-P 4 間 2.00 m, P 1-P 9 間 2.09 m + P 9-P 10 間 1.98 m ある。

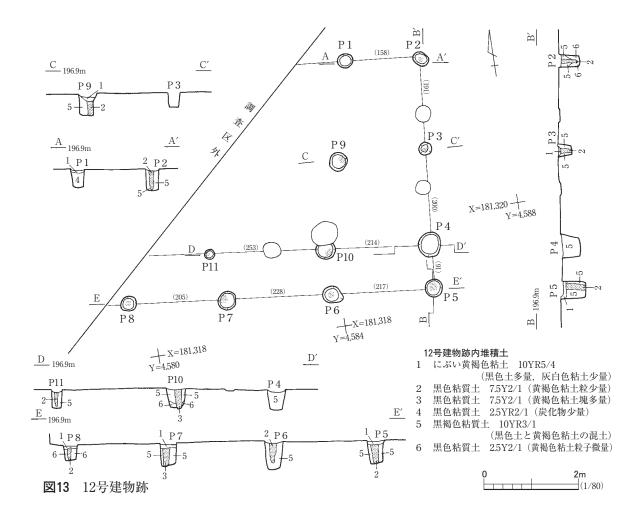
柱穴は、円形に掘り込まれたもので、径20~52cm、検出面からの深さ30~34cmを測る。小型の柱穴はいずれも中間に位置する柱穴に限られる。

縁は身舎から0.9~1.0mの間隔で並んでおり、この数値は身舎梁行きの半間分にほぼ一致する。 柱穴の規模は比較的大きく、身舎の柱穴と大差ない。

P5の掘形埋土から土師器1点が出土したが、本遺構に伴わないため図示しなかった。

### まとめ

本遺構は、東西棟で南縁の付く建物跡である。遺構西半が調査区外にあり、詳細は不明である。ただ、周辺の建物跡と類似した構造であることや、南北軸線がSD8とほぼ一致することから中世館跡に属することは間違いない。したがって本遺構は、館跡の中で最も北西に位置する建物といえる。北辺の堀に面した館跡北端にはSB1・17~19・29など東西に長い建物跡が顕著である。(佐藤)



13号建物跡 SB13

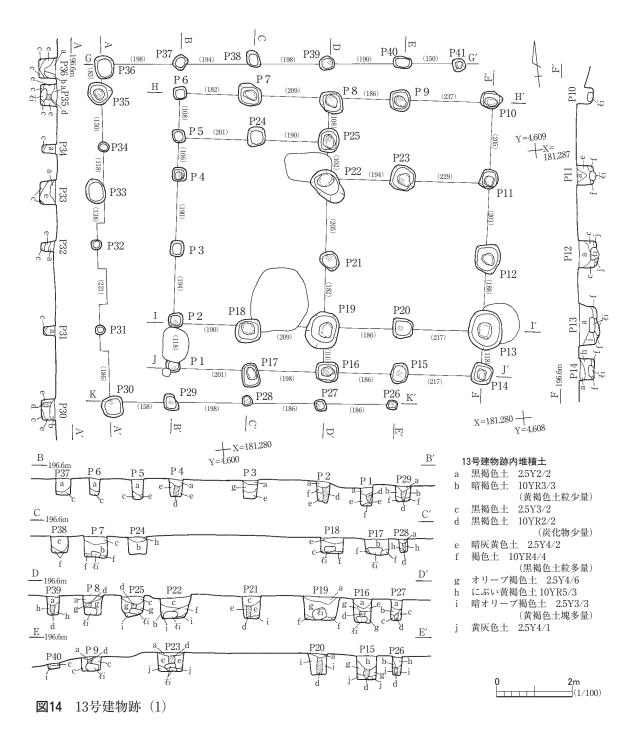
# 遺 構 (図14・15. 写真15・47)

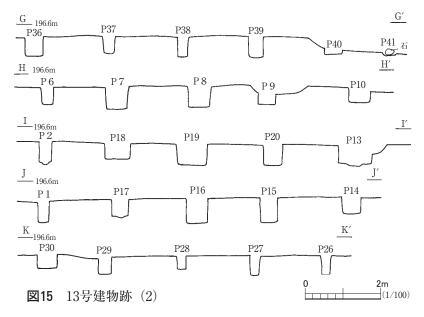
本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う建物跡である。周辺は埋没谷の谷頭部分と重なり、それより南側ではピットの数が少なくなることから、館の建物分布では南限にあたる可能性が高いと推定される。周辺遺構との関係は、 $SK18\sim21\cdot23\cdot37$ ,  $SD7\cdot24$ と重複しており、SD24を除くどれよりも古く位置づけられる。とくに、SD7との関係は重要で、館が大規模な火災に遭う前に建物が機能したことを示している。また、SB22とも重複しているが、柱穴が直接切り合わず、新旧関係は不明である。調査区内の位置は、A4-J2、B4-A2グリッドにまたがっており、LIIないしLIII上面で検出された。主軸方位は、N88°Eである。

次に構造をみていくと、本建物跡は、 $3 \times 4$ 間の身舎に南縁が付設されている。さらに、南・西・北側には板塀が回っている。建物規模は、東西長が北辺8.14m、南辺8.02m、南北長が西辺7.16m、東辺7.12mである。また、平面積は身舎48.2m + 縁9.5m の57.7m で、両者の比は約5:1と計算される。

身舎は、複雑な構造を呈している。ほぼ中央で東西に2分割され、さらに、西側は縁の出と同じ

柱間で、東側は縁の出の 2 倍の柱間で、それぞれ南北に仕切られている。柱間寸法を示しておくと、桁行き長は、北側柱列が総長8.14m = P 6 - P 7 間1.82m + P 7 - P 8 間2.09m + P 8 - P 9 間1.86m + P 9 - P 10間2.37m、南側柱列が総長8.02m = P 2 - P 18間1.90m + P 18 - P 19間2.09m + P 19 - P 20間1.86m + P 20 - P 13間2.17m を測る。また、梁行きは、西側柱列が総長5.98m = P 2 - P 3 間1.94m + P 3 - P 4 間1.90m + P 4 - P 5 間1.06m + P 5 - P 6 間1.08m、東側柱列が総長5.94m = P 13 - P 12間1.88m + P 12 - P 11間2.01m + P 11 - P 10間2.05m を測る。柱穴は、円形・隅丸方形基調を呈し、径38~45cmの大きさを基本とするが、P 13・19では径が70cmにも及ぶ。検出面か





らの深さは41~60cmである。 根固石の設置頻度は高く,特 に身舎東部では大部分の柱穴 に設置されている。

板塀は、建物本体を西側から逆「コ」字状に囲むような状態で設置されている。つまり、板塀を持つ他の建物跡と同じように、東側が開放状態に設計されている。柱位置は、建物本体の側柱と向かい合う関係にあり、南・北柱列では

1.00m前後,西側柱列では0.7~0.85mの間隔があく。なお,南・北柱列の東端は建物本体の隅まで及んでいない。また柱筋は,東西方向が建物軸ときれいに平行するが,南北方向はいくぶん西に偏している。

柱間寸法を示しておくと、南側柱列が総長7.28m = P26 - P27間1.86m + P27 - P28間1.86m + P28 - P29間1.98m + P29 - P30間1.58m, 西側柱列が総長8.76m = P30 - P31間1.86m + P31 - P32間2.21m + P32 - P33間1.38m + P33 - P34間1.18m + P34 - P35間1.30m + P35 - P36間0.83m, 北側柱列が総長9.30m = P36 - P37間1.98m + P37 - P38間1.94m + P38 - P39間1.98m + P39 - P40間1.90m + P40 - P41間1.50mを測る。板塀の柱穴は、建物本体に対して、貧弱である。径30~50cmの円形・隅丸方形基調を呈し、検出面からの深さは43~61cmである。根固石の設置も、1割程度にすぎない。

#### 遺 物(図9)

本建物跡からは、土師器片13点、須恵器片3点が柱穴から出土した。いずれも掘形埋土からの出土である。これらは、地館跡より時期が古く、遺構に伴うものではない混入品と考えられる。このうち、土師器1点と須恵器2点を図示した。

図9-1は、ロクロ土師器甕の口縁部片である。端部は上につまみ上げられている。同図7・8は、須恵器甕の胴部片である。7は、外面に平行タタキメ、内面に同心円文アテメが観察できる。8は、外面に平行タタキメが観察できる。

### まとめ

本遺構は、中世方形館跡に伴う建物跡である。周囲の状況から、南辺に近い位置の施設であったと思われる。また、館の北側に目を向けると、規模・構造の類似したSB2が堀跡の外側で検出されており(1次調査区)、相互の関係が注目される。

(菅 原)

# 14号建物跡 SB14

#### 遺 構 (図16·17, 写真16)

本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う建物跡である。主殿に比定される SB1とは、東側柱筋を揃えており、SB20・21にもほぼ同様の位置関係を認めることができる。また、SB15、SD17・38と重複し、SB15より古く、SD17・38より新しいことが判明している。調査区内の位置は、B3-A9・10、A3-J9・10グリッドにまたがっており、L $\blacksquare$ 上面で検出された。主軸方位は、N $7^\circ$ Eである。

次に構造をみていくと、本建物跡は  $4 \times 6$  間の身舎に、庇状の張り出し部が北辺西半分に付設されている。さらに、この部分を囲むような状態で、建物跡の外側には、逆「L」字状に板塀が巡らされている。規模は、東西長が、南側柱列で8.04m、北側柱列で8.08mを測る。また、南北長は、張り出し部分を含めた西側柱列で9.56m、東側柱列で7.27mを測る。平面積は、身舎58.7㎡+張り出し部分8.8㎡の67.5㎡となり、両者の比は 1:7 と計算される。板塀は北列 3 間・西列 3 間が検出され、北列は張り出し部の柱列とほぼ一致する。

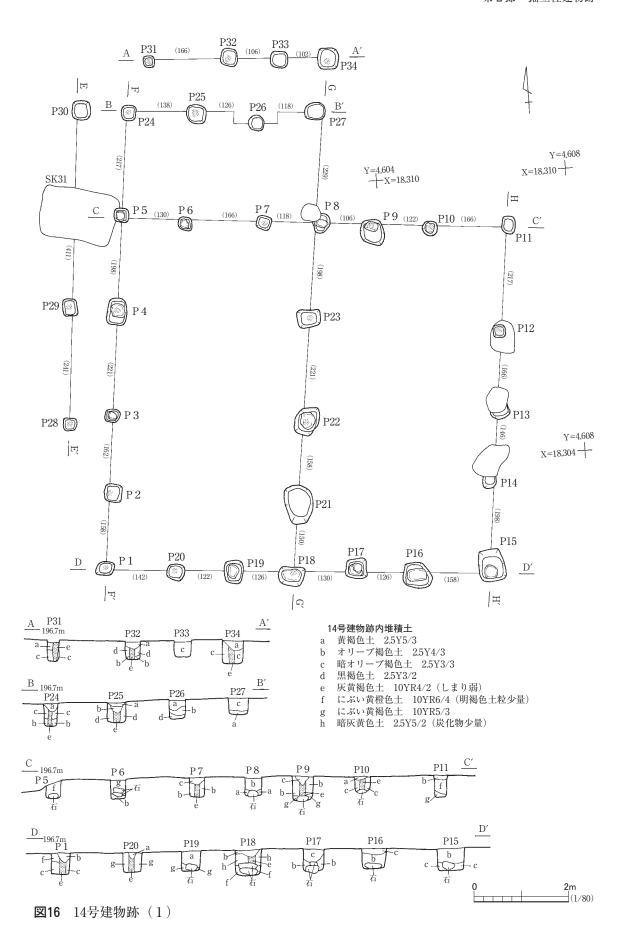
身舎は、東西方向と南北方向で柱間寸法を違えている。しかし、両者の柱間数を調節することで、ほぼ正方形の平面プランが確保されている。また、東側柱列は中央に柱配置が偏っており(P12~14)、出入り口の存在が想定される。内部空間は中央で均等に2分割され、縦長の長方形が東西に対峙する状態である。柱間寸法を示しておくと、東西長が、南側柱列でP1-P20間1.42m+P20-P19間1.22m+P19-P18間1.26m+P18-P17間1.30m+P17-P16間1.26m+P16-P15間1.58m、北側柱列でP5-P6間1.30m+P6-P7間1.66m+P7-P8間1.18m+P8-P9間1.06m+P9-P10間1.22m+P10-P11間1.66mを測る。また、南北長が、西側柱列でP1-P2間1.58m+P2-P3間1.62m+P3-P4間2.21m+P4-P5間1.98m、東側柱列でP15-P14間1.98m+P14-P13間1.46m+P13-P12間1.66m+P12-P11間2.17mを測る。

庇状の張り出し部は、分割された身舎部の西半分を北側に1間分延長して造られている。身舎から軒先までの距離は平均2.23mあり、これはP3-P4間、P22-P23間の柱間寸法にほぼ一致する。具体的な数値を示しておくと、北側柱列でP24-P25間1.38m+P25-P26間1.26m+P26-P27間1.18mを測る。また、南北長は、西側柱列でP5-P24間2.17m、東側柱列でP8-P27間2.29mを測る。

柱穴は、径36~52cmの円形・隅丸方形を呈し、検出面からの深さは40~61cmを測る。身舎の柱穴は、中央の間仕切りを含めて、根固石が多くに据えられている。一方、張り出し部・板塀にはそれが無く、簡略なつくりである。

# 遺 物 (図 9 , 写真85 · 87)

本建物跡からは、石製品1点、漆器2点、焼壁片80gが出土した。このうち、石製品1点と漆器 1点を図示している。



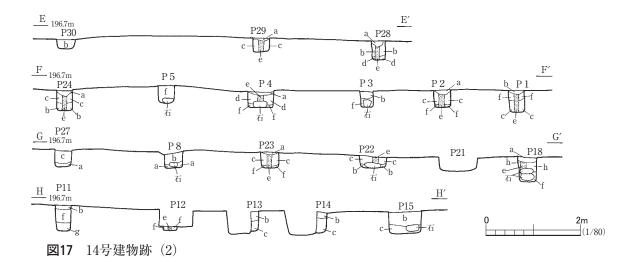


図9-11は、用途不明の石製品である。P23の掘形埋土から出土した。平たい円礫を素材にし、 縁辺と表裏面に研磨された痕跡が観察される。

同図9は、漆器椀である。P22の掘形埋土下部から出土した。遺存状態は不良であり、底部側しか残っていない。また、外面の漆皮膜は既に浮き上がっている。実測図は底部外面を真上から見たもので、黒漆の塗布面に朱漆の桜花が観察できる。また内面にも何か文様のある可能性があるが、未処理のためまだ確認していない。保存処理は平成19年度に実施する予定なので、その段階で有無の確認と記録の提示を行いたい。

# まとめ

本遺構は、中世方形館跡に伴う建物跡である。その中でも、主要な役割を果たした施設であった 可能性が高い。また、漆器椀が出土したことも特筆される。 (菅 原)

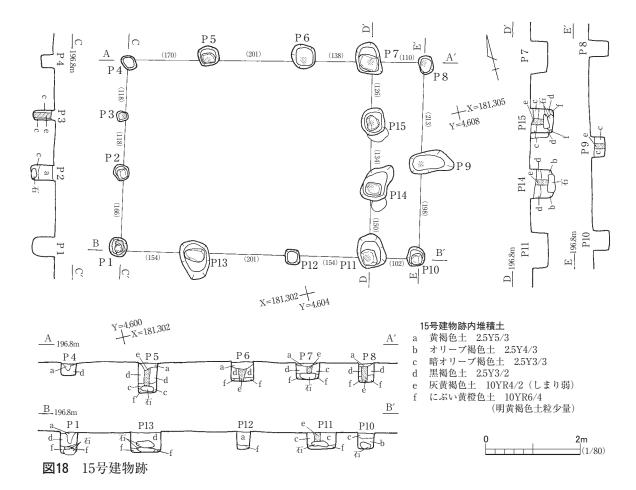
# 15号建物跡 SB15

# 遺 構 (図18, 写真17)

本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う東西棟の建物跡である。その中では、規模の小さな部類に属し、主軸方位と併せて $SB11 \cdot 17$ に近似する。調査区内の位置は、B3 - A10グリッドにおさまっており、LII上面で検出された。周辺遺構との関係は、SB14に加え、SD38から枝分かれした細い溝跡に重複し、どちらよりも新しいことが判明している。主軸方位は、 $N15^\circ$ Eである。

次に構造をみていくと、本建物跡は、 $3 \times 3$ 間の身舎に東縁が付けられている。規模は、身舎 20.6㎡ +縁4.3㎡の24.9㎡となり、両者の比はおよそ5:1と計算される。

身舎は、柱間寸法を調節することで東西軸が長くとられ、桁行きは中央の柱間が広く、梁行きは南側の柱間が広く設計されている。具体的な数値を示すと、桁行き長が、南側柱列で総長5.09m = P 1-P13間1.54m + P13-P12間2.01m + P12-P11間1.54m 、北側柱列で総長5.09m = P4-P5間1.70m + P5-P6間2.01m + P6-P7間1.38mを測る。また、梁行き長が、西側柱列で総長4.02m = P1-P2間1.66m + P2-P3間1.18m + P3-P4間1.18m 、東側柱列で総長4.10m =



P11-P14間1.50m+P14-P15間1.34m+P15-P7間1.26mを測る。

縁の出は平均1.06mを測り、2間の柱配置で構成される。中央柱の位置は、P14・15の中間に対応している。柱間寸法は、P10-P9間1.98m+P9-P8間2.13mを測る。

柱穴は、径34cm~58cmの円形・隅丸方形を呈し、検出面からの深さは34~41cmを測る。過半数には、根固石を確認することができた。

本建物跡では遺物が出土していない。

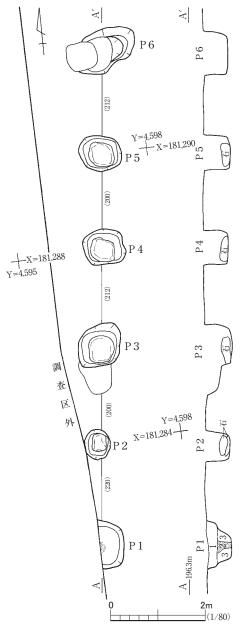
# まとめ

本遺構は、中世方形館跡に伴う東西棟の建物跡である。規模が小さく、重複するSB14とは主軸方位が大きくずれている。調査区内では2棟の類例が発見されており、館に伴う建物の1つのパターンであったと考えられる。 (菅原)

# 16号建物跡 SB16

# 遺 構 (図19, 写真18)

本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う建物跡である。今回確認できたのは東側柱列だけに限られ、 大部分は調査区外の農道下に潜り込んでいる。したがって、全容の解明は3次調査以降を待たなければならない。ただ、農道西側に対応する柱穴が見あたらず、現在の所見では南北に細長い平面プ



# 16号建物跡内堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/2
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (黄褐色砂質土塊多量)
- 3 黒褐色土 10YR2/2

# 図19 16号建物跡

ランが想定される。この理解に従うと、 $SB8 \cdot 9$ に比較的類似する構造になると思われる。調査区内の位置は、 $A4-J1 \cdot 2$ グリッドにまたがっており、LII上面で検出された。周辺遺構との関係は、SB22と重複しているが、柱穴同士に直接の切り合いが無く、新旧関係は不明である。主軸方位は、N8°Eを測る。

柱間寸法を示しておくと、東側柱列は、総長10.44m = P1-P2間2.20m + P2-P3間2.00m + P3-P4間 2.12m + P4-P5間2.00m + P5-P6間2.12m である。柱穴は、径 $78\sim85$ cmの円形・隅丸方形で、検出面からの深さは $50\sim61$ cmある。この数値は、館に伴う建物跡の中でも際だった大きさで、平安時代に遡る可能性も考えた。しかし、柱間寸法が他の建物跡と相違せず、根固石が据えられており、近接の13号建物跡にも同規模の柱穴が一部確認できることから、否定的に捉えている。

本建物跡から遺物は出土していない。

#### まとめ

本遺構は、中世方形館跡に伴う建物跡である。今回はご く一部の範囲の検出にとどまっているが、現在の所見では 南北に細長い平面プランが想定される。また、柱穴の規模 が大きな点に特徴が認められる。 (菅 原)

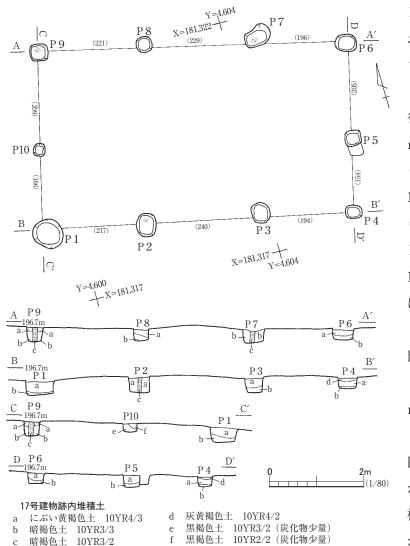
# 17号建物跡 SB17

#### 遺 構 (図20, 写真19)

本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う東西棟の建物跡である。小規模な側柱構造であるが、内部にSX1を抱える点で特別な意味を有している。館内の位置は、主殿に比定

される 3 棟 (SB1・18・19) の西隣にあたり、背後には館の北辺堀跡 (SD1) が併走している。また、SD17と重複しており、これより新しいことが判明している。さらに、SB29とも重複関係が認められるが、柱穴同士に直接の切り合いが無く、新旧関係は不明である。調査区内の位置は、A3-J9、B3-A8・9グリッドにまたがっており、LII上面で検出された。規模は、東西長が、北側柱列6.46m、南側柱列6.51m、南北長が、西側柱列3.75m、東側柱列3.59mとなる。平面積は22.5mと計算される。主軸方位は、N8°Eである。

本建物跡は、上述したように内部にSX1を抱えている。具体的には、P5-P10間とP2-



P8間を結んだ交点に合致して おり, 意図的にこの場所が選択 されたと推定される。

柱間寸法を示しておくと、桁行き長は、南側柱列で総長6.51 m = P1 - P2間2.17m + P2 - P3間2.40m + P3 - P4間1.94m, 北側柱列で総長6.46m = P9 - P8間2.21m + P8 - P7間2.29m + P7 - P6間1.96mを測る。また、梁行き長は、西側柱列で総長3.75m = P1 - P10間1.66m + P10 - P9間2.09m, 東側柱列でP4 - P5間1.54m + P5 - P6間2.05mを測る。

柱穴は、径25~48cmの小さな 円形・隅丸方形を呈し、検出面 からの深さは30~43cmである。 根固石の据えられたものは無 かった。

#### 遺 物(図9)

遺物は、土師器片3点、鉄製品1点が出土した。図9-10は、刀子片とみられる。

#### まとめ

図20 17号建物跡

本遺構は、中世方形館跡に伴う建物跡である。主殿の西脇に位置し、内部から地鎮遺構が検出されている。この点で、特別な性格を備えていたのかも知れない。 (菅原)

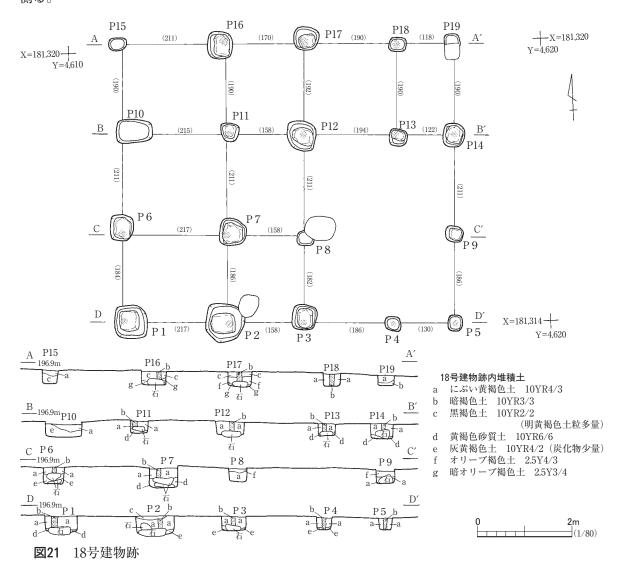
# 18号建物跡 SB18

# 遺 構 (図21, 写真20)

本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う東西棟の建物跡である。館平面プランのほぼ正面奥に位置し、性格は主殿と推定される。同位置には、同じく主殿とみられる 2 棟の建物跡が重複しており、 $SB18 \rightarrow SB1 \rightarrow SB19$ の変遷が捉えられている。したがって、本建物跡は最も古い主殿にあたる。平面プランはほとんど正方形に近く、一見すると他の 2 棟より面積が狭いように感じられるが、身舎を比較すると、ほぼ共通している。したがって、主殿の基本面積は 3 時期を通して維持され、平

面プランと付属構造(庇・縁・塀)の変更で、格式が高められたと見なされる。調査区内の位置は、B3-B8・9グリッドにまたがっており、LII上面で検出された。規模は、東西長が、南側柱列 6.91m、北側柱列で6.89m、南北長が、西側柱列5.85m、東側柱列5.87mを測る。平面積は40.4㎡と計算され、主軸方位は、NI°Eである。

本建物跡の基本構造は、後続の主殿に比べて単純であると言える。  $3 \times 4$  間の総柱で、庇・緑・塀は設けられていない。ただ、南東部は中間の柱が1 つ抜けており、 $2 \times 2$  間のやや縦に長い空間が作り出されている。この部分と総柱部分の面積比は3:7である。また、東西方向の柱間には、西側から広・狭・広・狭の規則性がみられ、南北方向の柱間は中央が広くとられている。具体的な計測値を示しておくと、P1-P6 間1.84m+P6-P10間2.11m+P10-P15間1.90m、東側柱列でP5-P9 間1.86m+P9-P14間2.11m+P14-P19間1.90mを測る。また、桁梁行き長は、南側柱列でP1-P2 間2.17m+P2-P3 間1.58m+P3-P4 間1.86m+P4-P5 間1.30m、北側柱列で1.50m0 円 1.50m0 円 1.50



柱穴は、径39~73cmの円形・隅丸方形を呈し、検出面からの深さは38~57cmである。過半数に根固石が据えられていた。

本建物跡から遺物は出土していない。

#### まとめ

本遺構は、中世方形館跡の主殿に比定される建物跡である。3時期の変遷の中では、最も古く位置づけられる。また平面プランは、後続の2棟が横長であるのに対し、正方形に近い。さらに、付属構造がみられず、初現形態の特徴をよく示していると思われる。 (菅原)

# 19号建物跡 SB19

#### 遺 構 (図22. 写真21)

本遺構は、南区で検出された中世方形館跡の主殿とみられる東西棟である。館平面プランのほぼ 正面奥に位置しており、池跡のSD7・18に面している。ただ、柱穴がSD18の導水施設を切るこ とから、同時存在はしていない。また背後には、3.5mの間隔をあけて館の北辺堀跡(SD1)が 併走しており、昨年度の所見から中間には土塁が存在したと推定される。

本建物跡は、同じく主殿とみられる S B  $1\cdot 18$ と重複し、古い順から S B  $18\rightarrow$  S B  $1\rightarrow$  S B 190 変遷が確認されている。したがって、本建物跡は最終時期の主殿にあたる。調査区内の位置は、B  $3-A8\cdot 9$ 、B  $8\cdot 9$  グリッドにまたがっており、L 11 ないしL 11 上面で検出された。主軸方位は、N  $3^\circ$  E である。

次に構造をみていくと、本建物跡は、 $2 \times 4$ 間の細長い身舎に、板塀で囲まれた相似形の空間が南側に併設されている。板塀は身舎に直接取り付き、正面中央は幅5.87mの広い隙間が空く。この位置はちょうど、かつての池跡(SD18)の北縁に重なっている。中世の絵図面等を参考にすると、板塀内部は庭であったと推定され、さらに、正面が単に出入り口としては広く空き過ぎることから、外側にも苑地が形成されていたと推定される。つまり、池は無くなっても、主殿と苑地のセット関係は維持されたと考えられる。

建物規模は、板塀で囲まれた空間を含めると、東西長が、身舎の北側柱列で10.83m、板塀の南側柱列で10.89m、南北長が、西側柱列7.69m、東側柱列7.93mとなる。平面積は身舎42.1㎡+板塀42.5㎡の84.6㎡で、両者の比は1:1と計算される。

身舎は、桁柱西端から1間の位置で東西に分割されている。両者の面積比は1:4と計算できる。間仕切りとなるP14-P4間には、撹乱箇所にもう1つ柱が配置された可能性があると思われる。柱間寸法を示しておくと、桁行き長が、南側柱列で総長10.89m = P1-P13間2.89m + P13-P12間2.79m + P12-P11間3.04m + P11-P10間2.17m 、北側柱列で総長10.83m = P3-P4間2.85m + P4-P5間2.97m + P5-P6間3.00m + P6-P7間2.01mを測る。また、梁行き長は、西側柱列で総長3.84m = P1-P2間1.86m + P2-P3間1.98m 、東側柱列で総長3.89m = P10-P9間1.18m + P9-P8間1.66m + P8-P7間1.05mを測る。

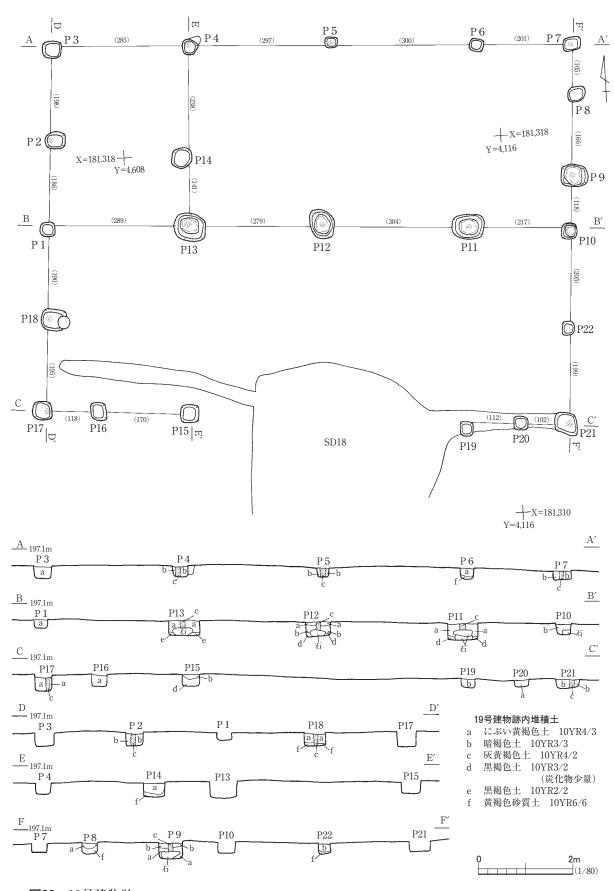


図22 19号建物跡

板塀は、西側柱列で総長3.85m = P17 - P18間1.95m + P18 - P1間1.90m, 東側柱列でP21 - P22間1.99m + P22 - P10間2.05mを測る。また、南側柱列は、西側がP17 - P16間1.18m + P16 - P15間1.70m、東側がP19 - P20間1.12m + P20 - P21間1.02mである。

柱穴は、身舎南側 (P11~13) の規模が大きく、根固石が据えられている。径は33~68cmで、円形・隅丸方形を呈し、検出面からの深さは31~43cmを測る。

本建物跡から遺物は出土していない。

# まとめ

本遺構は、中世方形館跡の主殿と推定される。 3 時期の変遷の中で終時期の建物跡にあたり、南側が板塀で囲まれているのが特徴である。南面の池は既に埋められているが、苑地とのセット関係は維持されたと推定される。 (菅原)

# 20号建物跡 SB20

# 遺 構 (図23, 写真22·48)

本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う東西棟の建物跡である。ほぼ同位置で類似規模・構造を備えた SB21に重複し、それより古く位置づけられる。また、SB22とも重複関係を有しているが、新旧関係は不明である。さらに、SD11・17より古いことが判明している。位置的には、A4-J1、B4-A1グリッドにまたがっており、LII上面で検出された。主軸方位は、N8°Eである。

本建物跡は、 $3 \times 4$  間の総柱構造である。柱間は、桁行きが西から東に向かって次第に幅広になる傾向があり、梁行きは中央が幅狭い。具体的な数値を示しておくと、桁行き長が、南側柱列でP 1-P14間1.78m+P14-P13間1.86m+P13-P12間2.05m+P12-P11間2.21m、北側柱列でP 4-P5間1.78m+P5-P6間1.82m+P6-P7間2.05m+P7-P8間<math>2.37mを測る。また、梁行き長は、西側柱列でP1-P2間2.65m+P2-P3間2.13m+P3-P4間2.25m、東側柱列でP11-P10間2.67m+P10-P9間1.99m+P9-P8間2.29mである。

柱穴は、径34~61cmの円形・隅丸方形を呈し、検出面からの深さは38~52cmを測る。約半数に根固石が据えられていた。

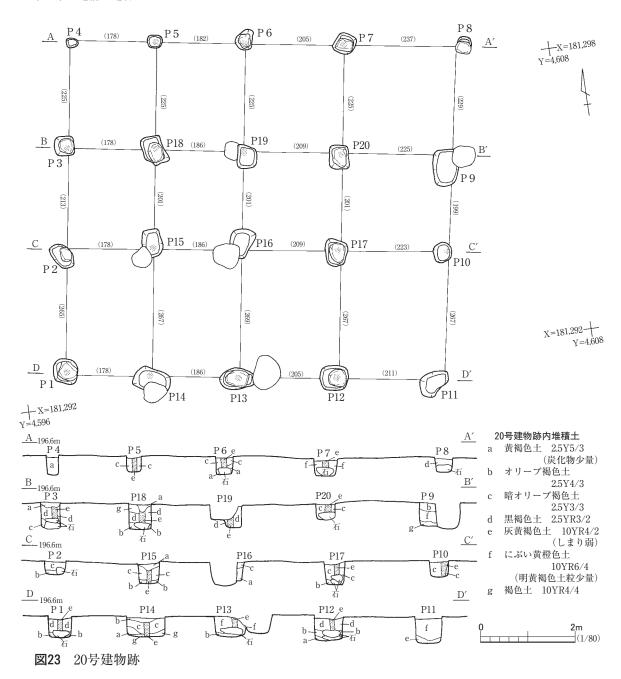
#### 遺 物 (図9, 写真84)

遺物は、土師器片3点・須恵器片1点・石製品1点・焼壁150gが出土した。

図9-12は、P12の根固石に転用された茶臼である。この柱穴では、根固石が2個重ねられており、この資料は下に据えられていたものにあたる。石質は、細粒閃緑岩である。在地には見られない石材のため、遠隔地から搬入された可能性が高いと思われる。

#### まとめ

本遺構は、中世方形館跡に伴う東西棟の総柱建物跡である。同位置で重複するSB21とは、連続的な変遷であったと推定される。また、遠隔地の搬入品とみられる茶臼が出土したことは、特筆される。 (菅 原)



21号建物跡 SB21

#### 遺 構 (図24. 写真23)

本遺構は、中世方形館跡に伴う東西棟の建物跡である。ほぼ同位置で類似規模・構造を備えたSB20に重複し、それより新しく位置づけられる。また、SB22とも重複関係を有しているが、柱穴間に切り合いが無く、新旧関係は不明である。さらに、SD11・17より古いことが判明している。調査区内の位置は、A4-J1、B4-A1グリッドにまたがっており、LII上面で検出された。主軸方位は、N8°Eである。平面積は、45.9mと計算される。

本建物跡は、 $3\times4$ 間の総柱構造である。柱間寸法は、具体的な数値を示しておくと、桁行き長が、南側柱列で総長7.35m = P1 - P14間1.93m + P14 - P13間1.82m + P13 - P12間1.86m + P12

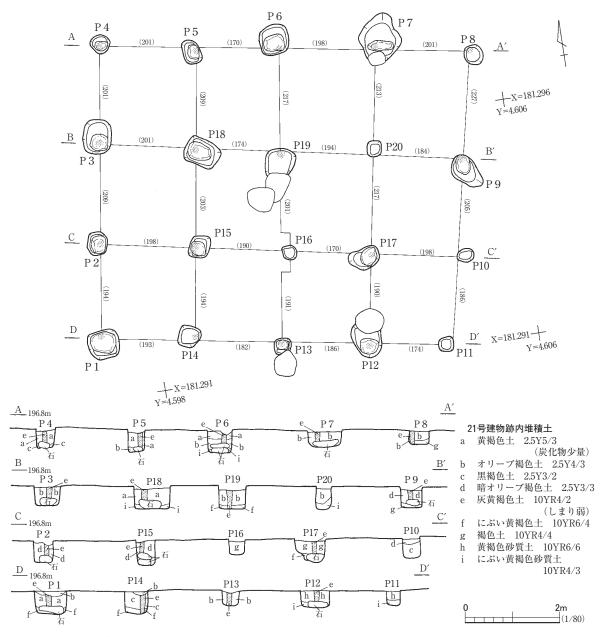


図24 21号建物跡

- P11間1.74m,北側柱列で総長7.70m = P 4 - P 5 間2.01m + P 5 - P 6 間1.70m + P 6 - P 7 間 1.98m + P 7 - P 8 間2.01mを測る。また,梁行き長は,西側柱列で総長6.04m = P 1 - P 2 間1.94 m + P 2 - P 3 間2.09m + P 3 - P 4 間2.01m,東側柱列で総長6.18m = P11 - P 10間1.86m + P 10 - P 9 間2.05m + P 9 - P 8 間2.27mである。

柱穴は、径40~62cmの円形・隅丸方形を呈し、検出面からの深さは31~50cmを測る。約7割に根固石が据えられていた。本建物跡から遺物は出土していない。

# まとめ

本遺構は、中世方形館跡に伴う東西棟の総柱建物跡である。同位置で重複するSB20とは、連続的な変遷であったと推定される。 (菅 原)

# 22号建物跡 SB22

# 遺 構 (図25, 写真24)

本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う建物跡である。 SB23とは同一遺構の可能性もあるが、これを含めて全容の解明は 3 次調査以降の課題となっている。また、  $SB20 \cdot 21$ と重複しているが、新旧関係は不明である。調査区内の位置は、  $A4-J1 \cdot 2$ 、 B4-A1 グリッドにまたがっており、 LII 上面で検出された。主軸方位は、 N9°Eである。

本建物跡は、南北4間×東西2 間以上の規模を有し、検出された 範囲内は、側柱構造となっている。 柱間寸法は、東側柱列が総長6.76 m=P2-P3間1.64m+P3-P4間1.76m+P4-P5間1.60 m+P5-P6間1.76m、南側柱

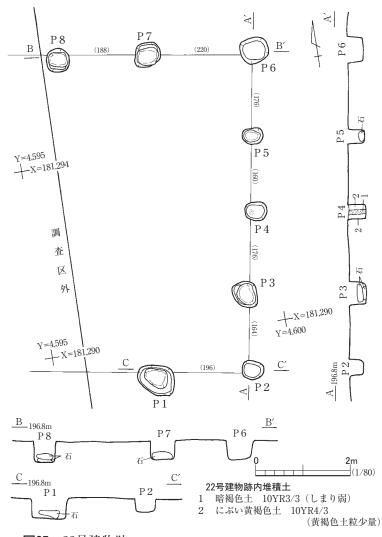


図25 22号建物跡

列がP1-P2間1.96m, 北側柱列がP8-P7間1.88m+P7-P6間2.20mを測る。

柱穴は、径36~51cmの円形・隅丸方形基調を呈し、検出面からの深さは36~60cmである。根固石の設置頻度は高く、6割で認められる。本建物跡から遺物は出土していない。

#### まとめ

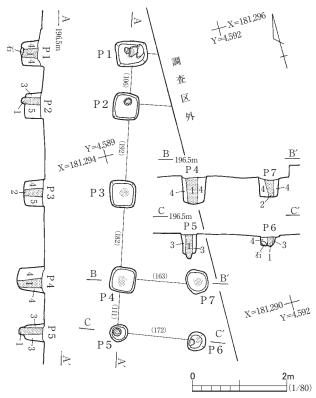
本遺構は、中世方形館跡に伴う建物跡である。今回は、一部の検出にとどまったため、全容は不明である。 (菅原)

# 23号建物跡 SB23

### 遺 構 (図26, 写真25・48)

本遺構は、南区の $A4-I1\cdot 2$ 、J1グリッドから検出された建物跡で、大部分が調査区外に延びる。柱列はLII上面で検出された。 $SK34\cdot 35$ 、SD16と重複し、いずれよりも新しい。

本遺構は、7個の柱穴から構成される西面4間×南面1間分の柱列として認識された。遺構の南面から2列目までは折り返す柱穴各1個が確認されている。検出された部分での長さは、西面5.91



#### 23号建物跡内堆積土

- 1 黒色粘質土 10YR2/1 (黄褐色粘土粒・炭化物少量)
- 2 黑褐色粘質土 2.5Y3/1 (砂多量,黄褐色粘土粒少量)
- 3 黄灰色粘土 2.5Y4/1 (黄褐色粘土粒少量)
- 4 黒褐色粘質土 10YR3/1 (黄褐色粘土粒多量)
- 5 褐色砂質土 7.5YR4/6 (黒褐色粘質土との混土)

#### 図26 23号建物跡

# 遺 物 (図9, 写真73)

本遺構から出土した遺物は、陶磁器 1 点のみである。図 9 - 5 は志乃焼の皿である。釉の色調は乳白色を呈し、内面には貫入が観察できる。16世紀末から17世紀初頭の所産とみられる。

#### まとめ

本遺構は西辺のみ検出された建物跡で、南北辺に縁を持つ建物を想定している。詳細は3次調査 以降に委ねるが、農道を挟んで対峙するSB22とは同一建物の可能性がある。 (佐藤)

### 24号建物跡 SB24

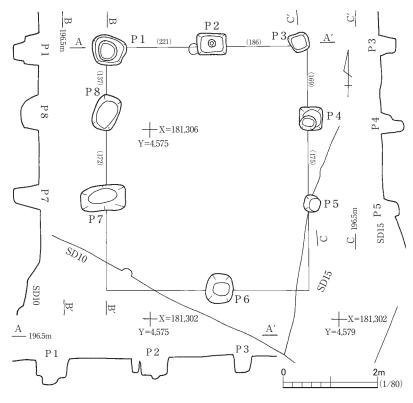
# 遺 構 (図27, 写真7)

本遺構は、南区西部のA3-H10グリッドに位置する建物跡である。本遺構は、屋外小穴として精査を開始したため、詳細は不明な点が多い。 $SD10 \cdot 15 \cdot 24$ と重複し、SD24より新しく、 $SD10 \cdot 15$ より古いことが判明している。遺構検出面はLIV上面である。

本遺構は、南北方向に棟をもつ  $2\times3$  間の建物跡とみられ、溝跡に壊されている南面隅の 2 個を加えた柱穴10個から構成されていたようである。規模は、桁行きが P2-P6 間で5.20m、梁行きが北面で4.07mを測り、平面積は21㎡程度と推定される。 P2-P6 間を結んだ軸線は N2° Wを

m,南面2.47mを測り,柱間寸法は西面柱列でP1-P2間1.06m+P2-P3間1.92m+P3-P4間1.82m+P4-P5間1.11m,東側柱列でP7-P6間1.23m,南側柱列の南からP5-P6間1.72m,P4-P7間1.63mをそれぞれ測る。P2-P4間の間隔と、P1-P2間・P4-P5間のそれは小さく3:2の割合になっている。したがってP2~4・7が身舎を、P1・5・6が縁を構成する柱穴と判断している。西面の軸線はN18°Eを指す。

柱穴は $P1\sim4\cdot7$ が方形、 $P5\cdot6$ が 円形を呈する。大きさは $34\sim65$ cmあり、P $1\sim4\cdot7$ が大きく、 $P5\cdot6$ が小さい。 このように $P5\cdot6$ は相対的に小型の柱穴 であることからも、これらが縁であるとす る想定と矛盾しない。検出面からの深さは  $22\sim56$ cmを測る。底面の標高は $195.60\sim$ 195.70mにおおむね揃えられる。



指し、周辺の建物跡が若干東 方に振れているのと異なって いる。

柱間寸法が計測できた柱列を記載すると、桁行き西側柱列でP1-P8間1.37m+P8-P7間1.72m、東側柱列でP3-P4間1.69m+P4-P5間1.75m、梁行き北からP1-P2間2.21m+P2-P3間1.86m、P8-P4間4.26m、P7-P5間4.48mを測る。

柱穴は, 方形ないし長方形 を基調とする。大きさは35~ 96cm, 検出面からの深さ32~

図27 24号建物跡

55cmを測り,西側に位置する柱穴が大きくかつ深い傾向が認められる。柱穴内の土層について詳細な記録はないが,黄褐色土や灰色粘土粒を含む黒色土がいずれの柱穴にも堆積していた。また,P  $1\cdot 2\cdot 4$  の底面は段状にくぼんだ部分が認められ,ここに柱痕が想定される。根固石は検出されていない。

本遺構から出土した遺物は、P6から出土した土師器3点・須恵器1点である。いずれも小破片のため図示しえなかったが、ロクロ成形された内面黒色処理の杯が認められた。これらはおおむね9世紀に比定されるが、遺構の年代決定資料ではない。

#### まとめ

本遺構は、比較的単純な構造をもつ小型の建物跡である。南区から検出された建物跡とは建物平面積に対する柱穴の大きさや主軸などの相違点が指摘できる。重複関係からはSD10・15より古く、主軸はむしろSD13・24をはじめとする12~13世紀の溝跡群のそれに類似する。したがって本遺構は、12~15世紀の年代幅の中でとらえられ、中世館跡に伴わない可能性も考えられる。(佐藤)

# 25号建物跡 SB25

#### 遺 構 (図28. 写真26)

本遺構は、北区のC2-E6グリッドに位置する建物跡で、標高198.6m付近の平坦面に立地している。この地区はSB30、 $SD29 \cdot 30$ など比較的遺構が集中している地点である。遺構検出面はグライ化したLN上面で、比較的容易に確認された。直接重複する遺構はないが、本遺構はSD30

をまたぐように所在しているので、同時存在はありえない。

本遺構は、南北方向に棟をもつ2×3間の総柱の建物跡で、柱穴12個から構成される。これを北西部に位置するものから時計回りにP1~P12と呼称する。建物跡の平面形は西面が長く東面が短いため若干歪んだ形状を呈している。柱間寸法をふまえた各辺の長さは、桁行き西からP1-P8間が総長7.09m = P1-P10間1.52m + P10-P9間2.86m + P9-P8間2.71m,P2-P7間が総長6.26m = P2-P11間1.18m + P11-P12間2.40m + P12-P7間2.68m,P3-P6間が総長6.71m = P3-P4間1.50m + P4-P5間2.66m + P5-P6間2.55mを測る。梁行きは、北からP1-P3間が総長3.34m = P1-P2間1.43m + P2-P3間1.91m,P10-P4間が総長3.44m = P10-P11間1.54m + P11-P4間1.90m,P9-P5間が総長3.55m = P9-P12間1.56m + P12-P5間1.99m,P8-P6間が総長3.46m = P8-P7間1.75m + P7-P6間1.71mを測る。

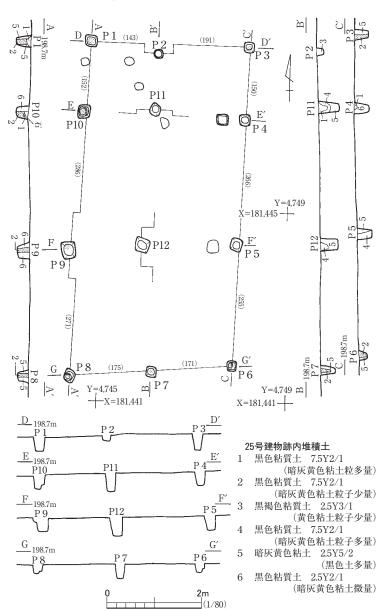


図28 25号建物跡

桁行き・梁行きとも柱間寸法が均等でなく、桁行きは南側2間分に対して北側1間分が、梁行きは西半の値が小さい。また、P2・9・12など基本柱間から外れる例が少なくない。そのため、本遺構の平面形はかなりくずれた印象を受ける。中軸線はN3°Eを指す。

柱穴は、方形を呈する例が多く、径は14~32cm、検出面からの深さは14~38cmを測る。底面の標高は197.50m付近に揃えることが多い。P2は該当する場所にこの柱穴しか存在せず本遺構に伴う柱穴と判断しているが、形状や大きさ・深さが小さく、柱間もずれている。このうちP1・3・6~10で柱痕が確認されている。根固石はどの柱穴にもみられない。本遺構から遺物は出土していない。

#### まとめ

本遺構は、平面形や柱間が不整な2×3間の建物跡である。総柱で構成されるが、柱穴の大きさや

深さは他の建物跡の柱穴と大差ない。倉庫とは考えにくく、その性格は居住施設と判断している。 出土遺物もなく年代も不明だが、周辺の建物跡が古代に比定されていることから、本遺構も古代に 属するものと推定される。 (佐 藤)

#### 26号建物跡 SB26

# 遺 構 (図29, 写真27)

本遺構は、北区北端の $C2-D4\cdot 5$ グリッドに位置する建物跡である。周辺は調査区の中で最も高い標高198.4m付近にあたり、南方および西方に緩やかに傾斜している。遺構検出面は、耕作による土層の乱れがみられた LIV 上面である。他遺構との重複はない。

本遺構は、 $2 \times 2$ 間で構成される建物跡で、柱穴7個が検出されている。南西隅の柱穴は、遺構の記録後に深掘りをかけたが検出されていない。規模は、北面は3.77m、東面3.75mを測り、南面は3.90m、西面は3.70mと推定される。柱間寸法はP1-P2間1.84m+P2-P3間1.93m、P3-P4間1.89m+P4-P5間1.86mになり、1間は約1.8mを基準としているようである。この柱間で南西隅の柱穴を想定すれば、本遺構の平面積は14.5mと復元できる。

7個ある柱穴は、平面形が隅丸方形を基調とし、規模は一辺22~30cm、検出面からの深さ13~32 cmを測る。底面の標高は、四隅の柱穴で198.10m付近に揃えている。柱穴内土層は 3 層に細分され、このうち  $\ell$  1 が柱痕と考えられる。本遺構に据えられた柱材が、柱穴掘形の大きさと大差ないものであったことが分かる。  $\ell$  1 から遺物が出土することから、この土層は柱材の腐食後ないし抜き取

运 뇨 P 1 (184)(202  $\frac{B'}{P\,4}$  $\frac{B}{P7}$  $\mathbb{O}_{\overline{P6}}$ (184) P 5 -X=181,459 山 26号建物跡内堆積土 –198.6m P 1 黒色粘土 5Y2/1 (粘性強) [1]黒褐色粘土 2.5Y3/1 B\_198.6m (砂少量, 粘性強) 黒色粘土 10YR2/1 C\_198.6m (明褐色土粒子少量) P 6 (1/80)図29 26号建物跡

り後に流入した可能性もある。

本遺構から出土した遺物は、土師器3点・須恵器1点である。上記の理由により、これらの遺物が本遺構に伴うかは疑問である。土師器は磨耗が著しく器種・調整とも特定できない。須恵器は外面にタタキメが観察される甕の胴部破片であった。

#### まとめ

本遺構は、2×2間の小型の建物 跡である。その性格や年代を示す所 見が得られているとはいえないが、 周辺建物跡との類似性や出土遺物か ら、古代に属する建物跡と考えてお きたい。

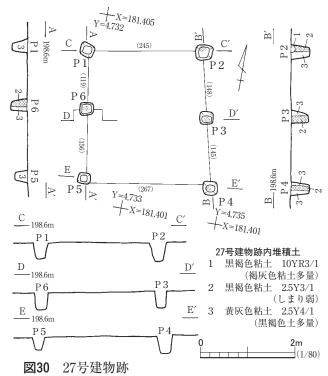
(佐藤)

# 27号建物跡 SB27

# 遺 構 (図30, 写真28)

本遺構は、北区南端のC2-D10グリッドから検出された建物跡である。遺構検出面はグライ化して灰白色を呈するLIV上面である。重複する遺構はなく、北東約7mにSB30・SD36が近接している。

本遺構は南北方向に長い2×1間の建物 跡で、規模は北面2.45m、東面2.93m、南 面2.67m、西面2.75mを測り、平面積は7.3 ㎡となる。主軸はN11°Wを指し、これは 北東に位置するSB28のそれとおおむね平 行している。桁行きの柱間寸法を述べると、 西面でP1-P6間1.19m、P6-P5間



1.56m, 東面で P2 - P3 間 1.48m, P3 - P4 間 1.45m を それぞれ測り, 位置的には P6 がわずかに北に寄った形状になっている。

6個検出された柱穴は、平面形が方形を呈し、大きさは一辺22~32cmを測る。検出面からの深さは27~40cmあり、掘形底面は標高197.90m付近でおおむね揃えられている。柱穴内堆積土は、いずれも黒褐色粘土と黄色がかった灰色粘土の混土で、このうちP2~4・6で柱痕が確認された。根固石はみられなかった。本遺構から遺物は出土しなかった。

#### まとめ

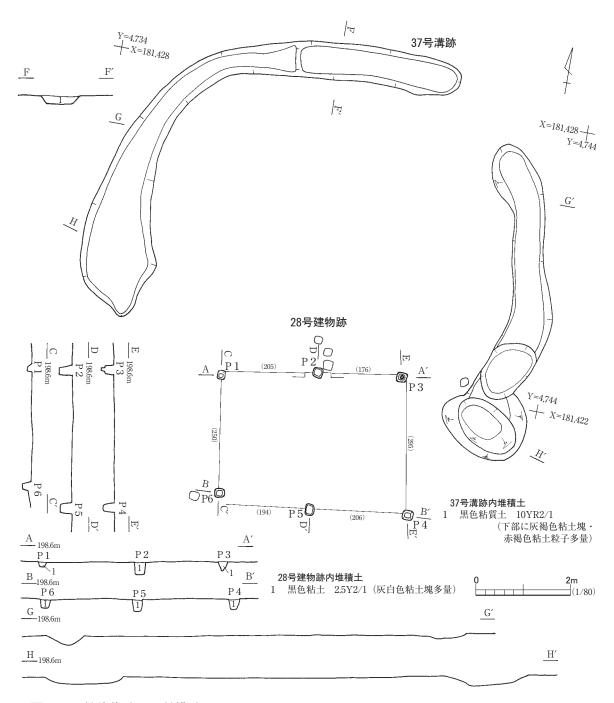
本遺構は、北区の南端に位置する小型の建物跡で、近接するSB28・30と軸線や柱穴の大きさなどで共通点が認められる。SB28・30は区画溝を伴う平安時代の居住施設と考えられており、溝跡の伴わない本遺構もこれらとともに集落を構成する建物跡と考えられる。 (佐藤)

28号建物跡·37号溝跡 SB27·SD37

# 遺 構 (図31, 写真29)

28号建物跡・37号溝跡は、北区の中央から南に寄ったC2-D8・9、E8・9グリッドにまたがって位置し、南方に開く37号溝跡の開口部に28号建物跡が位置している。周辺にはSB27・30やSD32・35・36の他、小穴数基が分布している。両遺構は、建物跡と溝跡の組み合わせで一つの居住域を構成すると判断されたため、ここでは建物跡と併せ溝跡も図示・説明することとする。

まず28号建物跡から説明していく。建物跡は東西棟をもつ $2 \times 1$ 間の構造で、遺構北面が溝跡の両端部を結んだ直線にほぼ一致する。そのため建物跡は、溝跡の開口部からやや外側に張り出した



**図31** 28号建物跡・37号溝跡

位置に構築されていることになる。柱間寸法は、北面で総長3.81m = P 1 - P 2 間2.05m + P 2 - P 3 間1.76m、東面が2.95m、南面が総長4.00m = P 4 - P 5 間2.06m + P 5 - P 6 間1.94m、西面2.50 mを測り、P 6 が北に寄っているため、柱穴配置は整っていない。主軸はN83° Eを指し、これに直行する軸線はSB27のそれに近い値を示す。

柱穴は、平面形がいずれも方形で、大きさが15~21cm、検出面からの深さが10~30cmを測り、小型である。底面の標高はおおむね198.00m近辺に揃えられており、P1・3が若干浅くなっている。次いで37号溝跡について説明する。溝跡は隅丸方形に巡るもので、南辺部が開放している。溝跡

内側で東西8.2m, 南北7.0mの広がりを区画していることになる。溝跡の幅はおおむね0.8mあり, 開口部両端では1.15~1.77mと大きく広がっている。検出面からの深さは5~26cmあり, 奥壁部と 開口部が深い。開口部が大きく深いという特徴は,北区から検出された同様の溝跡全てに共通する。北東コーナーと北西コーナーでは幅狭で検出面からも浅い。特に北東コーナーでは1.5mにわたって溝跡が途切れているので,ここに土橋状の通路を想定することも可能と考えている。溝跡内部には石や混入物を多量に含む黒色粘土が堆積しており,人為的に埋められていることが分かる。

# 遺 物 (図42, 写真75)

37号溝跡から土師器26点・須恵器20点が出土した。特に溝跡南東の開口部に接した地点より、完 形に近い須恵器杯が正位や逆位に置かれていたことから、意図的な廃棄行為が推定される。これに 対し、28号建物跡からは遺物は出土していない。このうち須恵器3点を図示した。

図42-17~19は須恵器杯で、開口部近くの底面から出土した。底面はヘラ切りされている。底径が大きく、底径/口径比は0.50を超えている。9世紀中葉から後葉に比定できる。

#### まとめ

28号建物跡と37号溝跡は、そのセットにより居住域を形成する一連の遺構群で、出土遺物から9世紀に属することが判明している。同様の遺構にSB30・SD36をあげることができ、会津盆地に所在する古代の集落遺跡において類例を認めることができる。 (佐藤)

#### 29号建物跡 SB29

#### 遺 構 (図32)

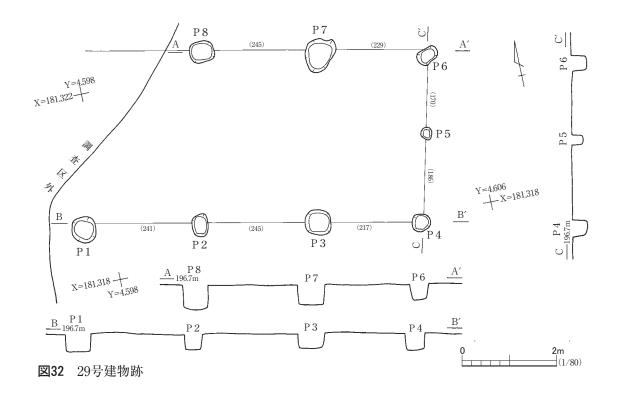
本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う南北棟の建物跡である。地鎮遺構を伴う SB17と折り重なるように重複し、連続的な変遷であったことが窺える。しかし、柱穴同士による直接の切り合いが無く、新旧関係は不明である。また、SD17とも重複関係がみられ、これより新しいことが判明している。調査区内の位置は、 $A3-J8\cdot9$ , $B3-A8\cdot9$ グリッドにまたがっており、LII上面で検出された。主軸方位は、 $N8^\circ$ Eである。

次に構造をみていくと、本建物跡は  $2 \times 3$  間以上の規模を有し、検出範囲では単純な側柱構造となっている。柱間寸法は、桁行きが、南側柱列で P1-P2 間2.41m+P2-P3 間2.45m+P3-P4 間2.17m、北側柱列が P8-P7 間2.45m+P7-P6 間2.29mを測る。また、東梁行きが、総長3.56m=P4-P5 間1.86m+P5-P6 間1.70mである。

柱穴は、径37~62cmの円形・隅丸方形を呈し、検出面からの深さは30~57cmを測る。根固石がP1に据えられていた。本建物跡から遺物は出土していない。

#### まとめ

本遺構は、中世方形館跡に伴う建物跡である。今回は部分的な調査にとどまっており、全容の解明は3次調査以降に残されている。地鎮遺構を伴う17号建物跡と同位置で重複し、連続的な変遷であったと推定される。 (菅 原)



30号建物跡・36号溝跡 SB30・SD36

# 遺 構(図33, 写真30・31)

30号建物跡と36号溝跡は北区の $C2-D9\cdot 10$ ,  $E9\cdot 10$ グリッドにまたがって検出された遺構で、両遺構とも南東部が調査区外に延びている。重複する遺構はなく、 $SB28\cdot SD37$ , SB27が近接している他、周辺に小穴15個が分布している。36号溝跡は平成17年度に実施された試掘調査で確認されていた遺構であり、この際遺構南西部の一部を壊されていた。

本遺構は、南方に開く溝跡に囲まれた空間に建物跡が伴うもので、前述したSB28・SD37と同様、建物跡と溝跡のセットで居住域を形成している。

建物跡は $3\times3$ 間のほぼ正方形の建物跡とみられ、北面・西面と南面の一部が検出されている。柱穴は、当初検出されていた7個を北東から $P1\sim7$ と呼称し、その後P8を加えた。北面・西面の柱穴は、溝跡の西辺・北辺からそれぞれ2.2mほどの間隔を保っており、建物跡と溝跡との強い企画性が指摘できる。西面での軸線はN1°Wとほぼ真北を指している。柱間寸法は、北面で総長4.17 m = P1-P2間1.89m + P2-P8間1.23m + P8-P3間1.05m,西面で総長3.76m = P3-P4間1.39m + P4-P5間1.15m + P5-P6間1.22m,南面P6-P7間0.95mを測り、P8-P3間とP6-P7間の間隔が小さい。推定される平面積は16.0m と計算される小規模な建物跡である。柱穴も小さく、一辺は $16\sim24$ cm,検出面からの深さも $8\sim24$ cm しかない。

溝跡は、北辺が長くコーナー部の屈曲が緩やかな隅丸方形を呈し、南方に開口している。この溝跡によって囲まれる空間は東西 9 m×南北 6 m = 54㎡の広がりを有すると推定される。溝跡の幅は、西側では開口部先端が最も広く1.28mあり、北西コーナー手前で一部途切れながら北辺にいたる。

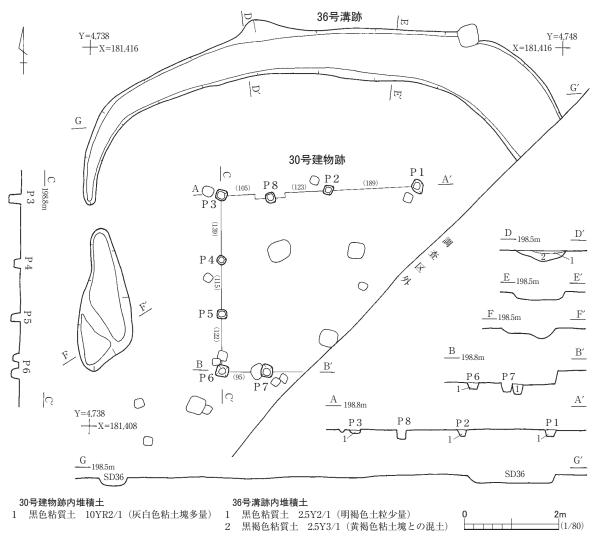


図33 30号建物跡·36号溝跡

北辺は東に向かうにしたがい徐々にその幅を広げ、調査区境で1.34mを検出している。おそらく南東隅の開口部が最も広いと推定される。検出面からの深さは5~21cmを測り、当然ながら西辺の途切れる部分が浅くなっている。遺構の上面は耕作による削平を受けているが、底面標高の高い西辺に土橋状の通路を想定することも不可能ではない。

30号建物跡 P 6 から土師器 1 点, P 7 から土師器 3 点が出土している。器面が粗く磨耗している ため図示していないが,この中にはロクロ成形の甕胴部と推測される小破片があった。特定はできないが、 9 世紀代の所産とみられる。

## まとめ

当該遺構は、強い企画をもとに構築された建物跡と溝跡からなる居住施設である。開口部が南に向けられる点は、近接するSB28・SD37と共通する。建物跡周辺には同程度の規模をもつ小穴が分布しており、建物の建て替えがあった可能性もある。その年代は、出土遺物やSB28・SD37との共通性から平安時代に求められる。

(佐藤)

## 31号建物跡 SB31

## 遺 構 (図34, 写真32)

本遺構は、北区のC2-E5グリッドに位置し、建物跡や溝跡・土坑・小穴などの集中範囲に分布している。本遺構はL W 上面やS D29・30 の底面から検出されており、S D29・30、S K65 より古いことがわかる。

本遺構は東西2間×南北1間の建物跡で、柱穴6個で構成される。規模は北面3.93m, 西面3.59m, 南面3.90m, 東面3.29mで、平面積は13.7㎡と、北部調査区から検出された建物跡の中では中型の部類である。遺構の主軸はN5°Wで、わずかに西に振れている。

東西柱列の柱間寸法は、東側が大きく西側が小さい。具体的な数値としては、北面でP1-P2間1.68m+P2-P3間2.25m、南面でP6-P5間1.33m+P5-P4間2.57mで、東西柱間の比率は3:2に計算される。柱穴は方形を呈し、大きさ $18\sim34$ cm、検出面からの深さ $18\sim45$ cmと小さい点は周辺の建物跡の柱穴や小穴群と共通する。柱穴内には、白色粘土粒を多量に含む黒色土が堆積していた。

本遺構から遺物は出土しなかった。

# まとめ

本遺構は、 $1 \times 2$ 間の単純な構造をもつ、北区では標準的な大きさの建物跡である。 $SD29 \cdot 30$  より古いことは明らかだが、周辺の建物跡とは柱穴の形状や大きさが類似していることから大きな 時間差は考えにくい。本遺構の年代も平安時代と考えている。

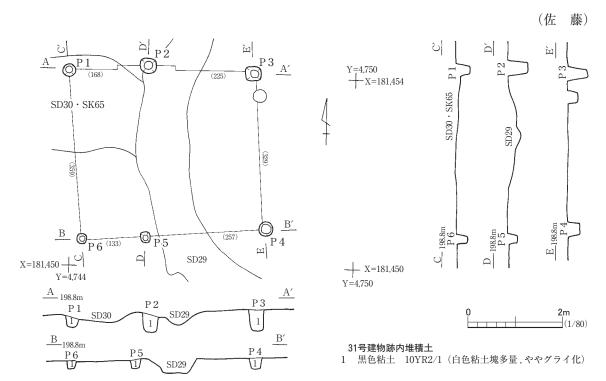


図34 31号建物跡

# 第3節 溝 跡

溝跡は33条検出された。調査区別の内訳は、南区24条、北区9条である。南区の24条は、次の2つに大別することが可能と思われる。

A:中世方形館跡に伴うもの……7~11·15·16·18号溝跡

B:中世方形館跡より古いもの……12~14·17·19~28·38·39号溝跡

このうち、Aは幅広で直線的に掘られており、主軸方位が周囲の建物跡と一致すること、また、 堆積土に粘土塊・炭化物・焼壁などを含有する特徴が認められる。

それに対して、Bは幅が狭く蛇行して掘られており、堆積土は黒色を呈する傾向がある。所属時期は、共伴遺物の特徴から平安時代(9~10世紀)と中世前半期(12~13世紀)に区分されるが、特定困難なものも多い。

北区の9条は、どれも平安時代(9世紀)の集落跡に伴うものである。このうち、29・30・36・37号溝跡は、建物外周を巡る施設跡と推定される。36・37号溝跡は、掘立柱建物跡との明確なセット関係が捉えられた。

以下,順を追って報告していく。なお,1次調査で昭和39年に埋められたことが判明している用 水路跡(2号溝跡)は、記述を省略する。

## 7·18号溝跡 SD7·18

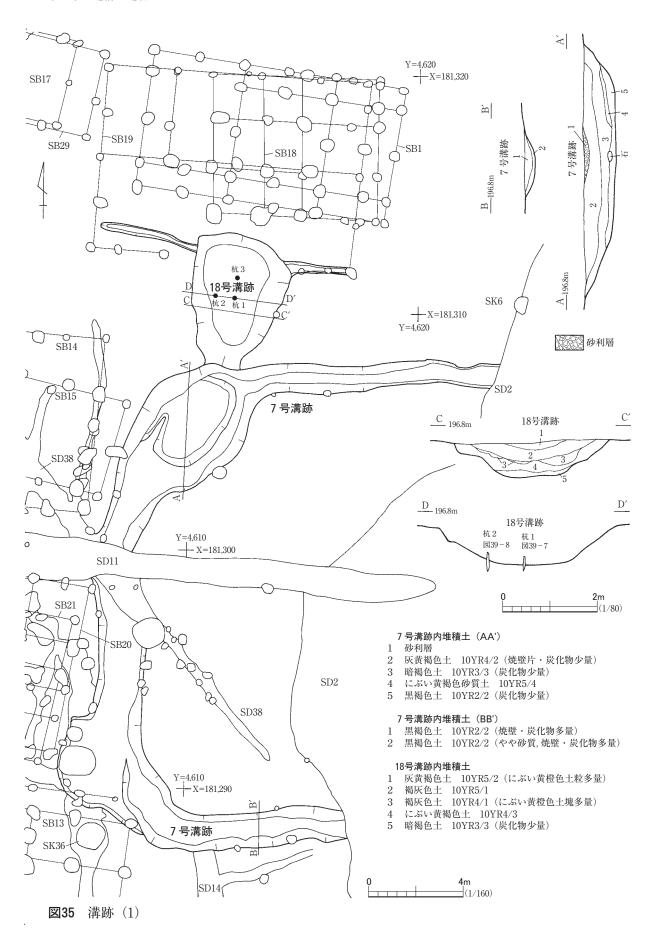
## 遺 構 (図35, 写真33・39・40)

2条の溝跡は、南区で検出された中世方形館跡に伴う池跡と、その関連施設跡である。両者は一体的に機能したので、ここでは一括して報告していく。

両溝跡は、 $B3-A\sim C10$ 、 $B4-A1\cdot 2$ 、B2グリッドにまたがっている。検出面は、LII  $\sim IV$ 上面である。池の護岸や建物根固石に転用された石、炭化物・焼壁の充満した黒褐色〜褐灰色 土の、帯状のプランとして確認できた。

全体の概要 まず、全体の概要を説明する。主殿(SB1・18・19)と向かい合う位置に、土坑状の2つの池跡が縦列し、真上からみた状態は瓢箪形を呈している。直接向かい合うのが18号溝跡、その南側に連結しているのが7号溝跡である。18号溝跡は、両脇に付設された導水施設から、清水が引き込まれる構造である。底面には杭が並んだ状態で検出され、橋脚の痕跡と推定される。7号溝跡は、全体が逆「コ」字形を呈し、城館中軸線から東側に向かって広がっている。内部には庭園が営まれていたと推測され、池跡本体は周囲より深く掘り込まれた北西隅にあたる。

水の流路は2つあり、一旦18号溝跡に貯められた水と、7号溝跡の北東側から流れ込んだ水が、7号溝跡北西隅で合流する。そして、さらに南側へ流れ出し、プランが膨らんだ南西隅でまた一時的に耐水したと推定される。規模は、瓢箪形の池跡が長軸11.1mである。また、7号溝跡の「コ」



48

字状に囲まれた部分が、内幅で計測して、南北17.5m×東西14.9m以上を測る。

**主殿との関係** 18号溝跡は、主殿で最も新しいSB19に切られ、それより古いことが判明している。また、最も古いSB18との関係は、中軸線がずれ、同時存在とするには不自然と思われる。それに対して、SB1とはほぼ真正面に向かい合い、導水施設の流路方向も建物軸線と一致している。したがって、最も蓋然性が高いのはSB1とのセット関係と考えられる。

他の遺構との重複関係  $SD11 \cdot 14 \cdot 38$ と重複し、そのどれよりも新しい。とくに城館内部を仕切る SD11との関係は、城館跡の遺構変遷を考える上で重要な所見である。

**18号溝跡** 18号溝跡は、縦長の楕円形基調を呈し、奥壁側が角張っている。規模は、南北5.6m×東西4.0m、検出面からの深さは68~72cmである。壁の傾斜角度は25~30°を測り、奥壁はその中でもやや急な立ち上がりを示す。底面はほぼ平坦で、打ち込まれた杭2本とその痕跡1本の計3本が検出された。位置は、左壁ぎわ(杭2)・中央(杭1)・奥壁ぎわ(杭3)の3箇所で、杭3は痕跡しか残っていなかったことから、他にも腐朽して無くなった杭が他にもあると推定される。それぞれの間隔は、杭1 - 杭2間76cm、杭1 - 杭3間74cmを計測し、ほぼ等間隔であった。また、先端は、杭1が14cm、杭2が25cmの深さまで達しており、どちらも礫層上面で止まっていた。上部構造の復元は困難であるが、それらは橋脚と考えられる。

導水施設は、奥壁両脇の上端付近から横に伸びている。確認長は、東側2.5m、西側4.5mを測り、 実際には水源まで続き、さらにその先が掘られていたと推定される。規模は、幅45~50cm、検出面 からの深さは14~32cmである。池跡との底面比高差は、55~86cmを計測する。

池跡の堆積土は、5層に分けられる。断面図を作成した箇所でははっきりしていないが、奥へ掘り進めたところ多量の焼壁が出土した。このことから、7号溝跡と同時に埋め戻されたことが判明している。

**7号溝跡** 7号溝跡の池跡は、南北 $5.5m \times$ 東西4.5mの楕円形を呈している。主軸方位は、18号溝跡より若干東へ振れている。両者の境界は、壁の立ち上がりで明瞭に区別され、上端は検出面から10cm前後の深さが認められた。底面は平坦で、接続する流路より北東側で56cm、南側で34cm深く掘り下げられている。堆積土は5層に分けられ、流路部分を含めて、所々に護岸や建物根固石に転用された石・焼壁が集積された状態で認められた。このことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。また、 $\ell$  1 は、ほぼ純粋な砂利層で、池の化粧に使用されていたものが一端どこかに寄せ集められ、投棄されたことが想定される。

次に、流路部分をみていく。「コ」字形を呈する範囲は、西辺17.5m、北辺14.9m以上、南辺11.0m以上の広さを測り、北辺と南辺の東端は昭和39年に埋められたSD2に切られている。南西隅は、北西隅の池跡のように平面プランが膨らんでいるが、土坑状に掘り込まれていない。この部分を除く溝幅は、1.05~1.73mを測り、検出面からの深さは12~40cmである。

遺 物 (図36~39. 写真73・78・83~86)

遺物は、7号溝跡から土師器片21点、須恵器片13点、陶磁器片10点、石製品9点、18号溝跡から

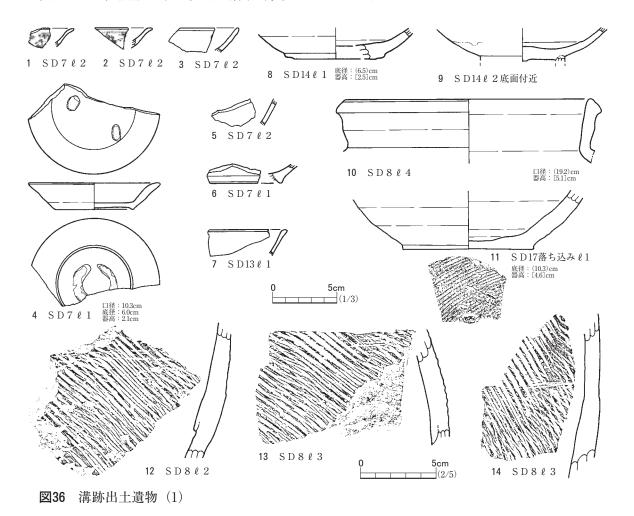
須恵器片1点,金属製品1点,木製品2点が出土している。このうち,7号溝跡出土の陶磁器6点,石製品9点,18号溝跡出土の金属製品1点,木製品2点を図示した。

図36-1・2は、S X 1 出土資料と同類の中国産染付皿である。外面に、宝相華唐草文が観察できる。同図3は、大窯1段階ないし2段階に比定される瀬戸焼灰釉皿である。S K 18出土の図58-2と胎土・焼成がきわめて類似している。同図4は、大窯4段階に比定される瀬戸焼鉄釉皿である。内外面に焼成時のトチン痕跡が残っている。同図5は、青磁碗である。14~15世紀の高麗産となる可能性がある。同図6は、16世紀末~17世紀初頭の志野焼皿と推定される。

図37-1は、多孔質安山岩製の茶臼上臼である。A4-I1グリッドP1出土の破片資料と接合し、完形になった。挽木孔には、菱形の陽刻が施されている。同図2は、多孔質安山岩製の粉臼上臼である。3/4が遺存し、ものくばり・供給口が確認できる。同図3は、デイサイト製の粉挽き臼下臼になると思われる。1/2が遺存している。同図5は、溶結凝灰岩製の石鉢である。

図38 – 2 は、溶結凝灰岩製の石鉢である。同図 3 は、溶結凝灰岩製の用途不明品である。レンガのように長方体に整形され、内部まで 2 次被熱を受けている。同図  $4 \sim 6$  は砥石を一括した。石材は、どれも流紋岩である。

図39-6は、鉄鏃であろうか。断面は方形を呈している。



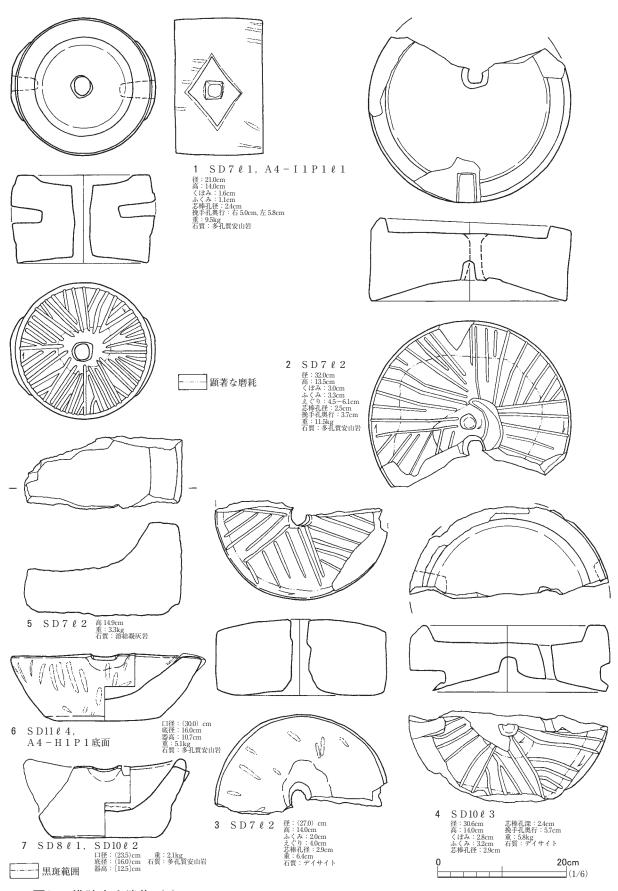


図37 溝跡出土遺物 (2)

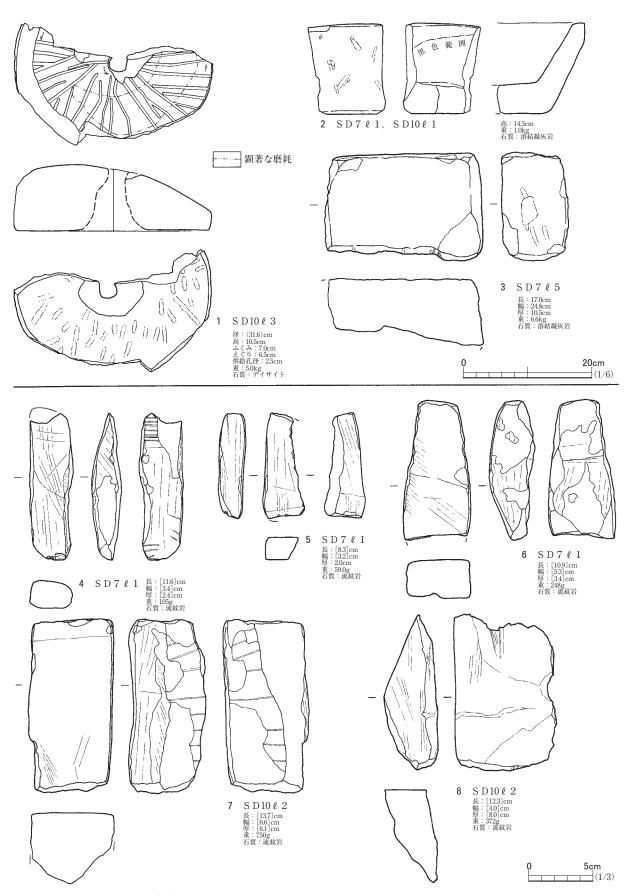


図38 溝跡出土遺物 (3)

図39-7・8は、18号溝跡の池跡底面に打ち込まれていた杭である。どちらも粗く先端を尖らせており、地表面に出ていた方は腐食して残っていない。

### まとめ

本遺構は、中世方形館跡に伴う池跡と、その関連施設跡である。 3 時期変遷のある主殿のなかで、中間時期にあたる S B 1 に併存していたと推定される。池跡は 2 個縦列し、主殿正面の遺構には橋と思われる痕跡が確認されている。県内の類例は、国見町金谷館跡にみられ、館全体からみれば東側に位置している点も共通している。したがって、中世城館に伴う池の 1 つのパターンであったことが窺える。

営まれた時期は15世紀に上限が求められ、下限については大窯4段階の瀬戸焼が出土していることから、16世紀後半と考えられる。 (菅原)

## 8号溝跡 SD8

## 遺 構 (図44~46, 写真33)

本遺構は、館跡の中央やや西側を南北に走る溝跡である。 $A3-I8\sim10$ 、A4-I1、A3-J8 グリッドにまたがって検出されている。SB9、 $SD10\cdot12\cdot23$ 、SK29と重複し、 $SD12\cdot23$ より新しく、 $SB9\cdot SD10\cdot SK29$ より古い。遺構検出面は、 $L\Pi\sim \mathbb{N}$ である。

遺構は南区北端から1.5m手前の地点から掘り込まれ、おおむね直線的に南下してSK29に至る。全長は32.7mを測る。北端部3mほど北方の調査区外には、館跡を囲む堀であるSD1が東西に走っており、遺構の北端部からSD1に至る空間には土塁の存在が予想される。

本遺構の幅や底面の状況は、地点により異なっている。北から約30mの地点までは幅1.8~2.0m・深さ70~80cmと広く深いのに対し、それ以南は底面が段状に立ち上がり深さ30cm程度で南に走る。さらに南端部は幅狭で、10~15cmと浅くなってSK29に至っている。

遺構内に堆積している土層は、下層に水性堆積を示す土層、上層に人為的に埋め戻された土層で共通する。下層には粘土層と砂層が互層となっており、溝内に水がある程度浸っていた様子が復元できる。上層の土層には混入物が明瞭に認められ、北部からは焼壁も出土している。また、土層断面図(AA')  $\ell$  1 は本遺構を覆うのみならず、遺構周辺にも分布していた。この層については土塁が崩れて堆積した可能性を考えている。

## **遺** 物 (図36・37・43, 写真75・77・84)

本遺構から土師器13点・須恵器24点・陶磁器 2 点の他、焼壁1.8kgが出土している。平面的には遺構北半のA3-I8・9グリッドに多く、南半からの出土は少ない。層位的には上層からのみ出土する。  $\ell$ 4出土で取り上げた遺物も全て層理面からの出土である。

図36-10・12~14は須恵器系中世陶器で、12~14は同一個体とみられる。10は口縁部片で、直線的に立ち上がり口端が外削状をなしている。胎土の特徴から珠洲窯産の可能性がある。12~14が胴部片である。外面に密な平行タタキメ、内面に当て具痕が観察される。12世紀末から13世紀初頭の

### 第2章 遺構と遺物

所産である。いずれも胎土には海綿骨針が多量に含まれる。珠洲窯ではない海岸部の窯で生産されたと考えられる。図37-7は片口の付いた多孔質安山岩製の石鉢で、SD10出土の個体と接合した。体部下半で屈曲する器形を呈する。図43-1は須恵器甕の体部片である。

## まとめ

本遺構は、館内部を東西に分割する溝跡である。他遺構との重複関係から、館跡の変遷の中では 古い段階に位置づけられる。焼壁の出土から建物の焼失に伴う片付け行為の際に埋め戻された可能 性が高い。 (佐藤)

## 9号溝跡 SD9

## 遺 構 (図47. 写真34)

本遺構は、南区南西部を東西に走る溝跡である。 $A4-F1\cdot G2\cdot H2$ グリッドにかけて所在する。周辺の傾斜は本遺構を境にわずかながらきつくなっている。遺構検出面は赤みの強い砂層上面で、この層はLVに対応することを確認している。他遺構との重複関係は、 $SK7\cdot 8$ と重複しいずれにも壊されている。

遺構は、全長19.4mにわたり検出された。ちょうど SB8の南側から北西方向に走り、調査区外に伸びる。幅は $1.1\sim1.8$ mを測り、西部で広い。深さは $30\sim50$ cmを測り、周壁は逆台形状を呈している。主軸は $N60^\circ$ Wで、これは周囲の等高線に平行し、SD10のそれに近似している。

遺構内堆積土は3層に細分され、混入物が多いことから人為堆積と判断された。本遺構から出土 した遺物は、土師器片9点・焼壁小片2点を数える。いずれもℓ1から出土しており、直接本遺構 に伴う資料ではない。

#### まとめ

本遺構は、東西方向に走る溝跡である。SD10とは主軸や規模で共通性が認められる。また、遺構の軸線は近接するSD15とも類似する。したがって、本遺構が館跡に伴う区画溝である可能性が高く、SK8との重複関係から館跡の比較的古い段階に位置づけることができる。 (佐藤)

## 10号溝跡 S D 10

#### 遺 構 (図45・46. 写真33・35)

本遺構は、南区西半の $A3-G10\cdot H10\cdot I10$ 、A4-I10 グリッドにまたがって検出された東西方向に走る溝跡である。遺構検出面は、東半でLII 上面、西半でLIV 上面である。周辺には掘立柱建物跡・溝跡・土坑などが集中している。 $SB11\cdot 24$ 、 $SD8\cdot 13\cdot 15\cdot 27\cdot 28$ 、SK49、小穴と重複し、小穴数個を除いて、いずれよりも新しい。

溝跡はSB11の北側から掘り込まれ、SD15との重複箇所で一旦途切れながら北西方向に走り、西方は調査区外へ伸びている。全長は25.3mが確認されている。主軸はN73°Wを指し、前述したようにSD9のそれと近似した値を示す。遺構各部の規模は、東半が幅1.0m、深さ13cm、西半が

幅1.5~1.7m, 深さ55cmを測り, 西半が広く深い。ところで, 遺構西半の底面は平坦でなく, 南側が薬研状に1段くぼんでいる。土層断面の観察からは, 北部の平坦な部分に合わせるように $\ell$ 3を埋めていることが確認されている。したがって, この部分では溝跡を作り替えたことが分かる。遺構内堆積土は混入物が顕著で、明らかな人為堆積である。

### 遺 物 (図37~39, 写真84·85)

図37 – 4,図38 – 1 は粉臼で,図37 – 4 が上臼,図38 – 1 が下臼である。どちらも約50%が遺存し,6 画に区画された粗い目が巡っている。図38 – 7 · 8,図39 – 1 は流紋岩製の砥石である。この他,中世越前焼の甕が出土しており,SD7 · SK18と接合した。図58に図示し,記述はSK18の項目で行っている。

## まとめ

本遺構は、作り替えの痕跡が確認された東西方向に走る溝跡で、周辺遺構の中では最も新しい。 出土遺物はSD7・SK18と接合することから、館跡機能時の中段階に比定できる。館跡東部に所 在するSD11とは、館跡を南北に区画し底面が薬研状を呈するなど類似性が指摘でき、共通する機 能を果たしていたと考えられる。 (佐藤)

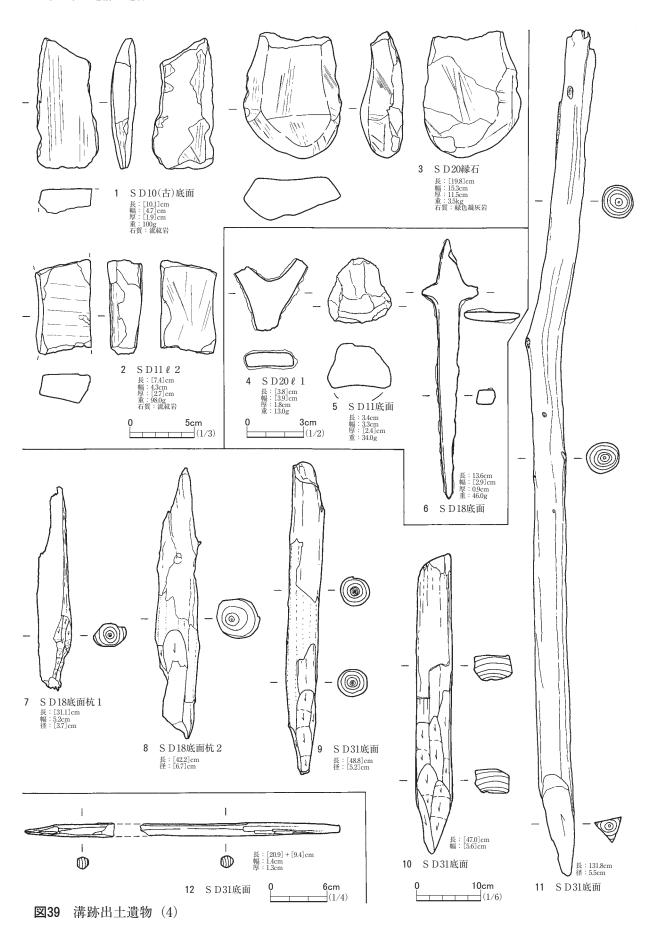
## 11号溝跡 S D 11

#### 遺 構 (図40. 写真36)

本遺構は、南区の中世方形館跡に伴う区画溝跡である。館平面プランの東西中軸線上とほぼ重なる位置で、直線的に掘られている。調査区内の位置は、A3-J10、A4-J1、B3-A10 · B 10、A4-A1 · B 1 グリッドにまたがっており、 $L II \sim IV$  上面で検出された。周辺遺構との関係は、SB20、 $SD2 \cdot 7 \cdot 17 \cdot 38$ と重複し、SB20、 $SD2 \cdot 7 \cdot 50$  · 50 · 5

本遺構の主軸方位は、E3°Sを測る。全長は24.5m以上で、<math>SD2に切られた東端はどこまで伸びるのか不明である。西端に関しては、調査区境で西壁の立ち上がりが確認され、1m以内で止まることが判明している。したがって、<math>SD16とは接続しないことが明らかであるが、両者は逆「L」字状をなしており、一体的に機能した可能性が高い。断面形は、中央が漏斗状に深く落ち込んでおり、周囲はテラス状に広がっている。

堆積土は6層に分かれ、人為的に埋め戻された状況を示していた。とくに上層( $\ell$  1~3)は、にぶい黄橙色土塊が多量に含有され、SD16の状況とよく似ていた。また、検出範囲の西端付近では、底面直上に破砕貝殻の集積が認められた。



56

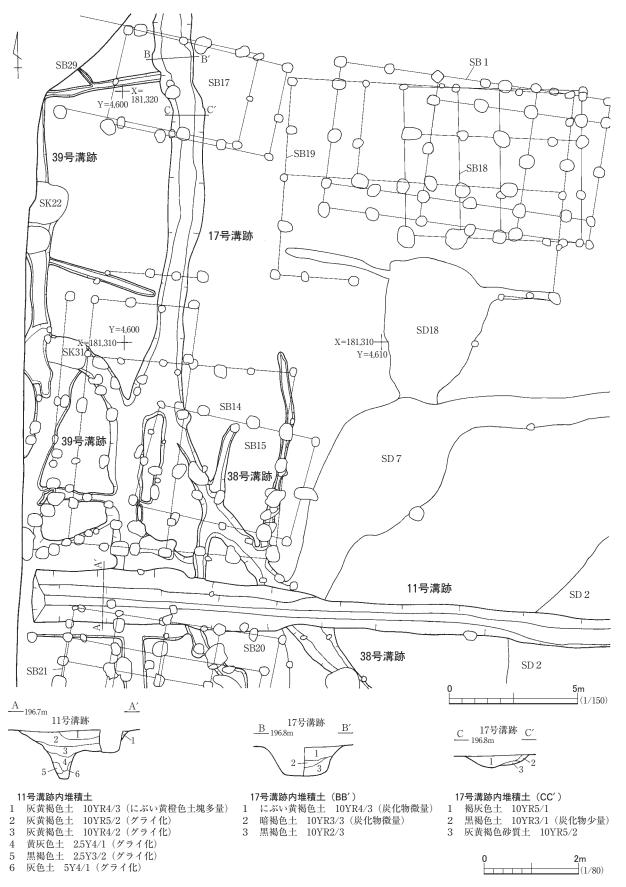


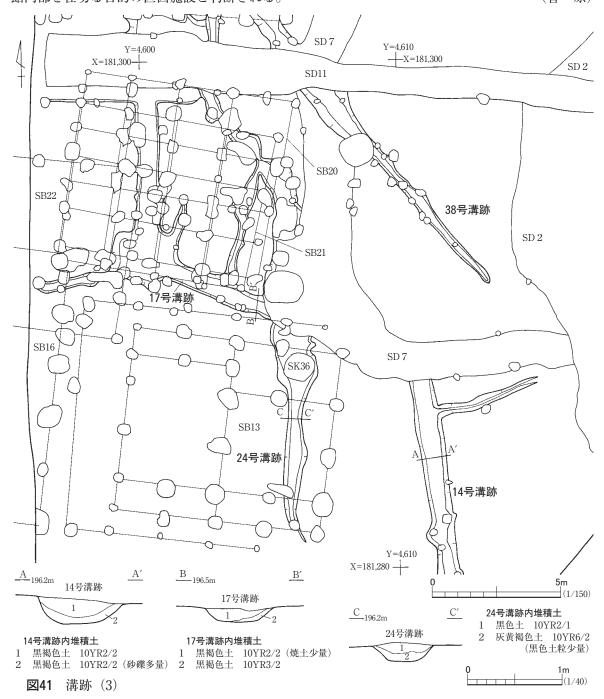
図40 溝跡 (2)

## **物**(図37・39, 写真75・85)

本遺構からは、土師器片24点、須恵器片12点、石製品 2点、鉄製品 1点が出土した。図39 - 2は、流紋岩製の砥石である。図39 - 5は、用途不明の鉄製品である。図37 - 6は、多孔質安山岩製の石鉢である。

## まとめ

本遺構は、中世城館跡に伴う溝跡である。館平面プランの東西中軸線上に掘られ、断面は漏斗状を呈している。西端は途切れ、堆積土にも水が常時流れていた痕跡は認められない。したがって、館内部を仕切る目的の区画施設と判断される。 (菅 原)



## 12·13·25·26号溝跡 SD12·13·25·26

#### 遺 構 (図44·45)

これらの溝跡は、南区の北西部から検出され、調査所見から館跡より古いと判断された遺構群である。位置的には $A3-H9\cdot 10$ 、A3-I9グリッドを中心とする範囲に分布している。13号溝跡は調査区の西側を蛇行しながら縦断しており、 $A4-H1\cdot 2$ 、A4-I2グリッドにまたがっている。まず、他遺構との重複関係を述べる。12号溝跡は $SB9\cdot SD8$ のいずれより古い。13号溝跡は $SD10\cdot 16\cdot 22$ と重複し、 $SD10\cdot 16$ より古く、SD22とは不明である。25号溝跡はSK13より古く、26号溝跡はSB24より古い。このように、これらの溝跡は館跡に伴う遺構群より古いことが分かる。

遺構の在り方は多様である。12号溝跡は直線的に走るのに対し、13号溝跡は途中で途切れながらも蛇行して南方→東方へと伸びている。25号溝跡は島状の高まりを不整に巡り北側で分枝する。26号溝跡は屈曲して南下している。大部分の溝跡は、幅・深さとも30cmを測る。溝跡は数箇所で交差していた。溝跡同士の新旧関係を確かめるため、重複部上面あるいは土層断面で観察を行ったが、明瞭な所見は得られていない。どの溝跡も、堆積土は粘土粒を含んだ黒色土で、人為的に埋め戻されている。

## 遺 物 (図36・42, 写真73)

当該溝跡群から出土した遺物は、13号溝跡から土師器45点・須恵器 4 点・陶磁器 1 点、25号溝跡から土師器18点・須恵器 5 点、26号溝跡から土師器33点・須恵器 3 点を数える。すべて堆積土からの出土である。

図36-7は中国産白磁碗で、堆積土上層から出土した。大宰府V類に比定でき、12世紀末葉から13世紀初頭にかけての所産とみられる。同時期に比定される白磁皿の小片が、近接するSK12から出土しており、周辺遺構の年代を示す資料と考えられる。図42-1は土師器杯で、底部に回転糸切り痕をそのまま残し、体部調整はみられない。

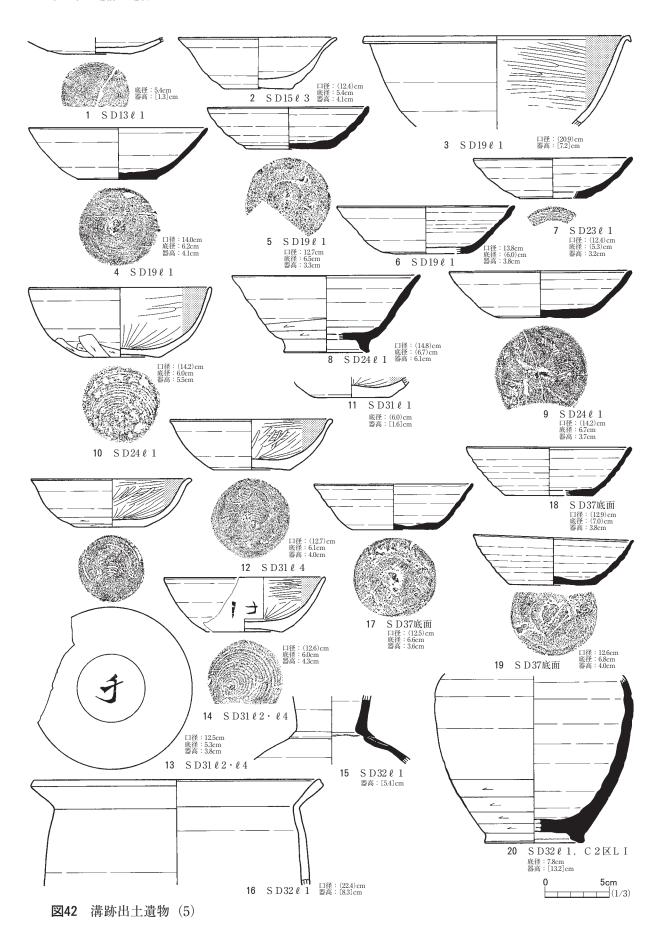
#### まとめ

本遺構群は、館跡に伴う溝跡群とは調査所見が大きく異なる。重複関係から、それらに先行するのは明らかである。出土遺物は9世紀に属するものと12~13世紀代のそれに区別され、ここでは年代的に新しい後者を年代決定資料としたい。白磁碗は隣接するSK12からも出土しており、同時性が指摘できる。その性格は不明だが、区画施設や流路などと考えられる。 (佐藤)

14·17·24·38·39号溝跡 SD14·17·24·38·39

## 遺 構 (図40·41, 写真37·41)

14・17・24・38・39号溝跡は、南区の中世方形館跡より古い溝跡群である。幅が狭く蛇行して掘られており、堆積土が黒色・黒褐色を呈する点で共通している。ここでは一括して報告する。



14号溝跡は、B4-B2・3グリッドにまたがっており、LII・III上面で検出された。確認長は12.0mで、南北方向へ伸び、北端はSD7に切られ、南端は調査区外に伸びている。幅85~103cm、検出面からの深さ24~30cmを測る。

17号溝跡は、B4-A1、B3-A8~10グリッドにまたがっており、「L」字状を呈している。確認長は38.5mを計測し、東端はSD7に切られている。一方、北端は調査区外に伸び、そのまま延長すると1次調査区のSD6にぶつかることから、同一遺構の可能性が高いと思われる。幅1.0~1.4m、検出面からの深さ30cmを測る。SB17との重複箇所に、土坑状の落ち込みが認められる(図40-BB′)。これと平行する39号溝跡は大部分が未調査であり、詳細は3次調査以降に報告する。

24号溝跡は、B4-A2グリッドに位置し、LI上面で検出されている。確認長は8.1mで、南北に伸び、北端はSD7に切られている。幅0.7~1.3m、検出面からの深さ17~25cmを測る。

38号溝跡はB3-A10, B4-A1・B1グリッドにまたがり, LⅡ上面で検出された。全長 18.5mで, 北西-南東方向へ伸び, 北西端はSD17に合流している。幅38~98cm, 検出面からの深 さ18~46cmを測る。

# **遺 物**(図36・42, 写真73・74・77)

遺物は、14号溝跡から土師器片13点、須恵器片2点、かわらけ片1点、陶磁器片1点、17号溝跡

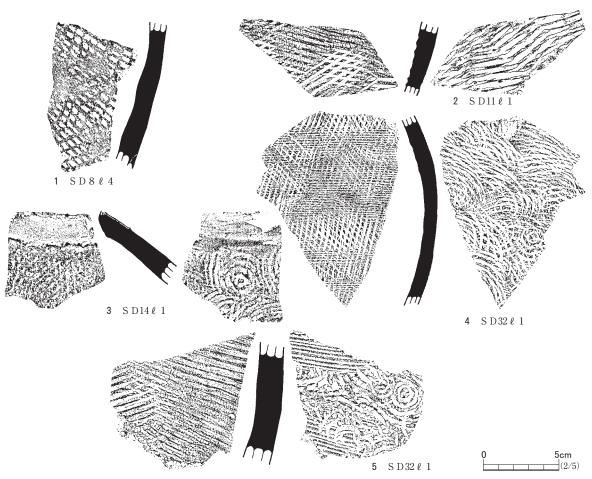


図43 溝跡出土遺物 (6)

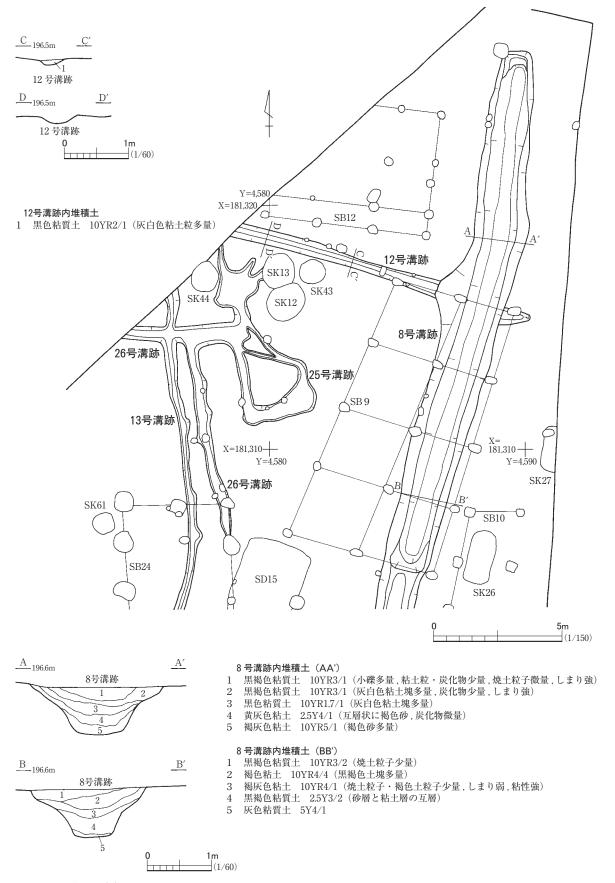


図44 溝跡(4)

から土師器片15点, 須恵器片 6点, 陶磁器片 2点, 24号溝跡から土師器片58点, 須恵器片16点が出土した。このうち、6点を図示した。

図36-8は、14号溝跡出土のかわらけである。器面の摩耗が著しく、調整痕は観察できない。分厚い底部と体部に丸みのある特徴から、12世紀後半に比定される。同図9は、白磁碗V類である。同図8とは近接する位置の堆積土下部から出土している。三角形の高い高台が付くもので、12世紀中~後半に位置づけられる。同図11は、17号溝跡出土須恵器系中世陶器片口鉢である。底部に静止糸切り痕が残っている。胎土の特徴から、珠洲焼ではないと判断される。13世紀初頭頃に位置づけられる。

図42-8~10は、24号溝跡出土の土師器・須恵器である。それらは一箇所に固まった状態で出土したので、共伴関係にあると見なすことができる。年代は9世紀後半~末に比定される。同図8は、須恵器高台杯である。口縁部が直線的に外傾し、高台は外端接地する。同図9は、須恵器杯である。体部の腰が張り、口縁部は内湾気味に立ち上がっている。底部は回転へラ切り無調整である。同図10は、土師器杯である。器高が高く、体部~口縁部は内湾して立ち上がる。底部は回転糸切り無調整である。

## まとめ

5条の溝跡は、中世方形城館跡より古い時期の遺構である。遺物の特徴から、14・17号溝跡は中世前半(12世紀後半~13世紀初頭)、24号溝跡は平安時代前半(9世紀後半~末)に営まれたと推定される。残る38・39号溝跡については、時期不明である。 (菅 原)

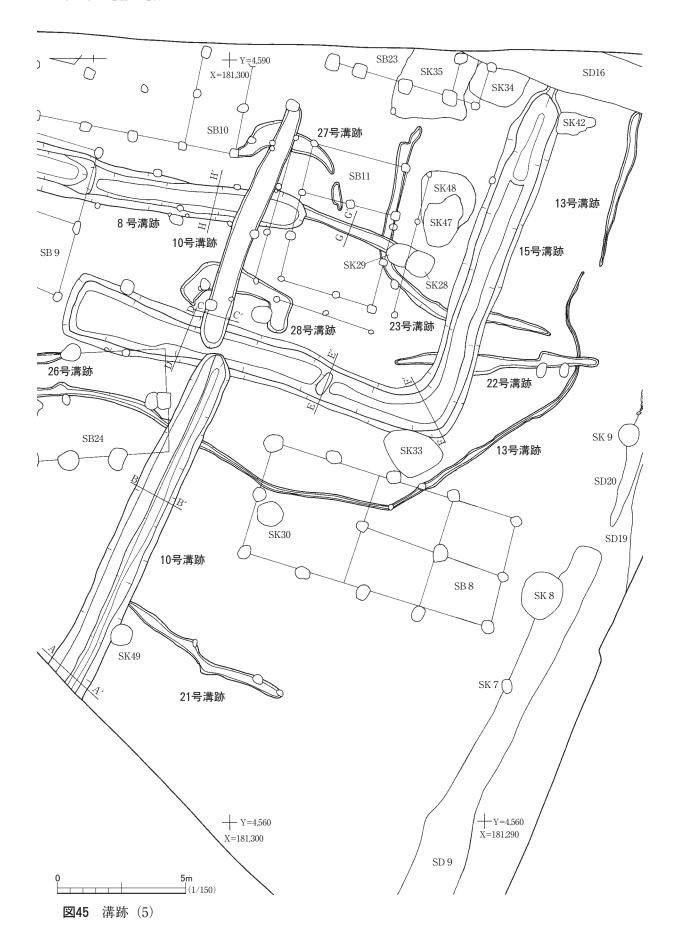
## 15号溝跡 S D 15

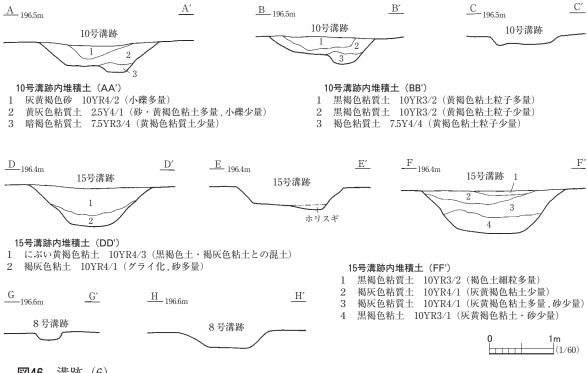
#### 遺 構 (図45・46, 写真37・38)

本遺構は、南区西側のA3-H10・I10、A4-H1・2、A4-I1・2グリッドにわたって L字状に走る溝跡である。この地区は館跡の中心部分にあたり、本遺構はこの範囲の南西部を区画 している。SB24、SD10・22・23、SK33・42と重複し、SB24、SD22・23、SK33・42より 新しく、SD10より古い。また、遺構の東端でSD16と連結する。

遺構は、南西方向に直線的に走り、直角に折れ東方に方向を変えてSD16に連結する溝跡である。長さは、南北方向に16.0m、東西方向に14.7mを測る。西辺および南辺の軸線は、本遺構に区画された空間に約2mはなれて存在するSB11のそれと共通する。本遺構とSB11とに強い相関性が認められる。開口部の幅は北側で2.3m、中央で1.9m、南側で1.8mあり北側が広い。底面から周壁にかけての断面形は比較的整った逆台形で、検出面からの深さは $60\sim70$ cmあり、底面標高は南→東に若干傾斜している。また、北から10m付近では底面を横切るような土橋状の掘り残しが確認された。この掘り残しは幅40cmあり、底面から35cmの高さのところで掘削を止めて構築されている。障子堀の可能性も否定できないが、 $SB11\sim$ 通ずることを評価して通路と考えている。

溝跡内堆積土は、上層が人為堆積を示し、下層(断面図DD′ℓ2と同FF′ℓ4)はグライ化し





#### 図46 溝跡(6)

た粘土や砂が確認できることから、水に由来する土層と考えられる。水は溝跡中位あたりまで溜まっ ていたと推定される。またSD16との連結部にはℓ1が連続していたことから、本遺構とSD16に 大きな時間差は考えにくい。

#### 遺 物 (図42)

本遺構から、土師器174点・須恵器12点の他、壁材少量が出土した。層位的には人為的に埋め戻 された土層中に多く、底面からの出土は少ない。したがって、これらの遺物は本遺構の年代決定資 料とはならない。

図42-2は体部上半で外反する土師器杯で、内面黒色処理はなされていない。10世紀初頭の所産 であり、出土地点からSK42の遺物が転落したものと考えられる。

### まとめ

本遺構は、直角に屈曲する溝跡で、底面に土橋状の掘り残しが確認された。軸線や位置関係から、 本遺構は近接するSB11に伴う区画溝と推定され、底面の掘り残しは通路である可能性が高い。他 遺構との重複関係から、館跡機能時の中段階かそれ以前に位置づけられる。 (佐 藤)

#### 16号溝跡 S D 16

## 構 (図47. 写真38)

本遺構は、南区南端のA4- | 1~3グリッドから検出された直線的に走る溝跡で、遺構の北半 は南区を東西に隔てる農道下に伸びている。遺構検出面はLⅣ上面である。SD13、SK34・35と 重複し、いずれより新しい。また、前述したようにSD15とは同時存在した可能性がある。

### 第2章 遺構と遺物

遺構は調査区南端から掘り込まれ、北東方向に伸びた約18mの地点で調査区外へ至る。開口部の幅はおおむね1.8m、検出面からの深さは $60\sim70$ cmあり、この値は館跡に伴うと考えられる溝跡と大差ない。底面は平坦で、遺構南端部のみ1段掘り窪められた部分が観察できる。遺構内堆積土は上層の $\ell$ 1・2が人為堆積、 $\ell$ 3は自然堆積を示す。調査中に底面から湧水がみられたことから、一定程度の水は溜まっていたと推定している。

本遺構からは土師器108点・須恵器10点・壁材少量が出土している。いずれも人為的に埋め戻された土層からの出土で、本遺構には伴わない。

#### まとめ

本遺構は、館跡を東西に区画する溝跡である。詳細は3次調査以降に委ねるが、これまでの調査 所見から館跡機能時の中段階から新段階に属すると推定される。 (佐藤)

## 19·20号溝跡 S D 19·20

## 遺 構 (図47, 写真41)

両溝跡は、南区南端のA4-G2・H2・I2グリッドにかけて所在する古代の溝跡群である。 周辺は傾斜の変換点にあたり、両溝跡の南側は相対的に傾斜が強くなっている。2つの溝跡は西方では並行して走り、東部で重複する。新しい溝跡が20号溝跡、古い溝跡が19号溝跡である。また、19号溝跡はSK9・50と重複し、いずれよりも古い。よってこれらの新旧関係は、古い方からSD19→SD20→SK9・50の順になる。なお、出土遺物などからSK50が平安時代、SK9は館跡機能時に位置づけられている。

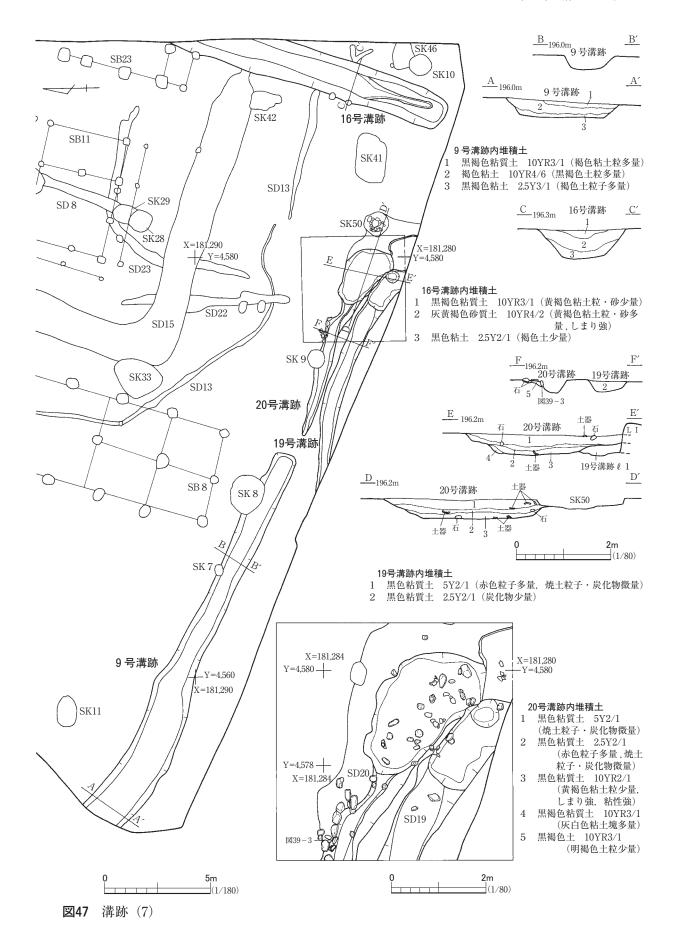
遺構は、やや丸みを持って南東方向に走り、南東隅で合流する。どちらも南東部が調査区外に伸び、19号溝跡では西部も伸びているため、遺構の全容は不明である。検出された長さは19号溝跡が9.5m、20号溝跡が10.5mである。幅は西部で狭く、合流部で大きく広がっている。検出面からの深さも合流部が格段に深い。このように溝跡はその東西で形状が大きく異なっている。

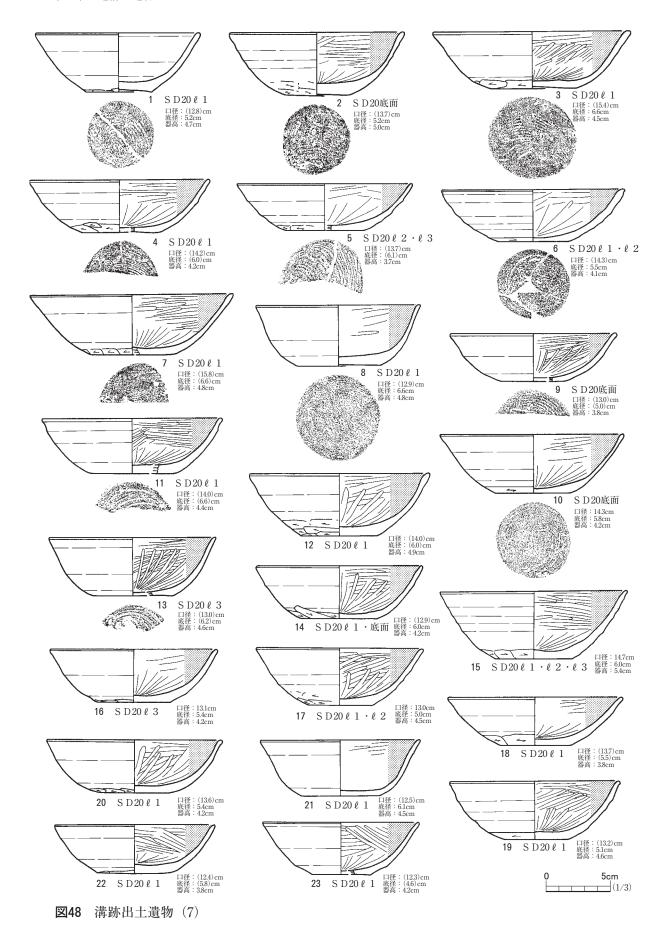
20号溝跡の北壁の一部には周壁の補強として河原石を設置している。精査の結果、比較的大きな掘形をもち、ここに石を立てて壁体としていることが判明した。遺構内堆積土はおおむね人為堆積を示し、特に  $\ell$  2 · 3 は混入物が多く、堅く締まった土層であった。これらの上層に堆積する  $\ell$  1 を掘り込んで、S K 50石敷部が構築されている。掘形を含まない遺構の幅は、西側で45cm、東側で108cmを測る。

## **遺** 物 (図39・42・48~50, 写真71・72・74・85)

19号溝跡から土師器49点・須恵器13点, 20号溝跡から縄文土器1点・土師器2,187点・須恵器168点・石製品1点・鉄製品1点が出土した。20号溝跡では、 ℓ1出土が多数を占めるが、 ℓ2・3を経て底面までまんべんなく出土する。これらの遺物は、完形土器や大型破片が多い。

図42-3は19号溝跡から出土した土師器鉢で、体部は内湾気味に立ち上がる。器面内面は黒色処理され、密なヘラミガキが施される。同図  $4\sim6$  は須恵器杯で、9世紀末に比定される。 $4\cdot6$ の





68

ように口径が相対的に大きく深い例と、小さく浅めの5に分けられる。

以下には20号溝跡の出土遺物を説明する。図48~図50-4には土師器杯を図示した。すべてロクロ成形で、器面内面が黒色処理されヘラミガキが施される例が大部分を占め、体部の再調整は下端に限られるようである。図48-1のみ内面黒色処理とならない。体部調整は手持ちヘラケズリが卓越している。土師器杯は、以下の5類に細分できる。

A類は口径が比較的小さく浅い一群を一括した。図 $48-4\sim6\cdot9\sim11\cdot14\cdot16\cdot18\cdot20\cdot22\sim20$  ~図49-4 が該当する。口径が13cm前後で,器高/口径比が $0.27\sim0.34$ と小さく,特に $0.30\sim0.31$ に集中する傾向がある。底径/口径比は $0.37\sim0.48$ ある。器形は,体部下半に丸みをもって立ち上がり口端が外反する例が多く,内湾気味に立ち上がるものもある。体部調整が観察できるものには手持ちヘラケズリが多数を占め,回転ヘラケズリも少数ある(図 $48-6\cdot10$ ,図49-3)。

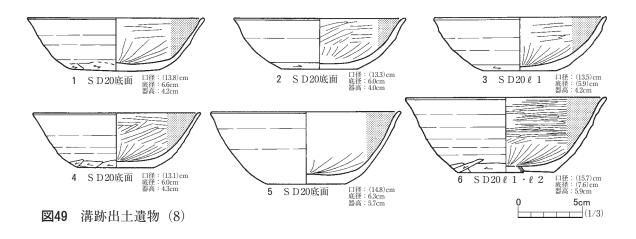
B類は口径が小さい一群のうち器高の高いものである。図48-8・12・13・17・19・21が該当する。器高は4.5cm以上あり、器高/口径比が0.35前後となる。そのため、A類に対して深い印象を受ける。器形は内湾気味に立ち上がり、口端が外反する。21のみ体部上半から外傾している。体部調整は回転へラケズリと手持ちヘラケズリが拮抗している。

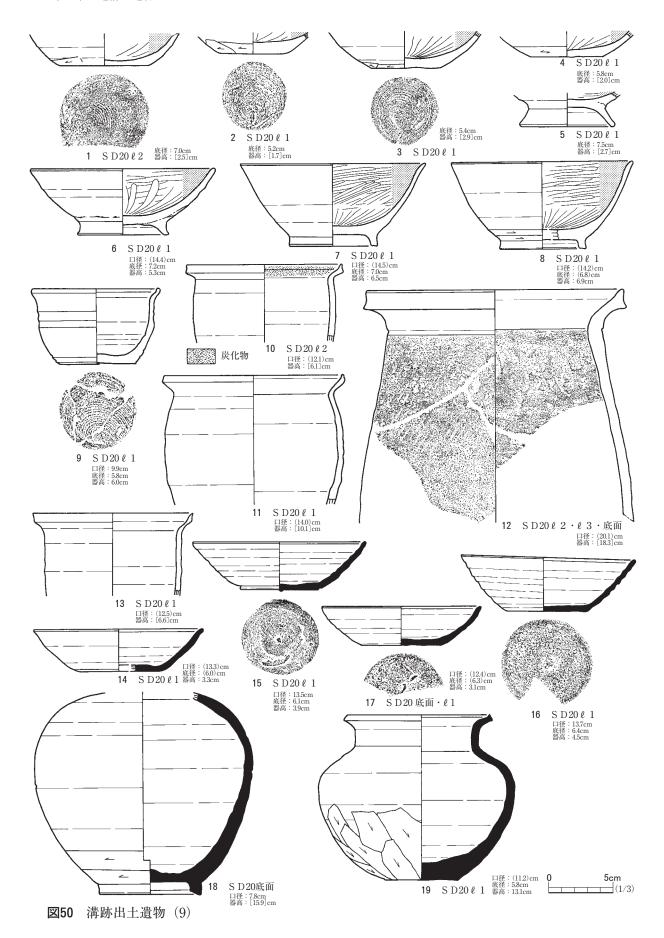
C類は口径が大きく器高が低い一群である。図48-3・7を図示した。両者とも口径が15cmを超える大型の杯で、器高が4.5cm前後のため、器高/口径比は0.29~0.30を示す。

D類は器高が高い杯で、図48-2・15、図49-5・6が該当する。器高が5 cmを超え、口径も $13.7 \sim 15.7 \text{ cm}$ と大きい。そのため器高/口径比は $0.36 \sim 0.39$ とB・C類に近い値を示す。器形や体部調整などは $A \sim C$ 類と大差ない。

E類は内面黒色処理されない土師器杯で、図48-1のみが該当する。器形や大きさなどはB類に類似し、体部には手持ちヘラケズリが施されている。図示しなかった資料に、内面黒色処理されない杯は確認できるが、数的には極めて少ない。

図50-5~8は高台杯である。高台部は低く張りが弱い例が多く(6~8),比較的高く高台が広がるのは5のみである。器形も口端の外反が弱く器高もそれほど高くなっていない。いずれも内面黒色処理される。同図9~13は土師器小型鉢・甕を一括した。10~13は長胴甕で,胴部最大径は





10・11が体上部、12が体部下半、13は直に下がっている。この他筒形土器も少量出土している。

14~19は須恵器で、14~17が杯、18が長頸瓶、19が壺とみられる。14・17は器高の低い杯、15・16は器高の深い土器群である。この杯の組み合わせは19号溝跡のそれと類似する。器形は、底部から外反気味に立ち上がり、17が内湾気味に立ち上がる。いずれも底面の切り離しはヘラ切りされている。18は比較的広めの頸部とみられる。19は小型の短頸壺で、口縁部は直立している。

図39-3は20号溝跡の周壁縁石に用いられていた砥石で、器面全面に磨面が観察される。同図4は雁股鉄鏃で先端と茎部を欠損する。

#### まとめ

両遺構は、やや丸みをもつ溝跡で、堆積土は人為的に埋め戻され、その際多量の遺物が廃棄されている。部分的な検出なので、遺構の全体像は不明であるといわざるをえない。出土遺物は、9世紀後半のなかで捉えられる。重複するSK50の出土遺物と大きな時間差はなく、関連する機能を想定することも不可能ではない。 (佐藤)

21~23·27·28号溝跡 S D 21~23·27·28

#### 遺 構 (図45)

これらの遺構群は、南区南西部から検出された溝跡のうち、館跡より古いものを一括した。遺構 検出面はいずれもLN上面である。それぞれSD10・15、SK29と重複し、そのいずれよりも古い。 これらの溝跡の特徴は、館跡に伴う溝跡より明らかに小さい点である。幅は、最も広い部分でも 1 mしかない(28号溝跡)。検出面からの深さも30cm未満と浅い。以上の所見は、やはり館跡より 古いとみられるSD13・25・26と共通する。直線的に走る溝跡(21・22号溝跡)や屈曲をもつ溝跡 (23・27・28号溝跡)がある。遺構内堆積土は混入物を多く含む黒色土で、人為堆積を示す。

#### 遺 物 (図42)

これらの溝跡から出土した遺物は以下の通りである。22号溝跡から土師器88点・須恵器3点,23 号溝跡から土師器19点,27号溝跡から土師器13点・須恵器3点,28号溝跡から須恵器1点を数える。 図42-7は須恵器杯である。器高が低く、SD19・20から出土した須恵器杯と類似している。

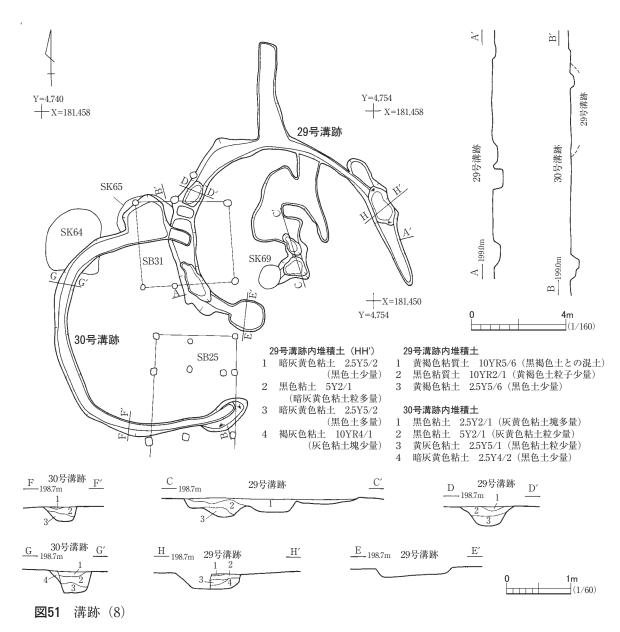
### まとめ

21~23・27・28号溝跡は、館跡より古い遺構群で、北部に分布するSD13・25・26と同様の特徴を示す。出土遺物は古代がほとんどを占めるが、上述したSD13は中世初頭の所産と考えられる。ここでは、溝跡群の年代について古代から中世初頭までの時間幅をもって捉えておきたい。(佐藤)

29·30号溝跡 S D 29·30

## 遺 構 (図51, 写真42~44・66)

両溝跡は、北区の $C2-E4\sim6\cdot F5$ グリッドに位置する円形の溝跡群である。周辺にはSB25・26・31をはじめとする遺構群が集中して検出されている。遺構検出面はグライ化したLN上面



である。29・30号溝跡は重複し、30号溝跡が新しい。また、29号溝跡はSB31、SK66・67・69と 重複し、SK69より古く、SB31、SK66・67より新しい。30号溝跡はSK64・65より古く、SB 31より新しいことが判明している。この他、両溝跡の周辺には小穴が密に分布している。

両溝跡とも一方を開放する円形の溝跡で、開口部は29号溝跡が南方に、30号溝跡が東方に設けられている。双方に共通するのは、開口部で大きく膨らむ点であり、SD36・37と類似している。区画された広がりは、29号溝跡が7.5×7.3m、30号溝跡が7.7×6.3mを測り、ほぼ同規模となる。

29号溝跡は幅35~120cm,深さ10~30cmで巡り,西側が広く狭い。底面は平坦でなく,特に西部で凹凸が激しい。また,遺構の中央を縦断するように,南北に派生する溝が存在する。底面の高さも異なり別遺構の可能性が考えられたが、土層の断面観察から新旧関係は把握できなかった。ここでは29号溝跡の一部として報告する。

30号溝跡は幅50~65cm, 深さ15~43cmで巡る。比較的深く, 周壁は垂直に近く立ち上がる。

遺物は、30号溝跡から土師器77点・須恵器 7点・陶磁器 1点が出土している。層位的には全て  $\ell$  1 に含まれ、大部分は 9世紀代に比定できた。白磁 1点が出土しているが、これは混入と考えている。上田編年の D類に比定される 15世紀前半の資料であった。 29号溝跡からは出土していない。

## まとめ

両溝跡は、SD36・37などと形状や規模が類似することから、居住施設の区画溝と考えられる。 両溝跡内部には、これに伴う掘立柱建物跡は確認されていないが、遺構周辺にはピットが多数存在 していることから掘立柱建物跡が存在した可能性は高い。出土遺物は9世紀代が多数を占め、15世 紀前半の白磁は混入と判断される点から、両遺構の年代は平安時代と考えられる。 (佐藤)

## 31号溝跡 S D 31

## 遺 構 (図52. 写真45)

本遺構は、北区北東隅の $C2-F4\cdot G4$ グリッドから検出され、今回の調査では最も北に位置する遺構である。遺構検出面はグライ化したLN上面である。SD33と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は、北西 - 南東方向に走る溝跡で、西壁上端で約4m、底面で約2mのみが検出された。 東壁は確認されていないが、遺構上端での幅は3m程度と推定される。底面はしまりが弱く粘性が 強いLVIに達し、幅が30cm、検出面からの深さが90cmある。

ところで、遺構の西側の床面には、スロープ状に傾斜する広がりがみられ、この部分の底面際に しがらみ状の土留め施設が設けられている。土留め施設は、横に渡した杭2本を、底面に打ち込ん だ杭2本で支えることで、掘削面の崩れを防止している。さらにこれの北1mからも杭1本が確認

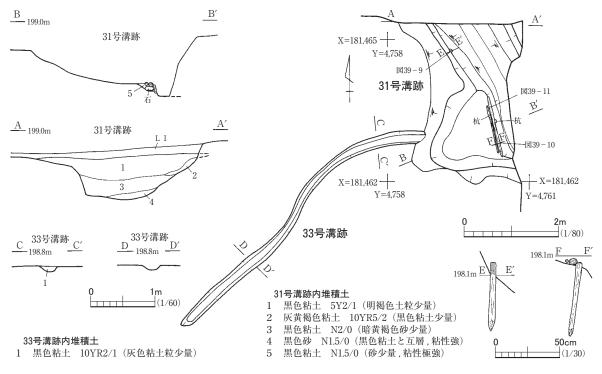


図52 溝跡 (9)

されていることから、土留め施設は北方に続いていたと推定される。遺構内堆積土は5層に細分され、下層はグライ化している。  $\ell$  1  $\sim$  4 については自然堆積と考えている。

## **物** (図39・42, 写真74・75・86)

本遺構から出土した遺物は、土師器120点・須恵器 9 点・石製品 1 点・木製品 6 点を数え、比較的多い。層位的には90%近くを ℓ 1 が占め、土師器 3 点と木製品が底面から出土している。

図42-11~14は土師器杯で、12~14は底面近くから出土している。器形や大きさなどが共通し、9世紀後半に比定できる。13・14には墨書が観察できる。図39-9・10は土留め施設の杭で、10は11を支えていた。9・11は木材をそのまま利用し、10は割り材を素材とし、端部周辺にのみ加工が施されている。12は箸状木製品としている。断面を円形に成形し、尖頭部を作り出している。

#### まとめ

31号溝跡は、水汲み場ないし作業場とみられる施設をもった溝跡である。部分的な検出なので詳細は不明だが、出土遺物から9世紀後半頃に機能していたと考えられる。 (佐藤)

## 32~35号溝跡 S D 32~35

## 遺 構 (図52・53, 写真45・46)

これらの遺構は、北区から検出された幅狭の溝跡群で、一括して報告する。33・35号溝跡は調査区の北半、32・34号溝跡は同南半から検出されている。遺構検出面はいずれもLIV上面である。33号溝跡がSD31と重複し、33号溝跡が古い。

 $33 \cdot 35$ 号溝跡は、ともに北東 – 南西に走る溝跡で、33号溝跡が15m、35号溝跡が24mにわたり検出されている。どちらも幅 $20\sim30$ cm、深さ $10\sim15$ cmとほぼ同じで、遺構の軸線も類似した数値を示すことから、同一遺構とも考えられる。

32・34号溝跡も、東西方向に走り、西方でほぼ直角に屈曲して南下する点で共通する。整った形状から区画施設と考えられる。両遺構に区画された空間内には居住施設であるSB28・SD37やSB30・SD36が存在し、これらの遺構と軸線が類似することから、32・34号溝跡は居住域を区画している可能性が高い。

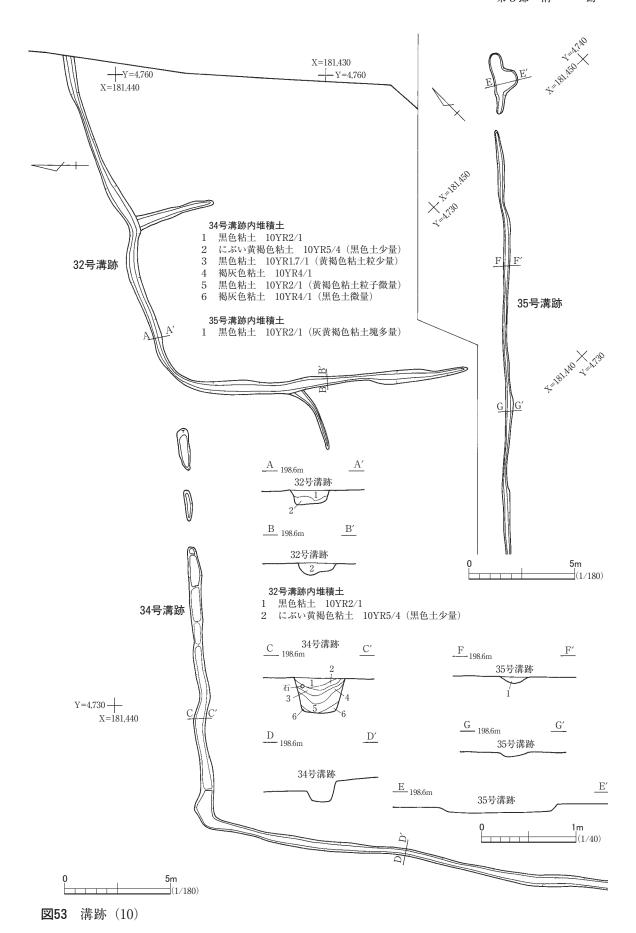
### 遺 **物**(図42・43, 写真75)

32号溝跡から土師器102点・須恵器37点、35号溝跡から土師器8点が出土している。

図42-16がロクロ成形の土師器甕, 15・20が同一個体の可能性がある長頸瓶である。16は口端が外反し、体部のあまり張らない器形を呈している。同図15は長頸瓶の頸部から肩部、20は体部資料である。15の接合部にはリング状の凸帯が巡る。口縁部を欠損するが、9世紀後半の所産とみられる。図43-4・5は須恵器甕の体部片で、内外面に各種のタタキメが観察される。

### まとめ

以上の溝跡は、区画溝と考えられ、32・34号溝跡は居住域を区画したと推定される。その年代は、 出土遺物から平安時代と考えられる。33・35号溝跡の年代については言及できない。 (佐藤)



# 第4節 土 坑 (図54~69, 表1, 写真8 · 49~67)

2次調査で検出された土坑は、北区9基・南区56基の計65基を数える。検出された土坑は多岐にわたるが、所属年代や遺構の形状などによる分類が可能であった。具体的には、遺構の構築年代から館跡に伴う時代とそうでない時代に大別し、これらを形状や推定される機能によって細別できた。ここでは、類別ごとに説明し必要に応じて個別に記述していくこととする。そして土坑から出土した遺物について、最後に述べる。なお、遺構番号は記号で記述している。また、遺構の規模や出土遺物などは表1に記載した。

A群土坑 (SK12~17·21~25·33~35·37·41~48·50·58·61·63~67·71)

構築年代が古代から中世初頭に比定される土坑群で、ロクロ土師器に須恵器や赤焼土器が伴う9~10世紀の一群と、中世陶器・白磁を出土する12~13世紀の一群がある。ただし、遺物が出土しない土坑でその判別は難しいため、ここでは一群に扱った。遺構内堆積土は、LⅡ由来の黒色土を主体とする。この点が遺物のない土坑を本群に含める基準とした。北区ではSD29・30の周辺から5基、南区では南部と西部を中心に27基が分布している。A1類~A4類に細分される。

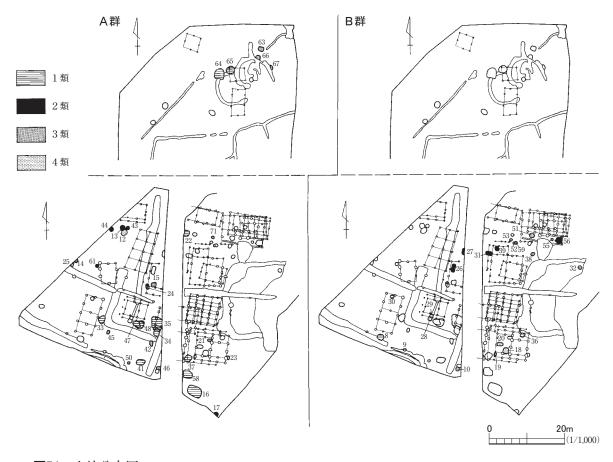


図54 土坑分布図

表1 土坑計測一覧

表1	土均	亢計測一覧		,				
番号	挿図	検出地区	分類	長径	規模(cm) 短径	)   深さ	重複関係	備考
7	55	A 4 – G 2	D	100	72	20	>SD9	
8	56	A 4 – G 2	B 1	186	153	225	>SD9	土14·須 1
9	56	A4-H2	B 1	88	84	237	>SD20	土23·須1·石1·壁
10	55	A4-I3	В3	103	101	71	>S K64	土46·須 4 ·壁
11	55	A4-F1	С	148	142	15		
12	56	A 3 – H 9 · I 9	A 4	161	135	193	>SK13	土19·須 6·陶 1·石 1
13	56	A4-H9·I9	A 2	132	131	62	>SD25 <sk12< td=""><td></td></sk12<>	
14	55	A 3 – G10	A 3	97	(71)	30	< D	
15 16	55 59	A 3 – I 10 A 4 – J 3, B 4 – A 3	A 3	136 383	115 272	19 39	< P	土18·須10·鉄 1
17	55	B4-A4	A 1 A 2	110	(55)	57		須1
18	59	B4-A2	B 4	176	152	46	<sb13< td=""><td>土 3·須 1·石 4·壁10.0kg</td></sb13<>	土 3·須 1·石 4·壁10.0kg
19	59	B 4 – J 2	B 4	91	81	22	<sb13< td=""><td>土6・壁</td></sb13<>	土6・壁
20	59	B4-J2·A2	B 4	176	103	34	<sb13< td=""><td>壁2.0kg</td></sb13<>	壁2.0kg
21	59	B4-A2	A 3	134	84	29	<sb13< td=""><td>土3</td></sb13<>	土3
22	59	A 3 – J 9	A 1	201	(147)	27	>SD39	土41·須 2 ·石 1 ·壁
23	59	B 4 - A 2	А 3	108	107	34	< S B13	
24	55	A 3 – I 10	А 3	(96)	(96)	13	< P	須1·壁
25	60	A 3 – G10	A 3	114	(73)	25		
26	60	A 3 – I 10	B 2	207	97	24		
27	60	A 3 – J 9 · 10	B 2	177	(55)	33	< P	陶 1
28	60	A 4 – I 1	B 4	101	100	23	>S K29	
29	60	A 4 – I 1	B 4	92	(88)	23	>SD8 <sk28< td=""><td></td></sk28<>	
30	60	A4-H1	B 1	103	100	143	> CD00 (CD1)	
31	60	A 3 – J 9·10	B 2	170	105	28	>SD39 <sb14< td=""><td></td></sb14<>	
32	60 61	B 3 - C10	В 3	99	93	53	<0.D15	Loc 海口
33 34	61	A 4 - H 1 A 4 - I 1 • 2	A 1 A 1	(205)	178 (146)	22 18	<sd15 <sb23, sd16<="" td=""><td>土86·須5 土367·須27</td></sb23,></sd15 	土86·須5 土367·須27
35	61	A4-I1·J1	A 1	296	(255)	23	<sb2, sd16<="" td=""><td>土110·須10</td></sb2,>	土110·須10
36	61	B4-A2	B 1	132	121	210	>SD24	井戸枠
37	62	B4-J2	A 1	195	187	210	<sb13·16, p<="" td=""><td>土37.須2</td></sb13·16,>	土37.須2
38	62	B 3 – A 10	В 3	93	90	79	(SD10 10, 1	201 %2
39	62	A3-J9, B3-A9	B 2	105	101	41		
40	62	A 3 – J 9	С	95	72	28		
41	62	A 4 – I 2	A 1	225	146	19	< P	土8
42	62	A 4 – I 2	А 3	(151)	86	20	< S D15	土148・須 4
43	62	A 3 – I 9	A 2	103	91	65		
44	62	A3-H9	A 2	123	107	60		土6·須1·漆皮膜
45	64	A4-H1·2	A 3	110	75	24		土 9
46	64	A 4 – I 2 · 3 · J 2 · 3	A 3	(130)	99	13	< S K 10	土25
47	64	A 4 – I 1	A 1	223	146	32	>S K48	上54·須4
48 49	64 64	A 4 – I 1 A 3 – G10	A 1	(214) 85	215 81	15 31	< S K47 < S D10	土71·須11·金 1
50	65	A 3 - G 10 A 4 - I 2	A 4	42	35	81	>SD10 >SD19·20	石敷部あり, 土161(墨書 8)・須 9·木 2
51	64	B3-A9	B 3	138	120	54	/ JD13 40	石水即60万,上101(室百0万次5°个2
52	64	B3-A9	В3	64	63	15	>SK59	
53	64	B 3 – A 9	В3	74	71	28	< P	
54	64	B4-A9·B9	C	99	86	20		
55	65	B3-B9	В3	71	60	59		
56	65	B3-B9	В 2	169	151	15		
57	65	B3-B9	С	105	98	26		
58	67	A4-J3	A 1	245	207	30	< P	
59	64	B 3 – A 9	В3	75	70	56	< S K 52	
60	67	B3-A9	C	119	89	20	< P	
61	67	A 3 - H10	A 2	85	80	97		
62	67	C2-D6·E6	D	164	123	45	-	1.01 毎 1
63	67	C2-F5	A 3	130	101	19	> C D 20	土21・須1
64	69 67	C2-E5 C2-E5	A 1	266 250	228 159	24	>S D30	土176・須28
65 66	67	C2-E5 C2-F5	A 1 A 3	115	(95)	14	>SD30 <sd29< td=""><td>  <u>土5</u>   土5·須2</td></sd29<>	<u>土5</u>   土5·須2
67	69	C2-F5	A 3	109	64	17	<sd29 <sd29< td=""><td>工 5 7</td></sd29<></sd29 	工 5 7
68	69	C2-F5	D	142	130	79	\SD23	陶1,有機質
69	69	C2-E5·F5	D	105	86	43	>S D29	土21・須2
70	69	C2-C6·7	D	101	90	35	. 0.0.00	ON B
71	69	B3-A9	A 3	75	73	21		
		+ <b>は</b>   <b>は</b>					1	- DD - A - A - D - D - D - D - D - D - D

計測値の( )は残存値 重複関係は新>古 P=小穴 土=土師器 須=須恵器 陶=陶磁器 金=金属製品石=石器・石製品 木=木製品 壁=焼壁 墨書=墨書土器

1類 方形を基調とする大型の土坑

S K16・22・33~35・37・41・47・48・58・64・65の12基が該当する。 2 基が北区, 10基が南区から検出されている。

まず遺構の分布を述べる。北区の2基(SK64・65)は、調査区北部に近接して存在し、いずれもSD30と重複する。南区の土坑は、調査区南半部の農道を挟んだ東西30m、南北20mの範囲に9基がまとまっており、SK22のみ調査区の北部に位置する。本類土坑の集中範囲にはSK42・50やSD19・20などの同時期の遺構が近接している。

次に遺構の形状を説明する。平面形は、 $SK16 \cdot 33 \cdot 37 \cdot 41 \cdot 64$ のような隅丸方形ないし隅丸長方形を呈する例が多い。若干不整形な $SK47 \cdot 48 \cdot 58$ や遺構の一部しか検出されていない $SK22 \cdot 34 \cdot 35$ も、この特徴を大きく逸脱するものではない。SK65のみ円形を基調とする。遺構底面はおおむね平坦で周壁に至り、凹凸がある例(SK47)はまれである。遺構の長径は2.0m付近( $SK22 \cdot 33 \cdot 34 \cdot 37$ )と2.5m付近( $SK58 \cdot 64 \cdot 65$ )、それ以上( $SK16 \cdot 35$ )に大きくまとまるようである。壁高は $20 \sim 30$ cm程度であることが多く、削平部分を考慮しても比較的浅い土坑であったことが推定される。

遺物の出土状況について述べると、SK34・35・48から土師器・須恵器が多数出土し、大型破片も含まれていた。具体的には後述するが、いずれも9世紀後半の資料であった。よって、本類の年代は平安時代であることが判明する。

以上,本類土坑は平安時代の竪穴状遺構と認識できる。北区からは,居住施設と考えられる溝跡を伴う掘立柱建物跡が検出されており,S K 64・65は建物跡に伴って集落域を形成していたことが分かる。一方,南区の本類土坑が集中する地点には井戸跡や溝跡が近接していることから,これらと関連する土坑であることは間違いない。居住施設は検出されていないが,南区からは2,000個を超える屋外ピット群が密に分布しており,これらの一部は該期の建物跡を構成していた可能性も否定できない。したがって、南区の本類土坑も集落に伴うと考えている。

2類 方形ないし円形を呈し、周壁が垂直に立ち上がるもの

S K13・17・43・44・61の5基が該当し、いずれも南区に所在する。位置的には調査区北西部にまとまっており(S K13・43・44・61)、この地区は、S K12、S D13・24~26など12~13世紀と考えられる遺構が密に分布する地点にあたる。S K17は調査区南東部にあり、これはA 1 類土坑の集中区に近い。平面形はすべて円形を呈し、底面から箱形に立ち上がる土坑である。検出面からの深さは50cmを超え深く、S K61などは97cmもある。井戸跡の可能性も考えられたが、堆積土がグライ化しておらず、底面付近に濾過施設が見られないことから、その可能性は否定される。遺構が人為堆積であることを勘案すれば、その性格はゴミ穴の可能性が高い。

 $SK13 \cdot 43 \cdot 44$ は東西 5 mの範囲に並列し、特に SD24を隔て  $TSK13 \cdot 44$ が対峙する。このことは土坑群と溝跡に大きな時間差が考えにくく、両者の同時性を示唆している。 SD13からは中世初頭の白磁が出土している。また SK13は、やはり白磁を出土した SK12に壊されており、この時

期には廃絶されている。以上の所見から、本類土坑は中世初頭の所産と考えられる。

3類 方形ないし円形を呈する小型の土坑

平面や底部形状があまり整わないものや、底面まで浅いもの、周壁の立ち上がりが比較的緩やかなものなどを一括した。 $SK14 \cdot 15 \cdot 21 \cdot 23 \sim 25 \cdot 42 \cdot 45 \cdot 46 \cdot 63 \cdot 66 \cdot 67 \cdot 71$ の13基が該当し、その内訳は北区 3 基、南区10基を数える。北区から検出された $SK63 \cdot 66 \cdot 67$ はいずれも調査区北部のSD29周辺に位置している。これに対し南区の土坑は調査区南半に散在する。

S K  $15 \cdot 21 \cdot 23 \cdot 46$ は、方形ないし長方形をなす一辺1.3m程度の小型の一群である。周壁は比較的急峻に立ち上がり、検出面から底面までおおむね20cm未満で、S K  $23 \cdot 39$ で30cmを超えている。底面は平坦に整えられている。これらの土坑は、あたかも A 1 類をそのまま小さくしたような形状なので、類似する機能が推定される。具体的には小規模な貯蔵施設やゴミ穴と考えられる。遺構内堆積土はS K  $15 \cdot 21 \cdot 46$ で人為堆積、S K  $23 \cdot 39$ で自然堆積を示す。

 $SK14 \cdot 24 \cdot 25 \cdot 46$ は円形を基調とする小型の土坑で、 $SK14 \cdot 24$ の底面は比較的平坦で整っている。北区の $SK63 \cdot 66 \cdot 67$ もこれに類似する土坑で、やはり集落に伴う遺構とみられる。

SK42は、北部が壊された長楕円形の土坑で、その全長は2m程度とみられる。底面は平坦でなく、丸みをもって周壁に至るなど、A類土坑の中でも特異な形状を有する。土坑内は一気に埋め戻されており、この時に土器の一括廃棄が行われている。出土遺物から10世紀前半の所産と考えられるが、SK42以外に10世紀代に比定される遺構はない。墓坑など特殊な性格が推定できる。

4類 円筒形の土坑のうち掘りのきわめて深いもの

遺構内堆積土は、粘土層・砂層あるいはそれらの混土からなり、かなりの部分でグライ化した特徴ある土層群となっている。本類土坑は井戸跡と考えられ、南区の北西部からSK12、中央南端からSK50の計2基が検出されている。これらは単独に存在したのでなく、土坑や溝など周辺に分布する遺構とともに機能したと考えている。後述するように、両者には時間差がある。

S K 12 本遺構は S K 13と重複しこれを壊し、 S K 43・44、 S D 12・13・25・26に近接する。素掘りの井戸跡で、井戸枠や濾過施設はない。遺構の大きさは、開口部で大きく径1.6mあり、周壁が次第にすぼまって検出面より80cmの地点から径60cmの大きさで垂直に掘り込まれている。周壁は底面付近で再びすぼまるため、底面径は33cmと小さくなっている。出土した遺物は、白磁片が最も新しい年代を示す資料で、12~13世紀に比定される。この白磁片は  $\ell$  1 から出土したもので遺構に直接伴う遺物とはいいがたい。しかし S K 12は、堆積土や井戸枠等の施設がないなどの調査所見が B 1 類とは異なり、年代差を与えることが可能である。したがって、遺構の年代は12~13世紀代と判断される。周辺には上記の遺構群が存在しており、これらに伴う給水施設と推定している。

S K 50 南区の南端から検出された特殊な井戸跡である。S D 19・20と重複し、その新旧関係は古いほうからS D 19→S D 20→S K 50となる。本遺構は、石組みをもつ小型の井戸部と、その周囲に配された石敷部からなり、井戸部底面には刳り貫きされた容器状の井戸枠が設置されている。開口部の大きさは石組内側で42cm、底面では33cmを測る。検出面から81cmで底面に至り浅い。井戸跡

としては非常に小型である。石組みは、径 1 mの掘形に一辺 $20\sim30\text{cm}$ の人頭大の川原石を積み上げて構築したもので、掘形内部には裏込状の石が巡っている。石組みは最上面から45cm,  $5\sim6$  段まで確認された。井戸跡内に堆積する  $\ell$  2 中に人頭大の石が多数出土したことを勘案すれば、本来石組みは掘形上面に達していた可能性が高い。この高さは、周囲に巡る石敷部のレベルにほぼ等しくなる。底面には、井戸枠が設置されている。井戸枠は、丸太材の内面を刳り貫き容器状に成形したもので、径36cmを測り、高さ26cmが遺存する。井戸枠内部には  $\ell$   $3\cdot4$ が堆積し、底面から  $\ell$  4 上面にかけて多数の土師器杯が出土しており、これらには墨書土器も含まれることから祭祀の存在が予想される。また、井戸枠の外側に接して箸状木製品が出土している。

本遺構は石敷部を伴う井戸跡で、上部は石組みされ底面には井戸枠が設けられており、9世紀後半に廃絶している。該期における石組みをもつ井戸跡の類例は、会津盆地では指摘できず周辺各県の検出例では官衙関連遺跡などに限られるようである。集落としての性格付けも難しい高堂太遺跡において、本遺構の特異性は際立っている。

B群土坑 (SK8~10·18~20·26~32·36·38·39·51~53·55·56·59)

中世後半の館跡に伴うと考えられる一群で、すべて南区から検出された。土層の堆積状況は、大部分の土坑で周辺のLW・Vなどを多量に含み明らかな人為堆積を示している。これらは形状や分布などから4類に細分できた。

1類 円筒形土坑のうち、掘り込みが深いもの

本類土坑は、掘り込みが深く、グライ化した堆積土を特徴とする井戸跡である。SK8・9・30・36の4基が該当し、いずれも南区の南半に位置する。具体的には、SK8・9・30などは傾斜の変換点、SK36は館の機能時には埋没していた谷の谷頭にそれぞれ立地している。いずれも湧水の期待できる地点に分布している。

SK8・9・30は近接して検出された。この周辺は館跡に伴う建物跡の分布が希薄になってくる地区であり、井戸跡と建物跡との立地の違いが容易に理解できる。特にSK8・9は、規模の大小を別にすれば類似した内容を持っている。開口部の規模は、SK8が大きくSK9が小さいが、これはSK8上半に平坦な広がりがみられるからである。下半部および底面の径は大差ない。また、底面近くに石を充填する点も類似する。それぞれ底面から50cm程度のところまで積めており、濾過施設と考えられる。遺構内堆積土は、いずれも人為堆積土である。

SK30は、平面形や規模がSK9に類似している。堆積土に黒色土が多くA群にも類似するが、

混入物の量が多い点でSK12とは異なっている。検出地点も勘案しB群の範疇でとらえている。

S K36は調査区東部の谷頭に位置する井戸跡である。S D 24と重複し、これを壊している。井戸枠が検出された唯一の遺構である。上部二段は段違い、下部六段は円筒状に設置されている。また、必要に応じて、井戸枠を支えるための杭が壁面に打ち込まれていた。なお、保存処理・復元は平成19年度に実施する予定である。

2類 方形で断面形が箱形を呈する土坑

S K 26・27・31・39・56の5 基が該当する。底面が平坦で、周壁がほぼ垂直に立ち上がるなど、きわめて整った形状をしている。いずれも館跡中心部の建物跡のすぐ近くに位置している。出土遺物は少ないがS K 27から15世紀末~16世紀初頭に比定される中国産陶磁器が出土している。

S K 26・27・31は隅丸長方形の一群で、いずれも一端が若干長いところが共通している。規模も、長辺1.7m以上、短辺1.0mでほぼ収まり規格が強い。主軸は、S K 26・27が南北に向けているのに対し、S K 31がこれに直交して東西に向けている。これらの軸線は、近接する建物跡や溝跡のそれにおおむね一致しており、これらの土坑群が館跡内部の建物を強く意識していることが分かる。年代を示す遺物としてS K 27から中国産染付皿が出土している。これは、S X 1 出土の染付皿と同時期に比定された。したがってこれらの土坑が、館跡に付随する遺構であることが遺物の面からも確認されたことになる。

S K39・56はともに方形を呈する土坑である。S K39はS K51に近接することから該期と考えている。方形の土坑で比較的深い。S K56は方形を呈する大型の土坑である。S B19に取り込まれ、S D18に接する位置に所在することから建物跡に伴う土坑と考えている。S K56の東には同様の構造をもつS K 1 が隣接しており、この軸線はS B18のそれにほぼ等しい。したがってこれらは館跡に伴う施設と考えられ、いわゆる方形竪穴状遺構に類似する。建物跡との位置からみて貯蔵施設やゴミ穴などの可能性が高い。

3類 円筒形の土坑のうち深さが1m未満のもの

 $SK10 \cdot 32 \cdot 38 \cdot 51 \sim 53 \cdot 55 \cdot 59$ の 8 基が該当し、 1 次調査の  $SK2 \cdot 4$  もこれに含まれる。底面が平坦で、周壁も垂直に近い角度で立ち上がる整った形状の土坑群である。 1 類とは深さで区別できる。分布的には、大部分は南区北部の  $SD17 \cdot 18$  周辺、 SK10 が南南端に位置している。

S K 10・32・38・55・59は底面までの深さが50cmを超える土坑群である。土坑の径は80cm前後と小型の土坑が多く、1 mを超えるのは S K 10しかない。堆積土は、いずれも人為堆積を示している。 S K 10は、その下層にグライ化した土層がみられた。当初は井戸跡とも考えられたが、砂層がなく 周壁上部で大きく広がる立ち上がりから、井戸跡ではない。これらの土坑群の性格は貯蔵施設やゴミ穴などを想定している。

S K51~53は整った円形を呈する、比較的浅い土坑群である。S K51が比較的大きく、S K52・53が小さい。S K51・53などは遺構内堆積土が自然堆積を示している。

遺物はSK10のみで出土している。SK10からは土師器・須恵器が主体を占めるが、焼壁が出土

していることから、館跡に伴うのは間違いないとみられる。

4類 平面形が円形ないし方形の土坑のうち、底面が丸みをもって立ち上がるもの

 $SK18\sim20\cdot28\cdot29$ の5基が該当する。平面形は2類・3類に類似するがやや不整な形状を呈するものを一括した。分布的には館跡南部にみられ、東部に $SK18\sim20$ がまとまり、西部に $SK28\cdot29$ が重複する。

S K18・20は、平面形が楕円形で底部に丸みをもつ。出土遺物も少なく、詳細は不明である。S K19は方形を呈する小型の土坑で、掘り込みも浅い。堆積土上層から焼壁が出土することから、館跡に伴うゴミ穴とみられる。S K28・29は円形土坑でSD8の末端に接し、これより新しい。詳細については言及できない。

## C群土坑 (SK11·40·49·54·57·60)

年代が古代から館跡機能時までに比定できるが、A群・B群の区別が難しいもの。多くは小型で浅く、底面から周壁にかけて丸みをもつ土坑である。すべて南区から検出されており、このうち4基が館跡北部にまとまっている。大きさは $1\,\mathrm{m}$ 未満、深さも $30\,\mathrm{cm}$ 未満が多い。遺構内堆積土は、L間由来の黒色土を主とし自然堆積を示すもの( $S\,\mathrm{K}\,40\cdot60$ )と黒色土を主とする人為堆積土( $S\,\mathrm{K}\,11$ )、黄褐色土や混土などの人為堆積を示すもの( $S\,\mathrm{K}\,49\cdot54\cdot57$ )に分けられる。館跡内部の遺構で自然堆積を示す例はまれであることから、前二者はA群に付属する可能性が高い。後者については、堆積土が類似することから、多くはB群と推定している。

### D群土坑 (SK7·62·68~70)

堆積土がA~C群と異なり、構築年代が近世以降と推定される土坑をまとめた。北区から4基、 南区から1基が検出されている。

南区から検出されたSK7は底面が丸みをもつ土坑で、堆積土に炭化物や焼土を含むしまりのない土層で覆われていた。近代以降のゴミ穴の可能性が高い。北区で検出された4基は、いずれも灰色がかった黄色土を基調とする混土で埋められている点でこれまでの土坑群とは明瞭に区別できる。SK68から19世紀代に比定できる会津本郷焼の碗が出土し、年代の上限が判明していることから、 $SK62 \cdot 69 \cdot 70$ もほぼ同時期に比定できよう。SK68では、一度埋まった土坑を掘り返して再利用した痕跡が確認された。 $\ell$ 4から蓋材と推定される藁が重なっていたことから、この土坑は貯蔵施設と考えられる。

## 土坑出土の遺物 (図57・58・63・66・68)

ここでは、各土坑から出土した遺物について説明する。数的にまとまりをもつ遺構は単独で図示したものがあり、数的に少ない遺構は種別ごとにまとめて図示した。なお、各土坑から出土した遺物点数は表1に掲載している。

SK12 (図57-1·16, 図58-1, 写真73)

図57-1・16は須恵器を図示した。1は鉢とみられる。体部に丸みをもちながら内湾気味に立ち上がる器形を呈している。図58-1は中国産白磁碗の口縁部片である。口縁部が強く外反し、口端が嘴状をなしている。色調は緑がかった濃灰色を呈する。器面外面に縦線文が巡っている。大宰府編年のV-3類に分類され、12世紀後半に比定される。

S K 16 (図57 - 2 · 14 · 15, 図58 - 4, 写真85)

図57-2・14・15は、須恵器を図示した。2は回転ヘラ切り無調整の杯である。体部下端は丸みを帯びる。14は甕の胴部片である。器壁が薄く、外面に右斜位の平行タタキメが観察される。15も甕の胴部片である。これは器壁が厚く、外面には右斜位の平行タタキメが観察される。

図58-4は鉄族とみられる。先端が折れ、錆膨れが著しい。

SK18 (図58-2・6、図68-7、写真73・78・83・86)

図58 – 2 は,瀬戸焼の灰釉皿である。大窯  $I \sim II$  期に比定され,年代は15世紀後半~16世紀前半に位置づけられる。図58 – 6 は,越前焼の甕である。本土坑の他, $SD7 \cdot 10$ に分散していた破片が接合し,約半分の遺存状態となった。吉岡分類の甕 $B_1$ 類にあたり,口縁部形態はV期(新)の特徴を備えている。しかし,胴部最大径が上位にある点は古相と言え,この点から,年代は15世紀前半に位置づけておきたい。図68 – 7 は 6 分画され「こぼれ目」をもつ粉臼上臼である。

S K 24 (図57 - 3, 写真76)

図57-3は器面が明褐色を呈する土師器皿で、約85%が残存する。直線的に口縁部へ至る器形で、底部が厚い。9世紀末頃の所産とみられる。この他本遺構からは、内面黒色処理の土師器杯の小片が出土している。

S K 27 (図58-3, 写真73·78)

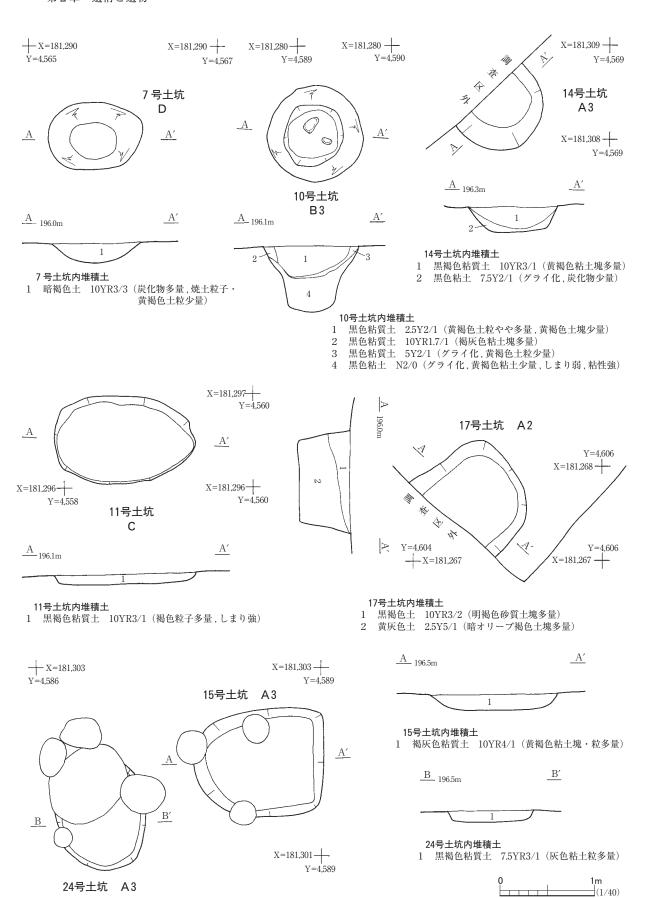
図58 – 3 は中国産染付皿である。土坑底面から10cmほど浮いて内面を上にした状態で出土している。色調は内面が青みがかった濃灰色、外面が白灰色を呈する。文様は内面見込みに施文され、草加文が描かれている。小野編年の $B_1$ 類に比定され、16世紀前半に位置づけられる。なお、器面には被熱の痕跡が認められる。

S K 34 (図57  $-4 \sim 8$ )

図57-5は土師器杯で、底面に回転糸切痕が残され、内外面とも無調整でロクロ目をそのまま残している。同図6は内面黒色処理された土師器杯である。9世紀末~10世紀前葉に位置づけられる。同図7は土師器の高台杯で、高台は比較的高く大きく張り出してふんばっている。8はロクロ成形の土師器甕で口縁部が強く外反している。4は底径の大きい須恵器杯である。

S K 35 (図57 - 9 · 10 · 13, 写真75 · 76)

図57-9は底径が大きく、器高の低い土師器杯である。器形は体部下半に丸みをもち、口縁部が外反する。内面黒色処理され、ヘラミガキが施されている。9世紀末の所産とみられる。10はロクロ成形された小型の土師器甕である。13は須恵器の甕肩部片で、内外面にタタキメが観察される。



84

**図55** 土坑 (1) 7 · 10 · 11 · 14 · 15 · 17 · 24号土坑

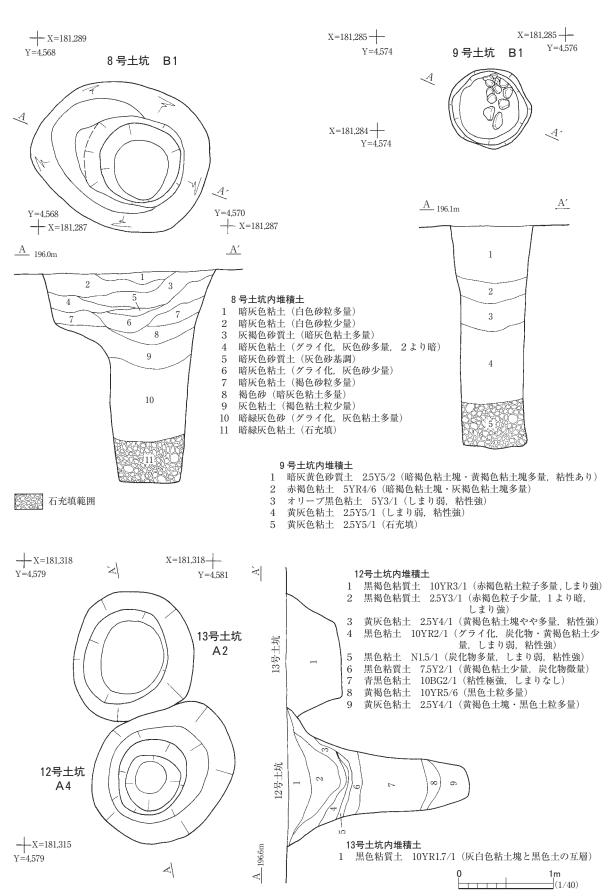
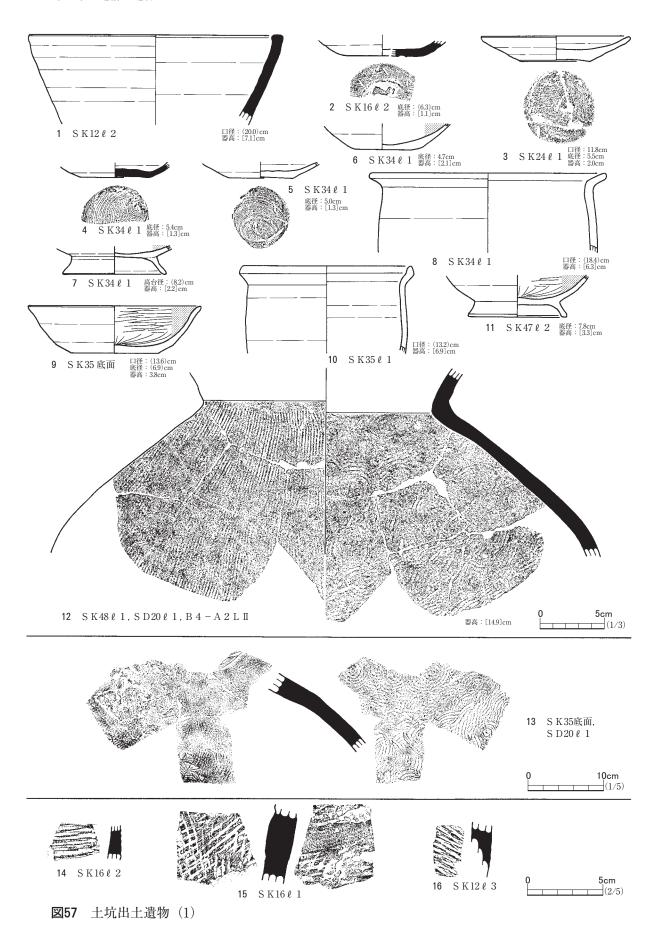


図56 土坑 (2) 8 · 9 · 12 · 13号土坑



86

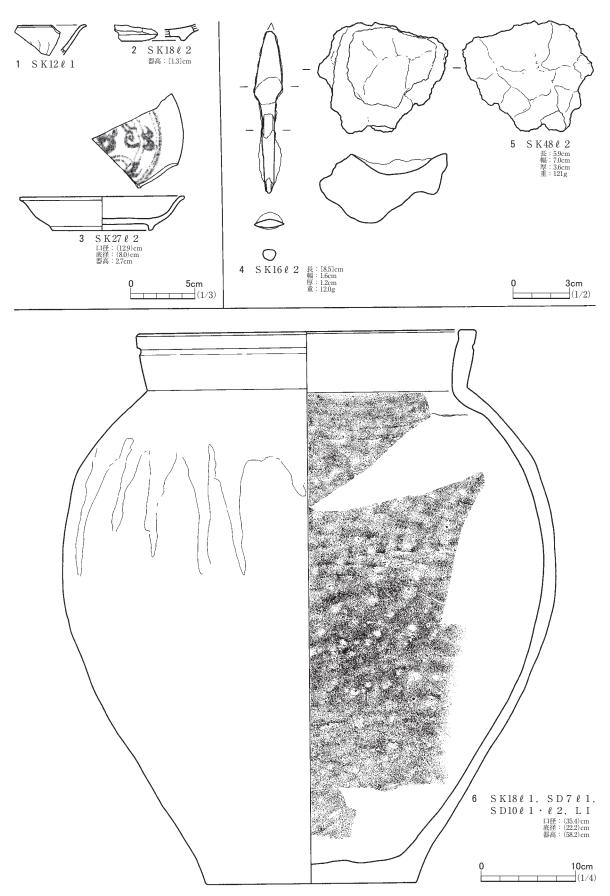


図58 土坑出土遺物 (2)

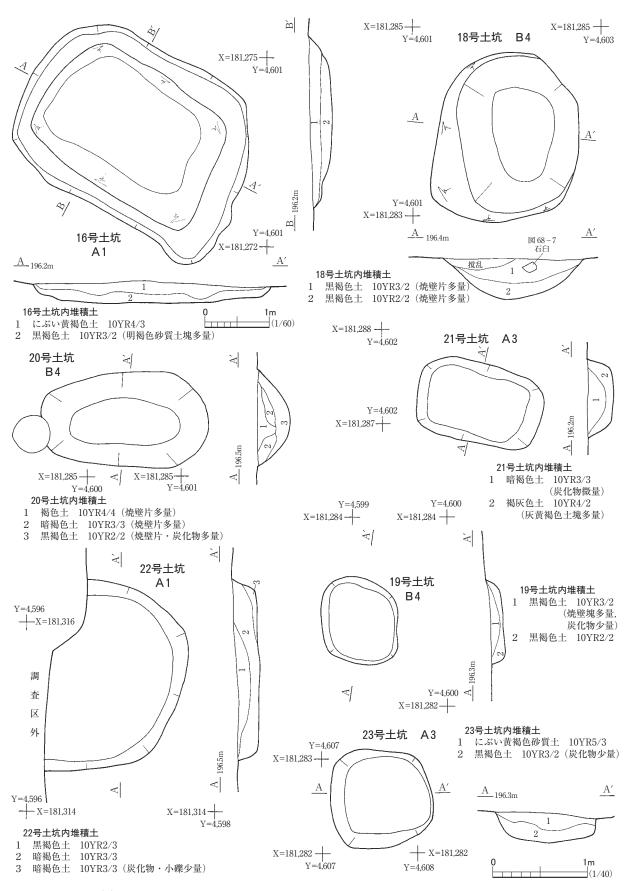
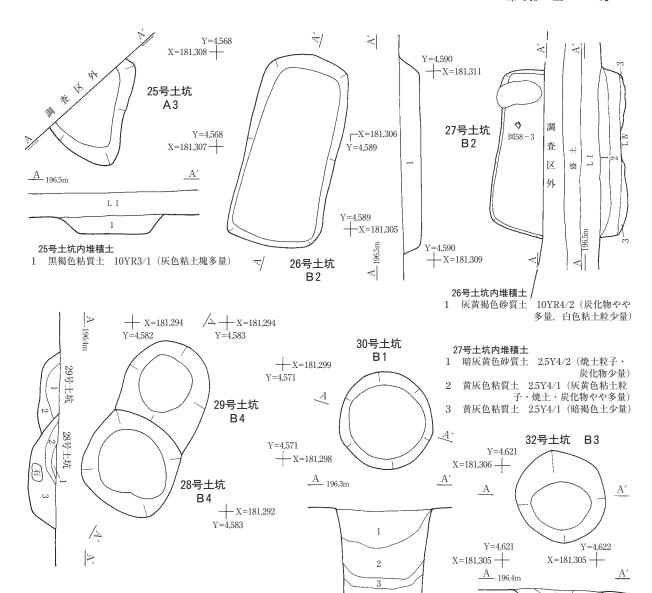


図59 土坑 (3) 16·18~23号土坑



# 28号土坑内堆積土

- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1 (黄褐色粘土粒子微量)
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/2 (塊主体, 黄褐色粘土粒子少量) 3 黒褐色粘質土 10YR3/1 (黄褐色粘土粒子少量)

### 29号土坑内堆積土

- 1 黒褐色粘質土 10YR3/2 (黄褐色粘土粒子少量) 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 (黄褐色粘土粒子微量)

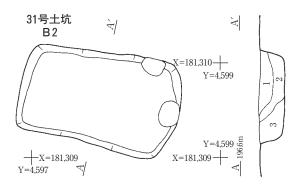


図60 土坑(4) 25~32号土坑

### 30号土坑内堆積土

4

- 1 黒褐色粘質土 10YR3/2 (灰色粘土粒多量, 塊少量) 2 黒褐色粘質土 10YR3/2 (灰色粘土塊・粒多量)

#### 31号土坑内堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (にぶい黄褐色土粒・炭化物少量) 2 暗褐色土 10YR3/3 (砂少量)
- 3 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 (粒子粗い)

### 32号土坑内堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物微量) 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物微量) 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3



# 第2章 遺構と遺物

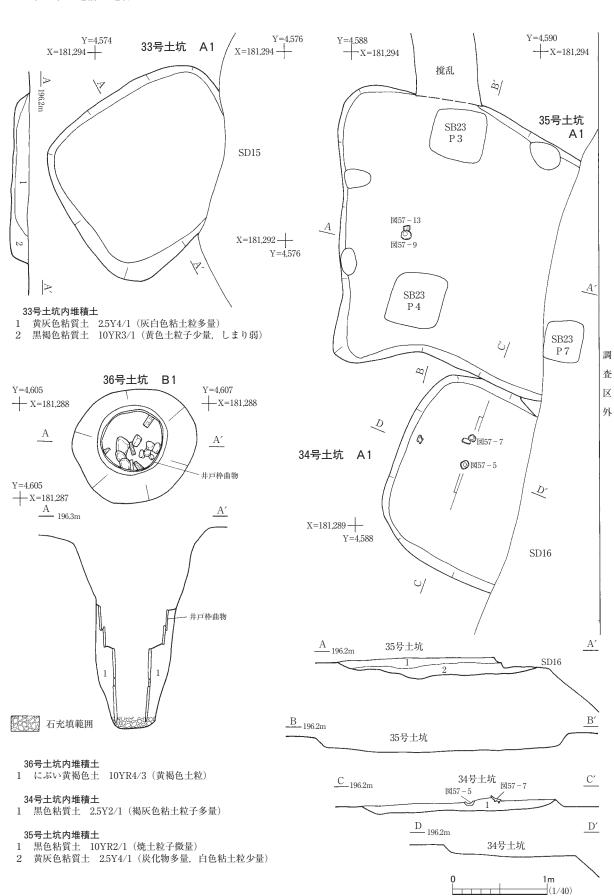


図61 土坑 (5) 33~36号土坑

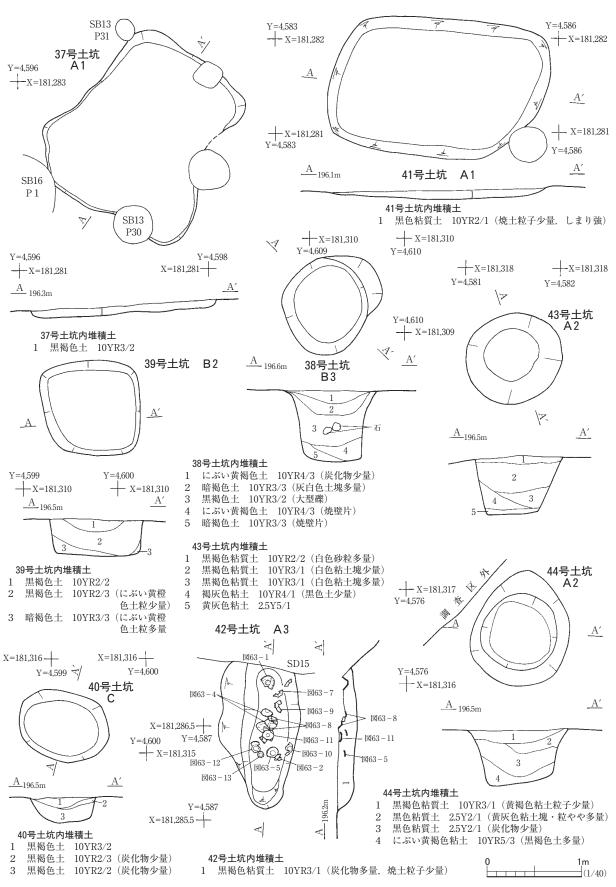


図62 土坑 (6) 37~44号土坑

SK36 (図63-13~17, 写真86)

本遺構から、井戸枠とこれを支えた木棒が出土している。井戸枠はすべて曲物とみられ、径や高さが推定される5点を図示した。井戸枠は、上部に図63-14・17、中位に同図15・16、最下部に同図13がそれぞれ据えられていた。13は底部を土坑底面に接した状態で置かれていた。容器状の本体と、これを留めて底部周辺に巡るタガからなる。本体とタガは木釘で固定され、その隙間には板をはめて緩みが埋められる。目釘孔は10個あり、このうち4個に木釘が残存する。器高は28cmあり、出土した井戸枠の中で最も高い。14は最上部に設置され、その下位に17が接する。14は乾燥し大きく開いているが、接合部から径が64cm程度と復元できる。15は13の上位に接していたもので、器高は5.4cmと低い。16には2段にわたって目釘孔が巡っている。これらの遺物は、平成19年度に保存処理される予定であり、詳細はこれに譲ることとする。

S K 42 (図63 - 1 ~ 12. 写真76)

本遺構からは、完形率の高い遺物が出土しており、これらは一括資料と捉えられる。層位的には検出面に近い  $\ell$  1 からまとまって出土している。数的には、土師器と赤焼土器が拮抗し、器種では杯が卓越する。図 $63-1\sim5\cdot8\cdot12$ はロクロ成形で内面黒色処理される土師器杯で、 $8\cdot12$ が高台杯である。底部から丸みをもって口縁にいたる器形を呈する。 $1\cdot2$ は口径が大きく器高が高い一群である。底部から体部下部には回転ヘラケズリが施されている。 $4\cdot5$ は器高が若干低い杯である。 $8\cdot12$ は比較的低い高台をもつ。

 $6 \cdot 7 \cdot 9 \sim 11$ は、いわゆる赤焼土器である。内外面ともロクロ痕を残して体部は無調整である点が共通する。 $6 \cdot 7 \cdot 10 \cdot 11$ が杯、9が皿である。杯は底部に回転糸切り痕を残し、器形は体部が外反気味に立ち上がるもの( $6 \cdot 10$ )と体部下半で丸みをもつもの( $7 \cdot 11$ )がみられる。9は体部が丸みをもって立ち上がり、口径に対する底径の比が大きい。

以上の土器群は、内面黒色処理の土師器と赤焼土器がほぼ同量を数えることから、10世紀前葉に 比定される。

S K47 (図57-11)

図57-11は高台杯の体部下部片である。体部は丸みがある器形で、1 cm弱の高台が付いている。 内面は黒色処理されている。9世紀後半に比定できる。

S K 48 (図57-12. 図58-5. 写真74)

図57-12は堆積土中から出土した須恵器甕で、頸部から体部上半が遺存する。外面に平行タタキメ,内面に同心円タタキメが施されている。図58-5は椀形滓である。この他、本遺構からは炉壁とみられる粘土塊も出土している。

S K 50 (図66, 写真76 · 77 · 86 · 87)

本遺構から出土した遺物は多岐にわたる。層位的には、底面付近のほか堆積土中や掘形埋土から出土する。注目されるのは、土師器杯の一括資料が井戸部  $\ell$  4に遺棄された状態で出土した点である。この中には  $\ell$  4に正位に置かれた例(11)や井戸枠に沿って立てかけた例(7)、7の支えと

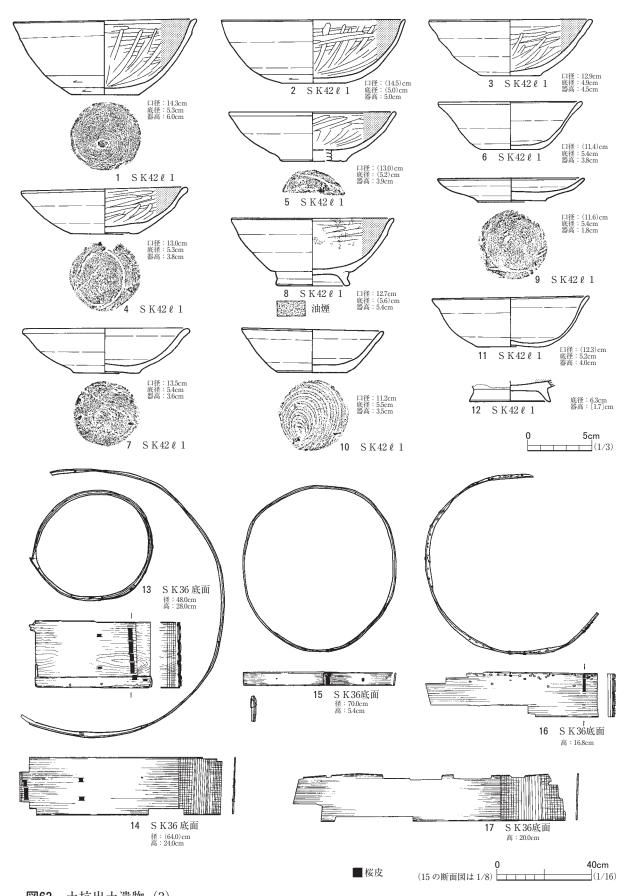


図63 土坑出土遺物 (3)

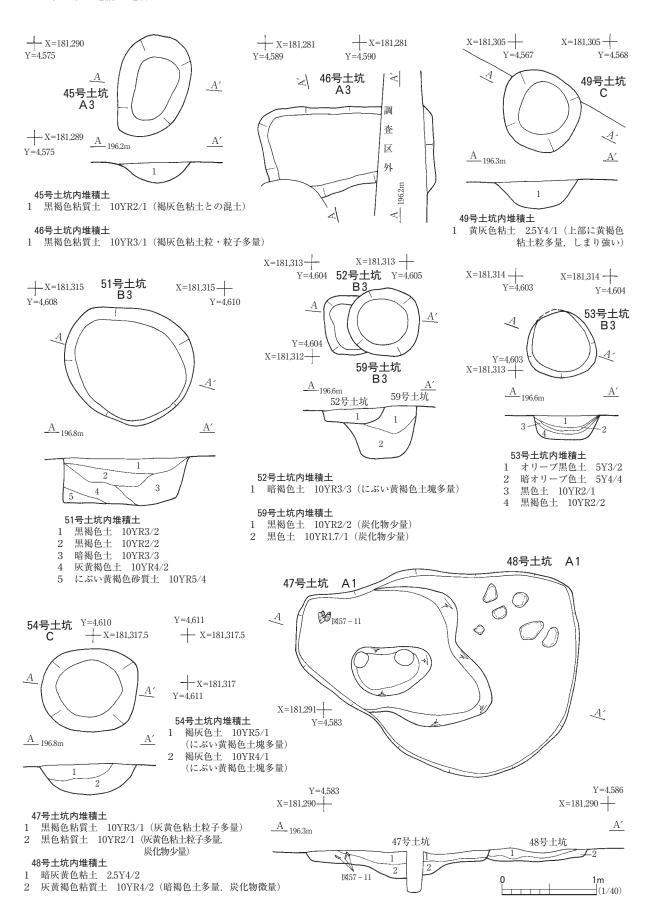


図64 土坑 (7) 45~49·51~54·59号土坑

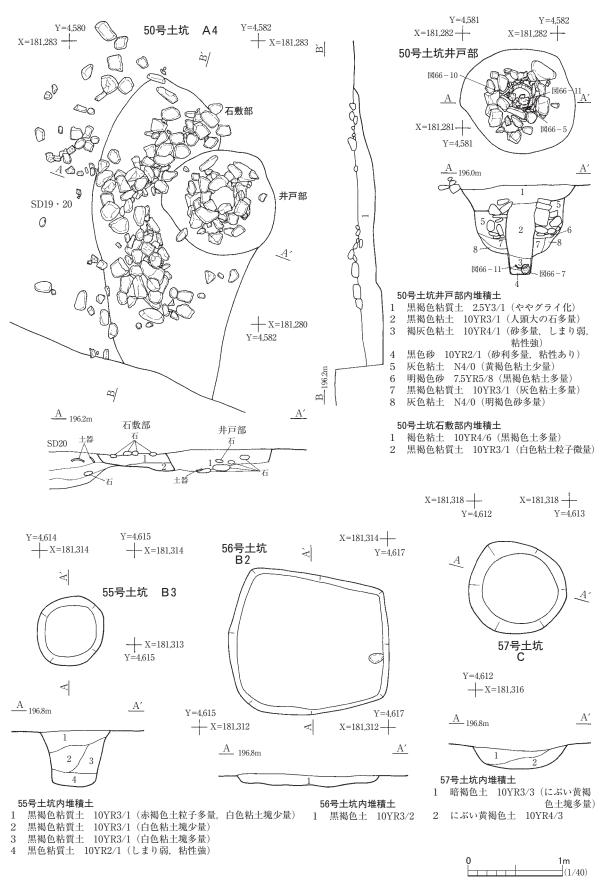


図65 土坑 (8) 50·55~57号土坑

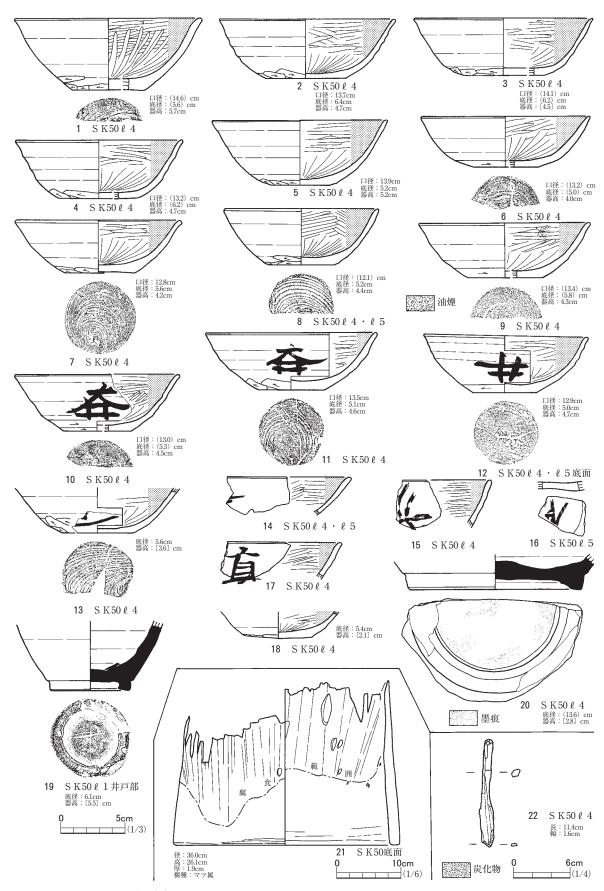
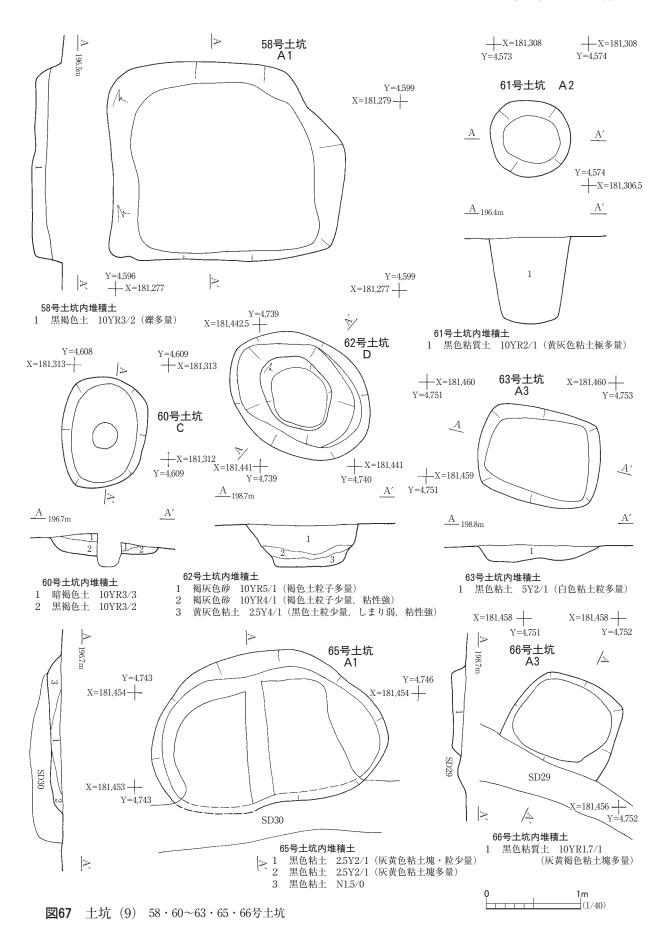


図66 土坑出土遺物(4)



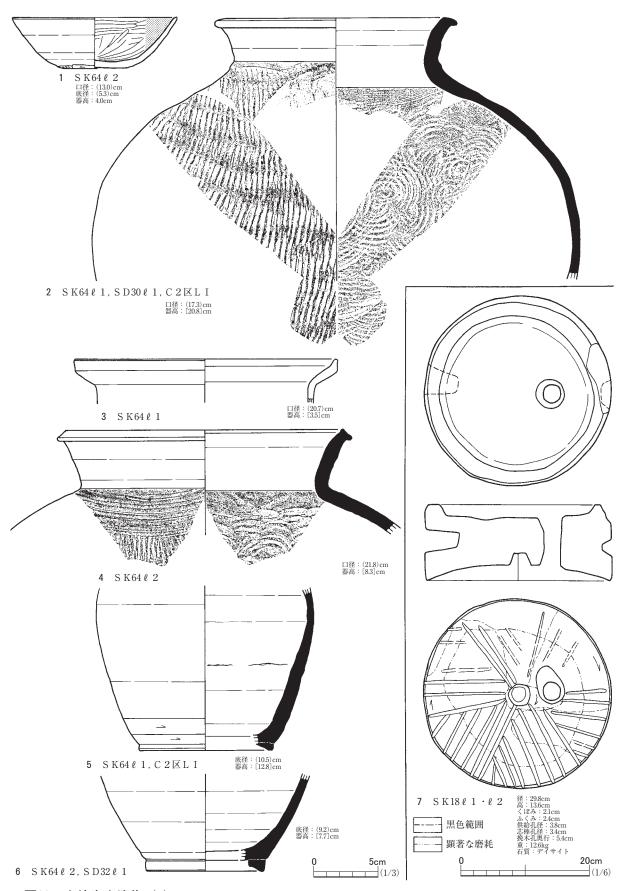
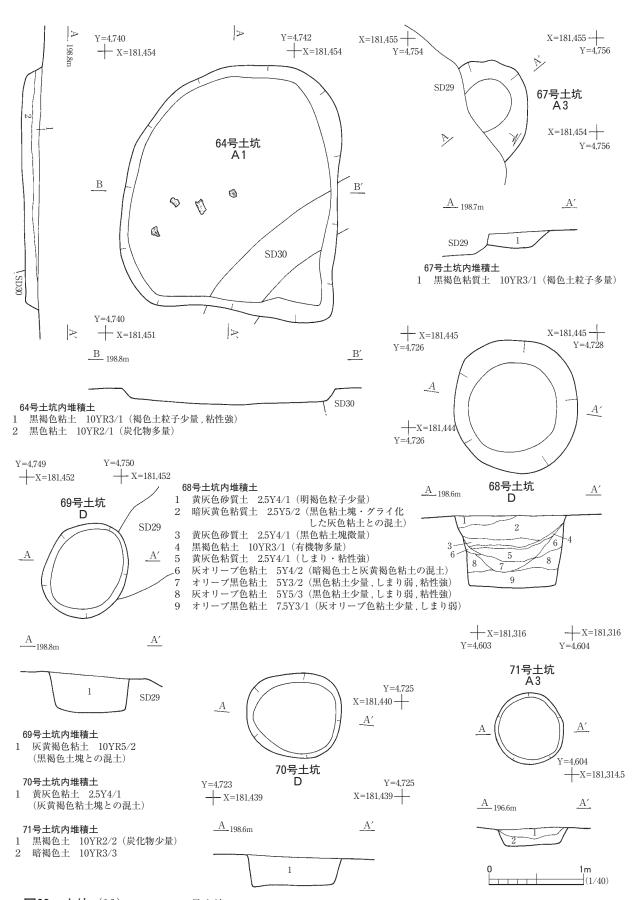


図68 土坑出土遺物(5)



**図69** 土坑(10) 64·67~71号土坑

して破片を東ねて井戸枠に立てかけた例(5)など特徴的な出土状態を示しており、祭祀行為が想定される。土師器は食膳具を主体とし、これらの中には墨書土器も含まれている。土師器杯はすべて内面黒色処理される。また、口径が13cmを超えるものが多く、器高も高い。器形は、体部がわずかに丸みをもつ例が多く、口端部が外反気味のもの( $1\sim 4\cdot 7\cdot 9\sim 11$ )とそのまま立ち上がるもの( $5\cdot 6\cdot 8\cdot 12$ )があり、前者が多い。

 $1\cdot 2\cdot 4\cdot 5\cdot 8\cdot 10\sim 12$ は器高/口径比が $0.34\sim 0.39$ と S K 42出土土師器に比べ大きく, S D 20出土のそれに近い値を示す。調整は体部下端に限られ,手持ちヘラケズリが多く( $1\sim 5\cdot 7\cdot 8\cdot 11\cdot 13\cdot 18$ ),回転ヘラケズリが少量認められる。 $10\sim 17$ は墨書土器である。 $10\cdot 11$ が「大」と「井」の組み合せ文字,12が「井」,17が「真」と読める。墨書土器の多くは,前述した  $\ell$  4 層中から出土している。 $19\cdot 20$ は須恵器である。20の底部には磨耗痕と黒色のシミが観察され,このシミは墨痕の可能性がある。これらの土器群は 9世紀末葉に比定される。

21は井戸部底面に設置されていた井戸枠である。マツ属の幹を刳り貫いて筒状にしたもので、丸頭の端部とその周辺には刃物による工具痕が確認できる。22はヘラ形を呈する箸状木製品で、両端部が炭化している。

SK64 (図68-1~6,写真77)

図68-1は9世紀後半に比定される土師器杯である。同図3はロクロ成形された土師器甕である。 小型で、口縁部が強く外反する。同図2は須恵器の広口壺、4が甕、5・6は長頸瓶である。

(菅原・佐藤)

# 第5節 地鎮遺構

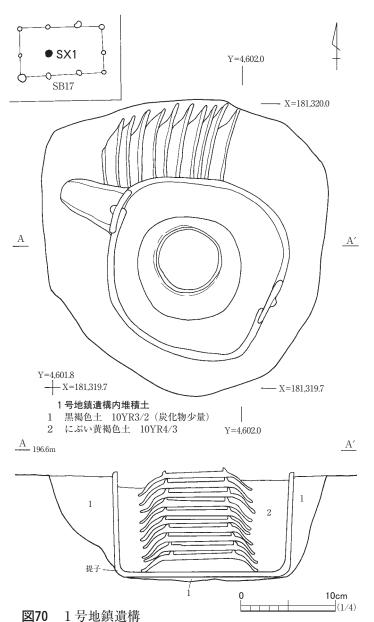
南区の中世方形館跡に伴うものが、1基認められる。

## 1号地鎮遺構 SX1

#### 遺 構 (図70. 写真68~70)

本遺構は、SB17の内部で検出された地鎮遺構である。その位置は、ちょうど同建物跡のP2-P8間、P5-P10間を結んだ交点と一致し(図70左上)、明らかにこの場所を意識的に選択して地鎮行為が行われたことが窺える。検出した段階で既に、銅製提子の上端が顔をのぞかせており、当時の掘り込み面からもさほど深く掘られていないと考えられる。調査区内の位置は、B3-A9グリッドにあたり、LII上面から検出された。

本遺構は、銅製提子の内部に磁器皿10枚を伏せて重ね、その脇に染付小皿10枚を横に重ねて、埋納したものである。埋納したピットは、径32×34cm、検出面からの深さ15cmを測る。この規模は、提子・皿・小皿を埋納するのに、ぎりぎりの大きさである。ピットと提子の間には、黒褐色の人為堆積土が認められた。また、提子内部には、にぶい黄褐色土が認められた。



遺物の状態 (図73)

次に、遺物取り上げ後に判明した ことを記述する。

提子と皿 銅製提子は、内部の皿と 土を残したまま取り上げた。整理作業は、まず東北芸術工科大学でX線 写真撮影を行い、皿がどのような状態で重なっているのかを調査した結果、10枚重ねられていることが判明した。間につまった土を取り除いた後、上から一枚一枚丁寧に剥がしていった。それぞれには、図73右下のように、個別の番号(内1~10)を付し、剥がした状況ごとに写真記録を残している。

注目されるのは、その過程で上から 3 枚めと 4 枚めの間(内 3 -4)、5 枚めと 6 枚めの間(内 5-6)、7 枚めと 8 枚めの間(内 7-8)に、穀類の殻が発見されたことである(口絵 3-d)。さらに一番下の皿を剥がしたところ、提子底面に十字掛けにされ

た縄が発見された(図71-1,写真87・口絵3-e)。これは、皿を縛っていたものと考えられる。また、提子自体も何かの容器に納められていた可能性があるが、提子の底はピット底面にほとんど密着していたことから、木箱のような厚みのあるものは想定しがたい。したがって、布のような薄い材質で包まれていたか、何も無かったとみるのが妥当と思われる。ただし、後者の場合でも、蓋は架けられていたのではなかろうか。

小 皿 提子脇の小皿は、重なった状態のまま遺構から取り上げた。整理作業では、提子内部の皿と同じように個別の番号(外  $1\sim10$ )を付し、一枚一枚丁寧に剥がしていった。その過程で、内面文様の違う 2 種類の小皿が、ほぼ交互に重ねられていることが判明している。意味は不明であるが、意識的に行われたのは確実と考えられる。

**遺 物**(図71~73. 写真78~83·87)

遺物は、銅製品1点、染付皿10枚、染付小皿10枚が出土している。

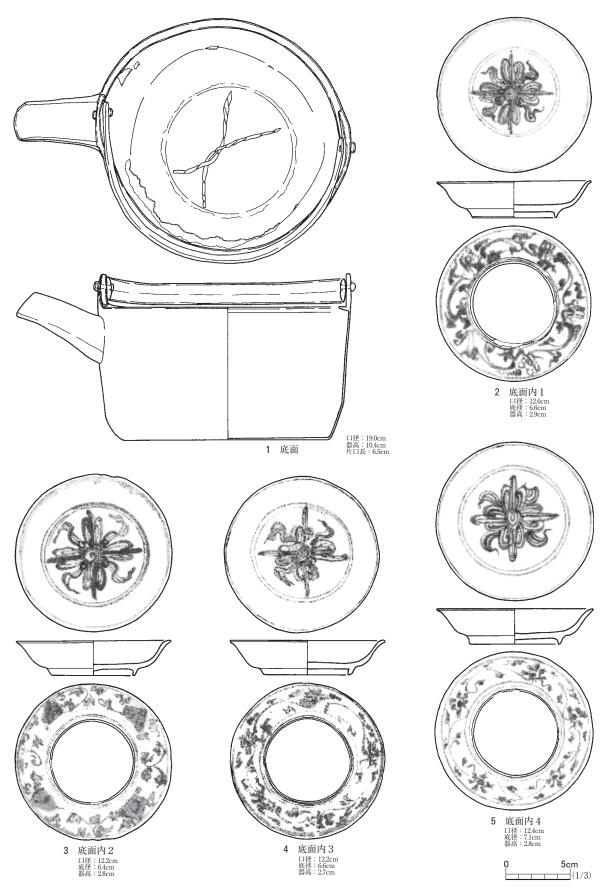


図71 1号地鎮遺構出土遺物(1)

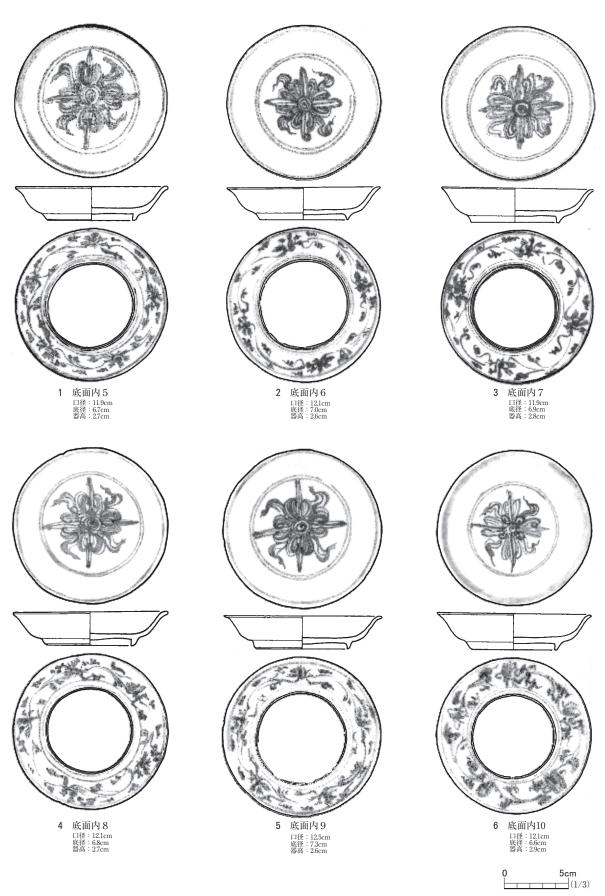


図72 1号地鎮遺構出土遺物(2)

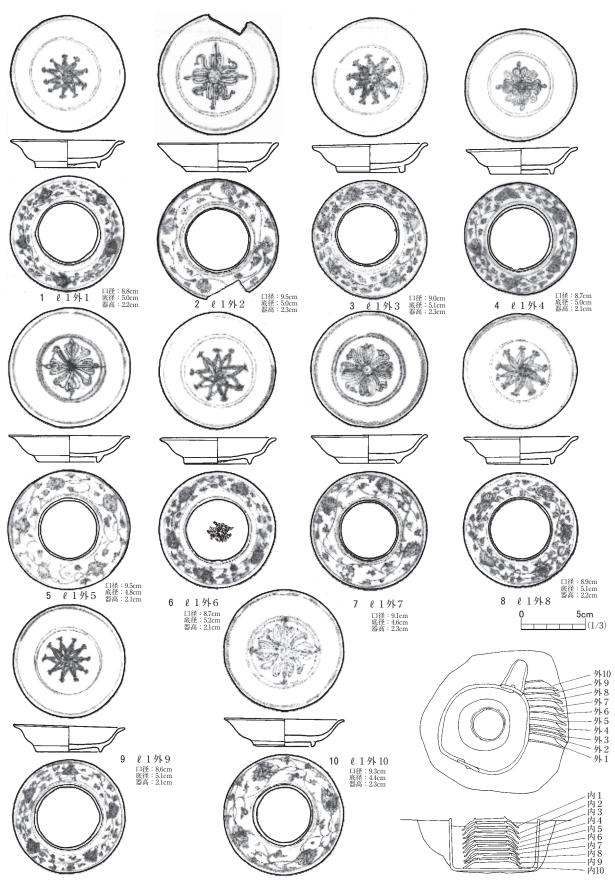


図73 1号地鎮遺構出土遺物(3)

図70-1は、銅製提子である。表面は緑青を吹いている。材質が単純な銅か合金の青銅なのかは、まだ分析していないため、不明である。遺存状態は、底部と胴部の境目に亀裂が生じており、弦はまだ動く。地鎮儀式に使用された酒器と考えられる。

図71-2~5, 図72-1~6は, 提子内部の染付皿である。明代龍泉窯系の製品で, 年代は15世紀後半~16世紀初頭に位置づけられる。外面は宝相華唐草文, 内面は十字花文である。焼成時の痕跡として, 高台と底部外面中央に, 離れ砂が付着している。

図73-1~10は、提子脇の染付小皿である。明代龍泉窯系の製品で、年代は15世紀後半~16世紀 初頭に位置づけられる。外面は宝相華唐草文、内面は十字花文で2種類ある。やはり、焼成時の痕 跡として、高台と底部外面中央に、離れ砂が付着している。

### まとめ

本遺構は、中世方形館跡に営まれた小規模な掘立柱建物跡に伴う地鎮遺構である。銅製提子と中国産染付皿・小皿が埋納されていた。類例は全国的にも少なく、貴重な発見と言える。なお、保存処理と分析は平成19年度に実施する予定である。 (菅 原)

# 第6節 小 穴 群 (図74~77, 写真48)

組み合わなかった小穴は約2,000個あり、分布傾向は、中世方形館跡の建物集中区と概ね重なっている。具体的に言うと、西が $SD8 \cdot 15$ 、東がSD7、北が $SB1 \cdot 12 \cdot 17 \sim 19 \cdot 29$ 、南が $SB1 \cdot SD15$ に囲まれた範囲で密集し、外側では希薄となって規模が小さくなる。このことから、主体をなす小穴は、方形館跡と同時期のものとみられる。

しかし、方形館跡の遺構に切られ、混入物の少ない黒色土の小穴も定量認められる。溝跡の所見を勘案すると、中世前期(12世紀後半~13世紀初頭)ないし平安時代(9世紀後半~10世紀中頃)に遡る小穴も含まれていると思われる。例えば、平安時代の井戸跡(SK50)周辺には、黒色土の小穴が集中し、また、調査区北西部では、中世前期の陶磁器類が偏ってみられる(図36-7・11~14、図58-1)など、古い時期の建物跡が局地的に営まれたことを示唆していると考えられる。

### 遺 物 (図78. 写真73・85・86)

土器類の他,銭貨 3 点・石製品 3 点を図示した。図78-1 は,A4-H1 グリッド P 2 底面から出土した染付碗である。肥前産で江戸時代の所産と考えられる。同図 2 は,A3-I10 グリッド P 8 から出土した土師器杯である。同図 3 は,A3-G10 グリッド P 1 から出土した青磁碗である。龍泉窯系の製品で,14~15世紀に位置づけられる。同図 4 は,須恵器甕の胴部片と推定される。内面にカキメが観察できる。同図 5 は,須恵器甕の胴部片である。外面に平行タタキメが観察できる。土師器・須恵器は平安時代の所産で,おおむね 9 世紀に比定できる。

図78-6は、B4-B1グリッドP1から出土した銭貨である。表面の遺存状態が悪く、種類は不明であるが、「天」の文字が観察される。同図7・8は、A3-J10グリッドP1から出土した

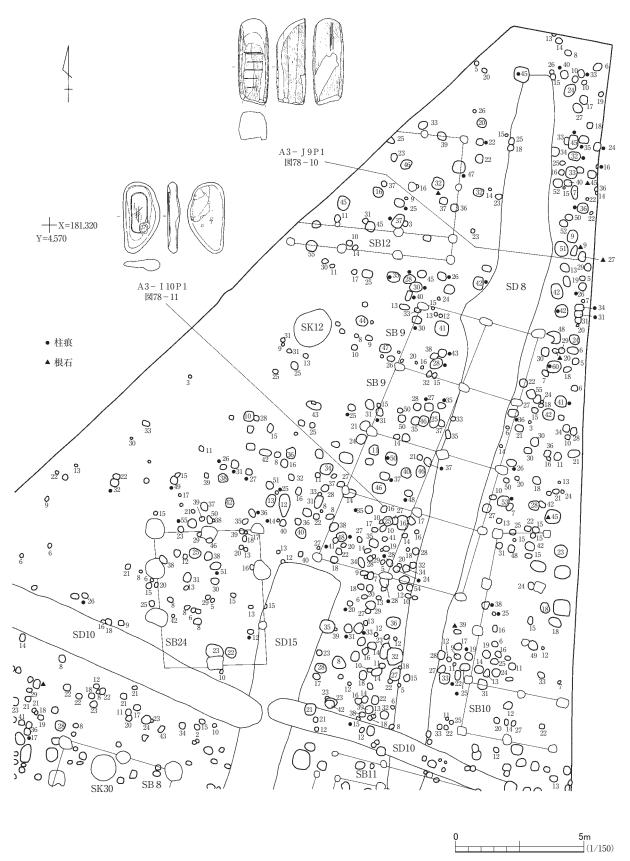


図74 小穴群(1)



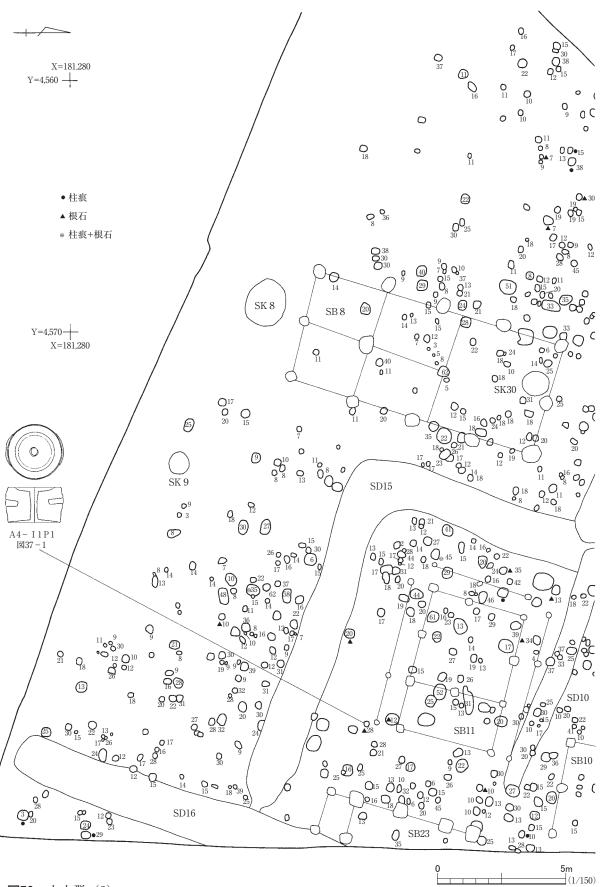


図76 小穴群 (3)

銭貨である。根固石の下に4枚重なっていたもので、7が一番上、8が2番目の個体に該当している。7は元豊通寶(初鋳1078年)、8は永楽通寶(初鋳1408年)である。残りの2枚は8と密着し、剥がせなかった。

図78 – 9 は、A4 - G1 グリッド P1 から出土した砥石である。材質は流紋岩で、表裏面と側面に使用痕が観察される。同図10は、A3 - J9 グリッド P1 から出土した砥石である。材質は流紋岩で、断面形はかまぼこ形に近い。また、表面頂部には鋭利な刃物を研いだ直線的な痕跡が残されている。同図11は、A3 - I10 グリッド P1 から出土した硯である。材質は流紋岩。自然石をそのまま利用し硯面は浅い。硯面下部に人為的な窪みがあり、黒色の付着物が観察でき、墨痕と推測される。

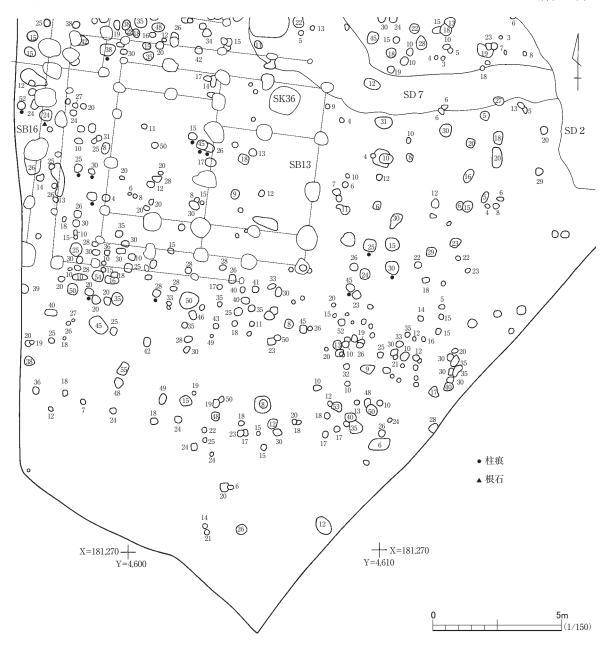


図77 小穴群(4)

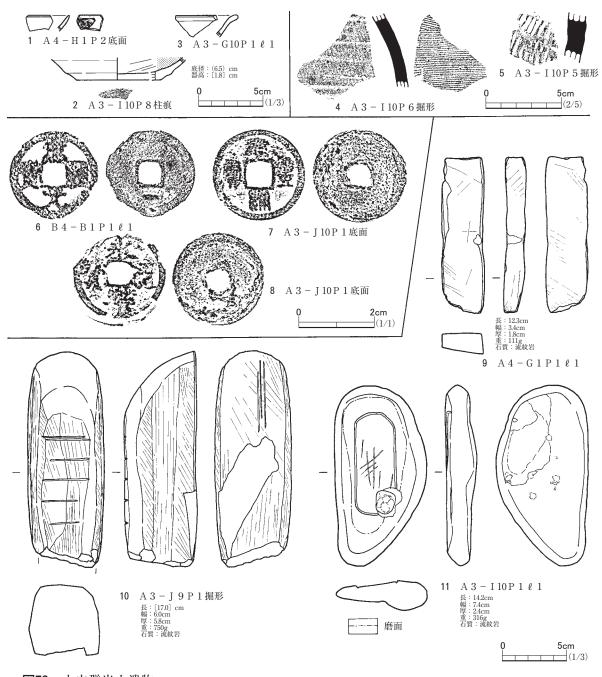


図78 小穴群出土遺物

# 第7節 遺構外出土遺物 (図79・80, 写真73・75・86)

遺構外から出土した遺物は、土師器1,937点、須恵器405点、陶磁器51点、石製品7点、金属製品6点を数える。以下には特徴ある遺物について記述していく。

図79-1~3・5 は土師器をまとめている。 $1\cdot 2\cdot 5$  は杯で、どれも内面黒色処理されている。 3 はロクロ成形の甕で口縁部内面は受口状を呈する。いずれも 9 世紀末の所産である。

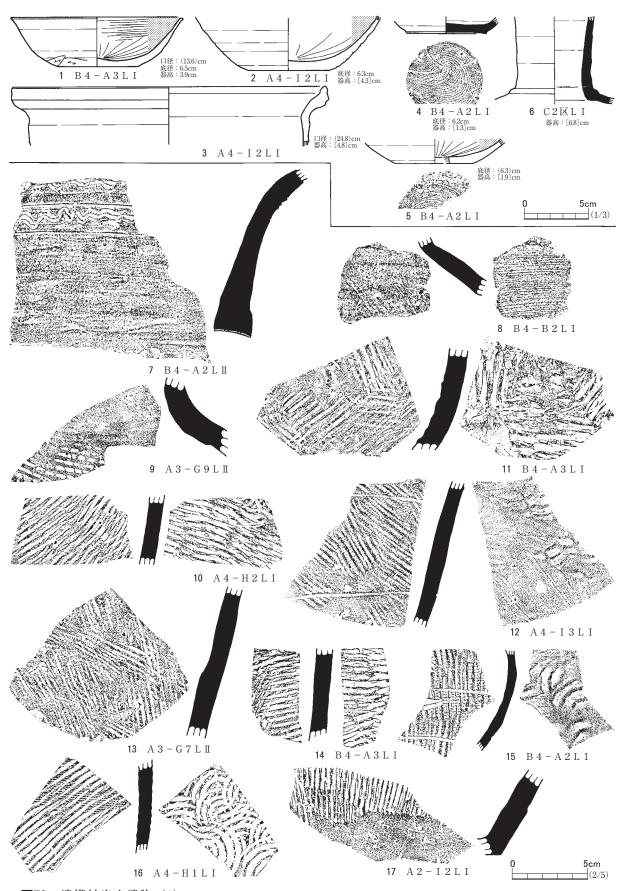


図79 遺構外出土遺物(1)

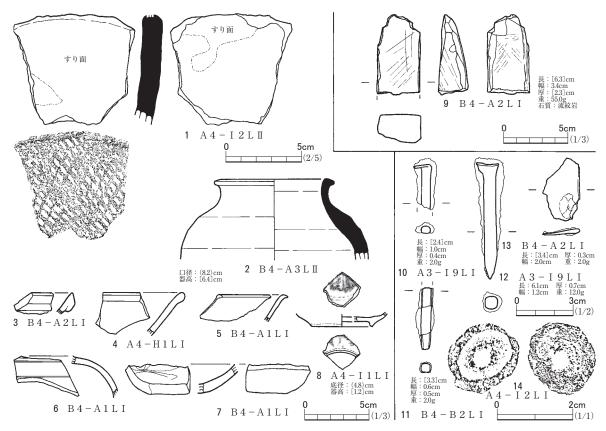


図80 遺構外出土遺物(2)

同図4・6~図80-2は須恵器で、杯(4)・長頸瓶(6)・短頸壺(図80-2)・大甕(7)があり、8~17は甕ないし瓶とみられる。 $12\cdot15$ には螺状沈線文が施され、大戸窯跡産とみられる。図80-1は転用された甕胴部片で、内外面には磨耗痕が観察される。

図80-3~8は陶磁器で、時期差が認められる。 $3\cdot 5\cdot 7$ は $12\sim 13$ 世紀代の所産である。3は白磁の玉縁碗で大宰府 $\mathbb{N}-4$ 類、5は同 $\mathbb{N}-4$ 類に該当する。7は龍泉窯系の青磁で、内面に片掘りの劃花文が描かれている。 $4\cdot 6$ は $14\sim 15$ 世紀代に比定できる。4は口端が肥厚する龍泉窯系の青磁碗で、6は濃い青色を呈することから高麗産の可能性が高い。8は染付皿で、呉須により体部外面に唐草文・内面見込みに十字花文が描かれている。 $16\sim 17$ 世紀代とみられる。

9 は流紋岩製の砥石で、形状は柱状を呈する。10~12は断面が方形を呈する釘である。13は幅広・ 薄手の鉄製品で、刀子と考えている。14は不整な円形を呈する粗悪な古銭である。 (佐藤)